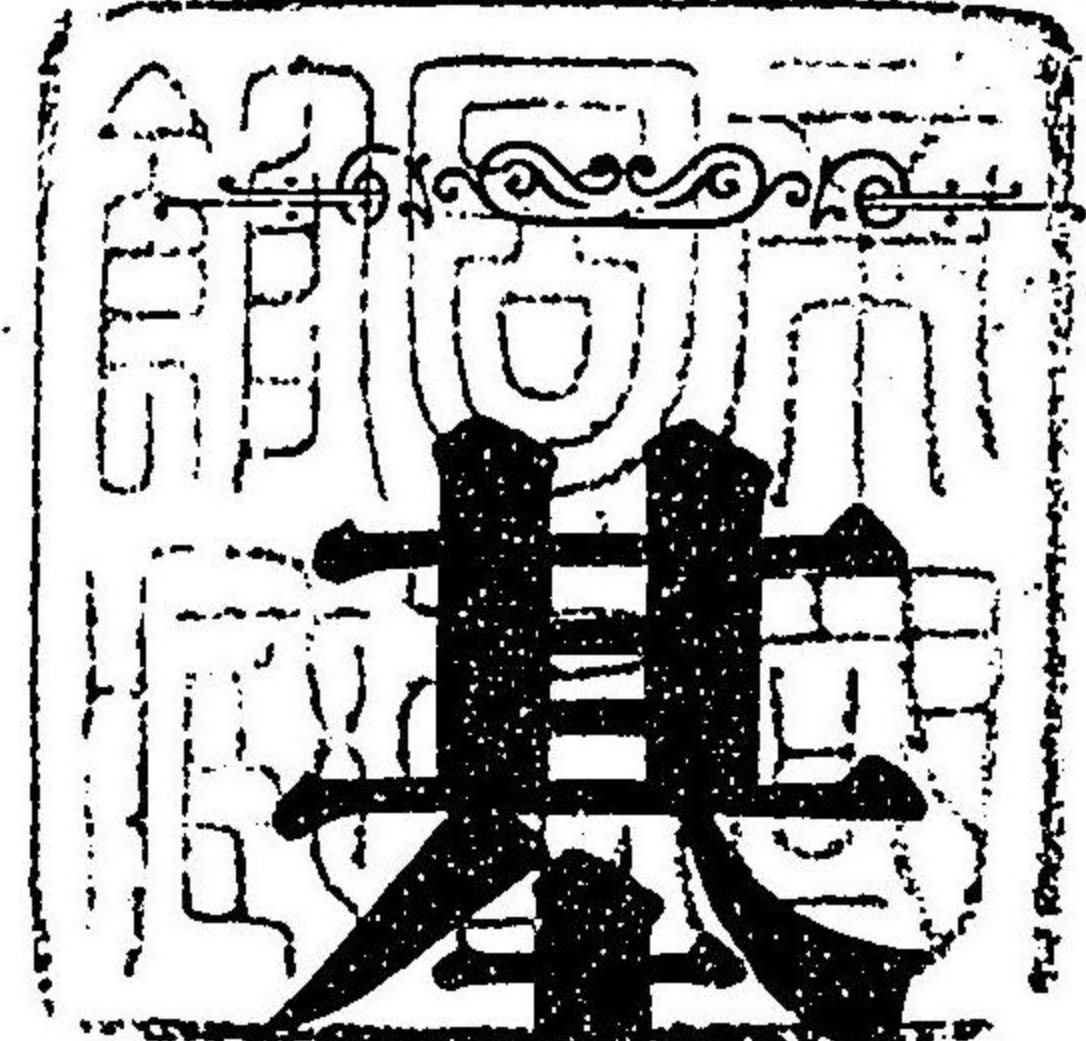


316-43

THE INCARNATE SAVIOUR.

W. ROBERTSON NICOLL, D.D., LL.D.



基督傳

二コル著
柏井園譯

東京 警醒社書店



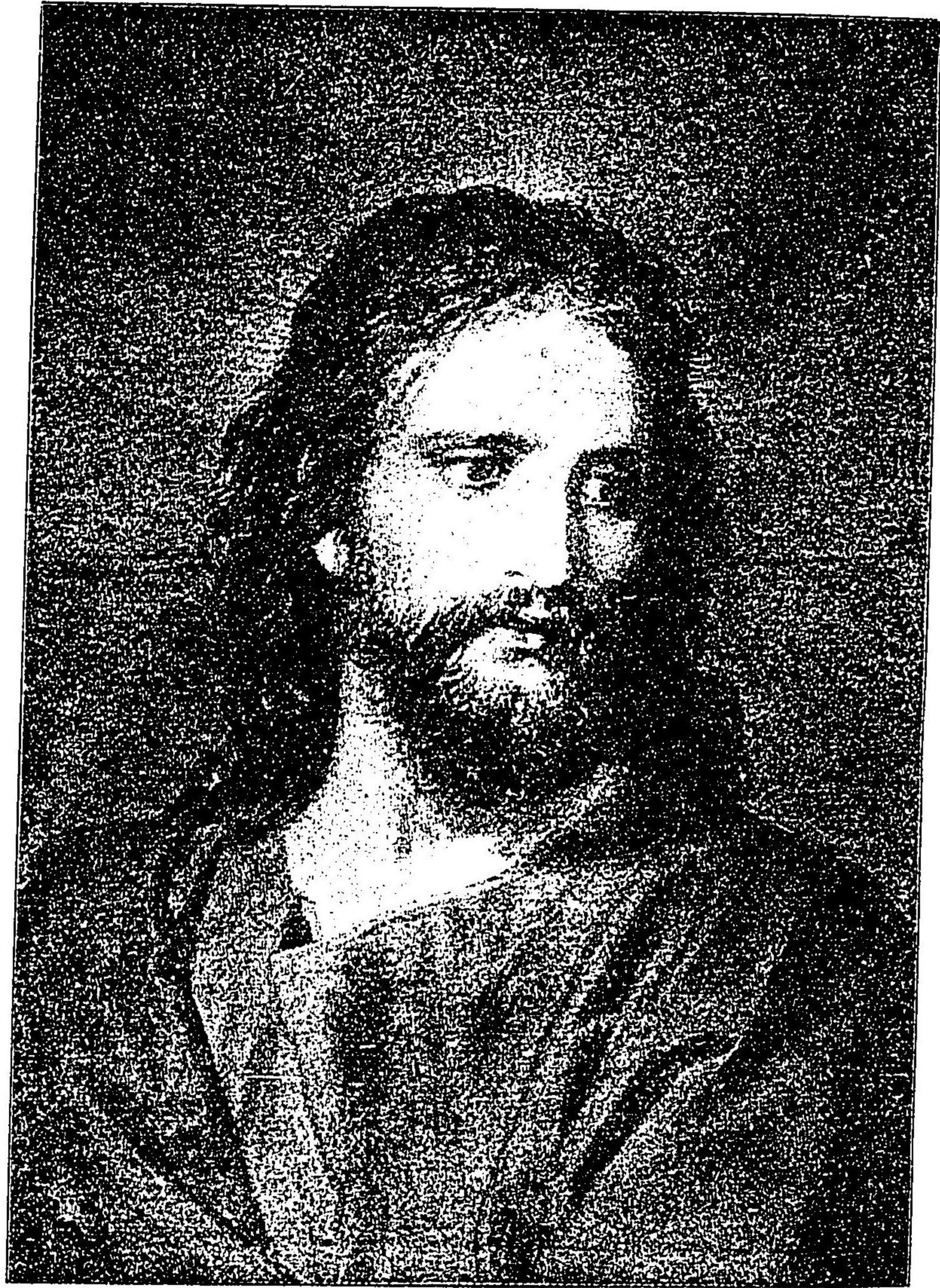
目 次

發 端	一
第 一 章 基督の誕生	九
第 二 章 基督の幼時	二二
第 三 章 静默の年月	三五
第 四 章 洗禮者ヨハネ	四七
第 五 章 基督の誘惑	六二
第 六 章 基督出世の目的及び名分	七六
第 七 章 基督の奇跡	九〇
第 八 章 基督の教訓	一一二
第 九 章 基督の使徒	一二六
第 十 章 基督と神との交通	一三八

基 督 傳

目 次

第十一章	基督と質問者.....	一五五
第十二章	基督と敵人との應對.....	一七二
第十三章	多忙なる勤勞.....	一八一
第十四章	基督の變貌.....	一九一
第十五章	十字架の先見.....	二〇一
第十六章	イスカリオテのユダ.....	二一四
第十七章	ゲッセマテ.....	二二七
第十八章	基督の審問.....	二三八
第十九章	十字架と十字架上の七言.....	二五二
第二十章	基督の埋葬及び復活.....	二六八
第二十一章	基督の復活的生命.....	二八三
第二十二章	基督の昇天.....	二九六
第二十三章	基督の品性.....	三一〇



基 督 傳

發 端

コボルトソン、ニユル著
柏 井 園 譯

イエス、キリストの傳記は新しき時代には復新しき筆を以て書かるべし。題意の含蓄盡くる時無く、人間の思想永に此處に嚮往す。其發源の神聖なるは此一事に依りても分明に證せらる。然れども予が今此書を著す本意は重ねて茲に外部的事實を類集し叙述せんが爲のみにあらず。夫れバレスナナの風物昔に替らぬ東方の習俗其國語の語格福音書の文學的形像當時思想界の形勢凡そ此等の事項は近代の非凡なる天才と學識を用ひて穿鑿せられたり。キリスト已に歴史上の人物たる以上は此等の諸件も亦宜しく商量すべきは固よりなりと雖も、キリストと其一生は

發 端

二
昔に千八百年の悲哀多き人間の歴史を隔てたる昔にありのみならずして、今日も猶此世に現存せり。時代の内に在りて又時代以上に超脱し、其生涯の意義竭くる時あらず。予が此書に於て専ら意を致さんと欲するは此の内部的の意義にあり。此書初はキリストの内部的傳記と名けんと思ひしも、内部の傳記を叙するに當りては併せて外部の事實をも語る必要あれば、此名亦妥當と謂ふ可らざるを思ふて已めり。されど書中外部の事實は専ら其處々に於て明にすべき主意に應じて擧げたるが故、多少大體の事實に通じたる讀者にあらざれば十分に解し難きの憾あるべし。又キリストの前には豫言あり、キリストの後には弟子等の加へたる解釋あり。爰には此等の前後の連続には直接に關與せずと雖も、説く所豫言者と使徒の所見と和合することは信じて疑はざる所なり。

之より叙述の間特に意を用ひて明にせんと欲する三大眼目あり。第一イエス、キリストは神にして又人なり、兩性の區別ありて人格は一なることなり。彼の人性は眞醇にして本然のものなれども、神性の光輝は斷絶せずこの間より發露し來る使徒ヨ

ハチが著したる福音書の冒頭に云ひし如く、「道肉跡となりて我等の中に宿れり我等は其榮を見る」思ふに爰に謂ふ所の榮光は單にキリストの變貌復活昇天等の絶大特異なる際にのみ表現せしにあらざして、日々の生活言語の常節にも現れて掩ふべからざるものありしならん。或る時イエス奇跡を行ひたる後弟子相互に問ふて曰く「此は如何ある人なるぞや」と。彼が人なることは弟子等の疑を抉まざる所なりしも、又人以上なるを思はしむる所のもの始終表れ來れり。其面色、其聲の調子、其手の所作は弟子を驚かし、彼等の心は燃やされて、尊崇奉事の念禁する能はざらしめたり。日々近く相接すれども又限り無く隔絶せる所あり。彼が一瞥の眼一音の調子は間を分割せり。弟子等が時に或は彼と同一水平に達せしかど想ひ初むる其時發せられし問は忽ち彼等をして謙遜を學ばしめ、無知の深みを啓き見せしめぬ。永遠の界より響けりと思はるゝ言を聽きては、斯人果してヨセフの子なるかと怪まざるを得ず。日常の事に譬へて云はば、茲に一人一席に集ひて心置きなく談する中、彼等よりも以上の人物が何時の間にか其席に雜ることあらんに、其人は縦し

少時實を包み得るとも必ず時を経ずして觀露さるべし。一音の調、一瞥の態に偽ること能はざるものあり。遂に「これ如何なる人なるぞ」との疑問を發せざることも能はず。

イエス、キリストは人を救ふ爲に自ら苦まんとして來れり、これ我等が明にせんと欲する第二の要點あり。彼の一生はベツレヘムの村にて始まりしにわらず永遠の昔より在りき。出世に先ちて其一生の綱目は夙く預言者によりて語られぬ。彼はこの古き聖言に應じて進めり。其の目的は年を経るに次第に立ちしにわらず、初より完成せる思想なり。人は歩一步摸索して小處より大處に登るなるに、彼は一度定りて復た改むるを要せざる計畫を抱きて出でたり。迎へ送る日々は常に意表の事を以て人を驚かし、我等は世波の爲に翻弄せらる。獨りキリストには逆め料らずして起り來る事わらず。一見連絡無く見ゆる事も總括して之を觀れば一の大統一を織り成せり。就中彼が初より死を預期して世に出でたる一事最も剴切にこの事を感せしむ。人死すれば其の生命中斷す。勝利と冠冕を前程に期して着手せる改革の事

發端

四

業未だ成らずして身死し事は已む誰か初よりこの事ありと夢視すべき。唯獨りキリストに於ては其死慘を極めたりしも、期せずして然りしにわらず。又之が爲其事業中斷せしにわらず。却て死即ち彼が爲さんとして來りし其事に外ならず。故に彼は仔細に自己の死を預言したり。人動もすれば輕心に讀み過せども、深く意を致すに隨ひて其神秘の彌々大なるを感せざるを得ず。人は己が死の日を知る能はず、これ普通の事にして息絶ゆる時の何時なるかは名醫も之を定むるに苦しむ。然るに其行程の發端より末終に懸けらるべき十字架あるを明に觀望し、其處を以て一生の希望と事業の失落する處なりとして悲まざるのみならず、十字の旗章は其下に自ら勝を取り又其徒をして勝たしむべき吉章なりとして自ら誇る斯人をば如何に言ふべきか。

十字架の影はキリストの全生に横りしこと、之を外にしては彼の生涯を解し得ざること、この影は搖籃の上にさへ騎されて其後彼の身を去りしとのなきこと、彼が生涯の進行は即ち十字架としての進行なりしことは、我等が章を逐ふて叙し出で

發端

五

六
んとする一事なり。古き教儒の言に是れあり、「真正の救主は何地に見出さるべきか。曰く羅馬の城門(異邦世界を表して)にて癩病人の間に坐し其の瘡を舐む人ぞ夫れある。』苦むことは救主の表號なり。

第三にキリストの言と行状と思想の美しく完全に整和せることを示さんとする。其の教訓を取ては彼果して教へし如く躬ら行ひしかを質し、彼の實行を取りては、此れ果して魔術者の巧技なるか。將た其心を映せる眞影なるかを檢せん。幽邃なる山中、静けき園、樓上の静居にまでも追隨して神との交通に耳を傾け、或は悲哀の境に於て、深密なる同情の動く時に於て彼の内性が端なく發露せる有り難き折節に注意せん。とす。請ふ此等の窓よりして彼の心情の活動を覗はしめよ。崇敬の念を以て、然かも精緻なる眼を以て萬事を審査せしめよ。然して後彼の生涯の總て一品にて成ことを知るを得ん。人の一生を觀れば中に破調を帯びざるなく、又眞面目の上に仮面を着けざるなきに、獨り斯人は如何に批摘を加ふるも假面の褪くべきなく、罪跡の責むべきを見ず。其生涯の秘密を發くべき鍵は唯一個あるのみ。語を更へ

て言へば彼が或る一の時一の處にてありし所の者は他の時と處に於ても同一様なり。福音書の鏡面を縦し千片に砕くとも片と悉く世界の救主たる神人の姿を寫さるるあり。

以上の三大眼目は敢て瑣細に拘泥せずと雖も始終心頭に置きて筆を執りたり。又此書は福音書中の歴史の眞實なるを認定し、直接不信者に向ひて辨證の態度を執らずと雖も全卷を一貫せる提論あり、即ち福音書に徴せられ得べきキリストの品性の和合と單一に原づきて立てたる重大なる提論にして、彼果して何處より來りしか、如何の想像力が彼の人物を作り出だせしか、彼は猶太の一平民の家庭より興り得べき人物なるか、彼は東方の風土の産物なるか、彼は實に自ら稱する所の者にありしか、これ我等が講究せんと欲する要點なり。キリストの人格と事業に就きて正しき教義を受けざる人は數々驚異の爲に論歩を進め得ざることなり。我等も亦彼に對する驚異の念は異らざれども、驚く點は多岐ならずして唯一點に集合す。即ち神が肉体を受けて現れたりとの一事あり。昔の人の言へるが如し「神よ爾は神



基 督 傳

發 端
の子なり爾はイスラエルの王なり』と。

第一章 基督の誕生

一人の嬰兒我等のために生れたり
我等は一人の子を與へられたり

僻村に生長して其の既往の歴史は殆ど知るに由なき少女マリアの靜なる生活の調べは今端なく破られぬ天使ガブリエル降りてこの少女に告げて曰く「慶たし惠まるゝ者よ、主汝と偕に在す汝は女の中にて福ある者なり」とマリアは天使の言を解するに苦む中、天使は重ねて彼が昔より約束ありし救主を生むべしとの消息を傳へたり。彼は古より聞きしことなき任命を託せられて其の意外にして絶大なるに心驚かさざらんや。埋れにし生涯よりして一朝神の至大なる目的を遂げ不思議なる事業を建つる器とせられぬ。代々神意の人に藉りて成し且進めらるゝ金鎖の末の一環となり最も高き處に懸けられんとす。彼によりて神と人と言ひ難き親縁を

結ぶべく、身は永遠なる子の母とならんとす。この召命は後如何に成り行くべきかは誰か夢にも知り得べき。召命の大なれば之が爲に堪ふべく譲るべく豫期すべきことも随つて大あらざるを得ず。初めて之を聴きし時少女の心如何なりけん想像せんとするは愚なり畏と喜と羞と驚は交々潮の如く柔けき胸一つに往來せし様の如何なりしか知ることを得ず。但知る深く且謙りたる從順を以て之に答へしを。彼は之より先きヨセフなるものと婚約したる身に於て此の時新しき生活に移るべき岸に立てり。希望と心配の翼廣く張れる時なれば言は情に驅られて輕しく口より漏れ易し。然るに聖天使の前に在りて假にも沮喪の態なく又得意の狀なく唯受けし使命の大なるに心は充たされたり。天使去りて後マリヤが神の言の成るを待てる心實に美しく且謙遜なりき。其の品質人にすぐれて單純清白にして又宗教心の篤かりしことは之によりて知らるべし。選ばれて救主の母となりし其の事は素より其の人品を証することなるが身に餘る光榮を受けしこの際の無意識と柔和は又證を加ふるにあらすや。神我と偕に在せり我神の目的を成すてふ一念の彼方

に總ての望も畏も己の爲にする心も包まれぬ。神この少女を大にせり。彼は神の仕女とされり。此の上は唯神の爲さんとし給ふに任すのみ。
マリヤの親戚にエリサベツなる婦人あり。マリヤが其家を訪ひしことは次に記されあり。エリサベツも今や猶太の婦人の願を掛くる男兒を生むの日近づけり。マリヤが其の門に音づれしとき茲に復た歡喜の言を以て迎へられつ。天使の消息は更に確められ又加へられぬ。曰く「女の中に於て汝は福なり。又胎に宿れる者も福なり」と。今まで心の深き底に秘めたりしことを信じて信じては慄きしことが思ひきや他人の口に上りて確實を保せられんとは。今まで抑へたる精神は忽ち發動して洋々たる歌となり神が賤しき身に施したる恩恵を讃詠せり。「万代までも我を福なるものと稱ふべし」と。良くも女心の喜を云へるかな。女の福は人を福にするにあり。抑もこの歌にて舊約は結ばれ新約の福音は響き始めぬ。其の形と彩とは依然たる希伯來の歌なれども其の思は將に來らんとして半なる默示を以て振ひ動けり。此の歌は之より早くあり難く又晚くあるべからず。「旭の光を受けし山嶺は遙に望ま

るれど之に到る道は尙淺霧にて包まれたり救贖の望既に固く大意畧ば明瞭されども委曲は未だ語り得ざる所全く猶太教のものにあらず又全く基督教のものにあらず海き一重の壁の上にあるを知る之より進むこと一步ならばこの歌は全く猶太のものたらん退くこと一步ならば全く基督教のものたらん

マリアは我が家に歸りぬ痛と悲とは今や神の特選を被りし大なる面目ととも身に掛らんとすヨセフは密に彼を離縁せんと心の起せしなり天の聖使と地の姉妹は齊しく彼を頌讃せるに引かへて耻づべき罪の疑を身に受けぬ此の間の反襯は如何に鋭く感せられけん殊にこの心痛を切ならしめしは夫と定まれるヨセフ情を知れる人にして穩密に離縁せんとせしにあり左れどマリアは神意の成り行くまゝに身を任せ初めて神の命に接せしとき心の心を失はざりき曰く我はこれ主の仕女なり爾の言の如くわれかし

胎内の兒は聖靈によりて孕まれたり「處女孕みて子を生まんとは古の聖書に記されたりキリストの生涯を正しく思量せんと欲する者は先づこの奇跡的懐胎よ

り始めざるべからずこれ果して偽ならんには根據なき迷信として之を放擲せよ又若し眞實ならば甚だ重大なる眞實にして始終之に照應せずしてはキリストの生涯を學ぶの迂なることを知らしめよキリストが人以上の人たることは先づこの處に表るればなりイエスは聖靈の兒なり其の家の系圖は聖書の中に載せられて中には有名の人あり又無名の人ありて顯晦相雜はれり然れどもこの中一人として罪惡の汚染を洗ひ盡くせし人あらず始祖の罪をば代々相傳へ幾百萬の人類中「見よ我れ横邪の内に生れ罪にありて我母我を孕みたり」と云ふを要せざる人何處にかある皆齊しく生れし時の傷ましき宿運を果たして逝く抑も如何にせばこの傳系を斷やさんか人類に屬したる一人によりて斷やさるを得べきか真理の影は早く人間自然の本能に映じて處女誕生の譚は多く異邦の宗教に散見し人間の直覺がキリストを得て實となるを示せりキリスト罪と戦はん爲め罪に沈淪せる人類を救ひ上げんが爲めに來れり他を救はん爲には自ら罪なきものたるを要す且つこの奇跡的誕生によりて彼がこの時生れしにあらずして只現はれたるを

知る彼は永遠の前より存在して今形と時の境界に入りしなり。左れば如何なる徴によりて、是の如き人の出現を標すべきか曰く自然法の中止によりてなり。彼は眞個の人として世に入れり然れども前にも後にも曾て有らざりし道に縁りて。且その嬰兒は分明なる使命を帯びて世に出でんとす。生るゝ前天使名を命じて「イエス」と云へり。彼は民を罪より救ふべきが故なり。猶ほ搖籃の裡に眠れる時其の命運は既に額の上に書かれたり。世間の小兒は皆これ一個の謎にして年月獨り能く其の秘密を解く富家の兒往々貧窮して死し多くの祈を以て育てられし小兒も行く未だに溺れ魔道に墮つるものなきにあらざり。獨りこの小兒は罪と戦ひて之に勝たん爲に來りたれば其語る事爲す事一として世の罪と關係のなきはあらず。而して其關係の及ぶ所至て大なるを知るが故に我等は其行跡を追求するに嚴正なる討究と悶へ苦むの熱心を以てせざるべからず。管に世に來りしときに罪なきを以て足れりとせず。初めて呼吸せし曉より其魂を神の手に托して世を辭せし時まで然かあらざるべからず。八方の襲來に抗抵して一點の汚れをも帯びざるべし。若し

基督傳

基督傳

夫れ一の惡念刹那にても透朗たる彼の魂を侵すことあらば万事已みなん罪より人を救ふべき救主は大小の戰場に於て必ず罪を征服し得るを要す。

却説ヨセフとマリアは羅馬の皇帝アウガスタスが天下に布ける勅令に遵ひ名を原籍に録せられん爲に、ナザレよりベツレヘムさして出で立ちぬ。二人どもに貧しと雖も素性賤しからずしてダビデ王の生邑ベツレヘムの籍に屬せしなり。百哩の路程を行き盡くしてベツレヘムに着せしに、折しも旅亭に客多くして入るべき處なかりければ、僅に庭の一隅の常なれば牛馬を繋ぐ處にて一夜を明かさんとす。如何に貧しき中なりとも婦人の身にある大なる苦の時には介抱に手を盡さざること奇き習あるに、こゝは知らぬ人の中あり、勞るべき女の手もなき處にて、處女なる母はこの夜初子を生み落としぬ。即ち之を布に裹みて馬槽の中に臥させたり。外には世間より打ち寄する波の音のみ騒がしくメサヤ世界の救主がこの夕木匠の妻より生れ出でしとは夫婦の外に知る人はあざりき。幾くもなくしてこの音信は單純にして朴直なる人々に天より傳へられぬ。心靈の

基督の傳

線に結ばれて彼等はツリアの親戚とも謂ひつべし。此の夜羊をベツレヘムの野外に護れる一群の牧夫あり。天使來り告げて曰く、それ今日ダビデの邑に於て救主汝等の爲に生れ給へり。これ主なるキリストあり。汝等布にて裹みし嬰兒の馬槽に臥せるを見む。これその徴あり。思はざりき、神明この世に出現せる深徴は天と地に照り渡る光明にはあらずして、纖弱なる嬰兒と馬槽の搖籃の裡にあらんとは。是に於て神の思は人の思と異なりける。基督の終生はこの發端と相添へり。彼は心なく落ち迷へる人間と合体せんとて世に來れり。人の性を着けて然かも爵位、富、文雅の粧ひある人性にあらずして、賤しく且貧しき人の境遇と經驗を身に着けたり。俗界の境遇は最も卑かりき。救主の特徴はこれにして、光榮其の間に燦然たりき。

搖籃を音づれし者は獨り牧夫のみにあらずき。彼が世に出る時の麗しさを見んとして諸王も亦來らんと古の預言ありしが、今や東國の博士は彼を拜せんが爲に沙漠を越えて來れり。此の人々の國は蓋し波斯の東方にあるバルシヤなるべく、東方の智慧を鍾め得たるマシと云へる種類の人なりしならん。當時天下何處にも救

基督の傳

世主の現るゝを待てるにつれて、彼等も同様の望を懷きたり。至誠謙遜なる探求の赤心は今酬いられて神靈の指導あり。彼等は一個の星を望み見つ。其光のある方向へて歩み幾晝夜の旅を重ねてエルサレムに着しけるが、此處より復た星を便りてベツレヘムに往けり。星は嬰兒の在る上に止まりぬ。博士等の信念は至て單純なりければ、王と崇めむ人の容貧しきにより心惑はず、信じて之を拜し。黄金と乳香と没薬とを捧げたり。彼等は知識上の奇異として此人を評價せんとせず。初めて人間存在の源泉に行き會ひし思ひして、其前に拜跪せり。イスラエル國人の光榮にして又異邦人の光たるべき君の搖籃を見たるこの異邦人は、万世の後まで陸續として彼の光明の許に詣るべき諸國民の魁となれり。

既に享けたる光に忠にして更に以上の光を索むる人には必ず之を與へらる。心正しくして待つ所ありしこの學者等は、其模型なり。溪間の水獨り靜に小なる路を流れて未遂に恩恵の大河に流れ入る。

彼等は又王者の模型なり。俗界の王者の外、心界の王者も亦心を寄せ來らんとす。キ

リストは識者の眞師なり。牧夫の如く卑賤なる者の中に知己を獲たるのみならず、賢くして尊ぶべき人物も亦之に心服し。詩歌、雄辯、學識は獻げられて其の用をなせり。然して地の貴品も貨物の中に洩れざりき。黄金、乳香、沒藥の貨物と單純にして疑念なき崇拜の精神は將來キリストの前に獻げられんとする物の初穂となれり。

イエス生れて第八日に割禮を受く、これ律法の定むる所にして之より以後神の誓約に與かり其の名を國民の籍に録せらるゝなり。この式終りて後兩親は嬰兒を携へてエルサレムの神殿に詣でぬ。其様を見れば何の異ある所あらざれど、今茲に抱かれて神殿に昇れる人はこれ神殿の主君なり。之を迎ふる人のなかるべき。年老いたる男と女の今は有事の齡を過ぎて唯死を待つばかりと見ゆるが出で迎へぬ。この聖徒二人は長くこの日を待ちしなり。老人シメオンは昔て主キリストを見ざる中は死なすとの約束を受けたり。之を受けしは猶ほ壯年の頃なりとせば、想ふに彼が其後の生活は一種の異彩を帯びて、魔力の加りし如く、又待つ所ありと見られしならん。思へらく、縦し世路幾多の難ありとも、我目救主を見るまでは死せずと、かく



基 督 傳

て年來り又去りて白頭の翁とありぬ。奮知多くは凋落し、神殿に昇るとき其の步履
踏たりき。何が故に斯く久しく天の外に空しく立たざるべからざるか。自から怪み
しならん。又老いたる女は名をアンナと云へる女預言者なり。其長き一生をば殆ん
ぞ神殿の内に過せしめて盡夜此處を去らず。一心籠めて祈りたることは神の美しき
を仰ぎ其の宮を觀んが爲に世に在らん限り神の家に住まんことなり。詩二十七
○七 嬰兒の神殿に携へ來られしこの日。此女は神の美しきを觀るの慶に逢ひたり。
これ即ち救主なることは老人老女に默示せられ二人齊しく頌讚の聲を揚げつ。今
は早や死して遺憾なきを知りぬ。幸なるかな。彼等はこの嬰兒の生涯が風雨悲劇の
裡に入るを見て夢を破らるゝまで世に留まらざりき。彼等は神靈に教へられてキ
リストを先見すること人よりも深く且眞なりしならん。然れども事を見るときに
堪ふるには必ずしも同じからず。彼等は生きて救主を見るを得たる喜猶は鮮なる
中に死して救主の實が己が夢想と符合せざるを見るの試鍊を経るを要せざりき。
他の人は生きて劍其の心胸を刺すの痛みあるに引きかへて彼等は劍を負ふこと

第一章 基督の誕生
なくして世を終れり。

シメオン聖靈に感じて年若き母に語りて云ひけるは、劍汝が心を刺し透すべしと、幾くもなくしてこの劍の鋭さは知られたり。此の國の王ヘロデは、今や年老いて病魔と悔恨に責めらるゝ折しも、イエスの生れしを聞き、東國の博士に其の處を訊さんどて待ちしに、彼等は夢の告を受け、都に歸らずして去りぬ。ヘロデ乃ち怒に乗じて兵士を遣はし、ベツレヘムの中にある嬰兒をば塵にせり。然れどもイエスは在らざりき。是より先き父母は神の命によりて埃及に遁れ、危険の去るまでかの國に留まれり。

抑イエスの生涯に謙遜と偉大の和合せること、神にして人たることはこの時既に見らるべし。見よ、十字架の影は搖籃の上にあへば横はれるを、昨は博士の禮拜を受け、て今日は埃及に遁れざるを得ず、彼は苦む爲に來る、苦は生とともに始まりぬ。埃及に遁れしことは、實にヘロデの横逆の手を免れしめしのみならず、イエスの一生の人間の發達の眞なるを保つに益ありき。若し彼にして始終異驗奇跡の空氣の

裡に育たしめば、自然なる發達を遂げ得べきや。幸にも茲に一音の斷間を餘して、奇は常に復りぬ。ヘロデ王の死後歸りてナザレの村に住ひしとき、前事は忘れられ、唯賤しき家に大工夫婦の子として生長したり。

第二章 基督の幼時

我は爾の証詞を深く思ふが故に
 我がすべての師に勝りて智慧多し
 我は爾の訓諭を守るが故に
 老たる者に勝りて事を辨ふるなり

イエスの幼時の記事極めて簡約にして人をして残り多く感せしむ。是に於て想像を加へて之を點綴せんと試みたる人あれども更に成し得たる所なく、たゞ人の想像力この境に及ばざること遠きを知らしむる効ありしのみ。夫れイエスは賤か屋に生長して父ヨセフ母マリアと同じ運命の道を辿りぬ。住みし里ナザレは潜まりたる小村にして粗野ある民此處に住めり。マリアの性質の妙なることは既に略ぼ寫し置けるが、ヨセフの謙遜にして正直なる亦この妻に相應しき夫ありき。この外



一家の内には弟と妹とありき。斯くイエスは最も健全なる蒸化の中に人と成り、晴和なる愛の空氣に包まれて、神の訓育を受けたり。固より學問ありとは云ふべからず。當時の學者の學問には達せざりしも、舊約書は誦じ慣れたり。希伯來の原文にて之を知りしことは、彼が原語にて引用せしによりて推さるべし。されどイエスが日常用ひし言語はアラマイック語とて、猶太の北部に行はれし地方言か、或は當時の教育語にして聖書以外の最大思想を載せたる希臘語かの中なりしならん。ナザレの村は住む人の野鄙なるに引きかへて自然の惠澤は頗る豊あり。パレスチナの中に、ナザレの如く花卉の音づれ繁き處はあらずと云ふ。村は谷の内に横はりて、大小の山四面を周れり。其の一は村より五百尺の高さに聳ゆ。世に珍しき壯麗の景なり。想ひ見るイエスの目は幾度か之に注ぎて、爽然たりしを。ヨセフは又譽高き吾が子に己が生業の初歩を習はせしならん。平和なる年月この間に移りぬ。

イエス、キリストは成熟したる上にて世に降ることを得しならん。然れども彼は嬰兒とありて生れぬ。嬰兒より幼兒となり、幼兒より青年となり、終に壯年に達する變

化の人に親しむるべきものを經たり夫れイエスには變はらざる要素あり。此は神なるものにして復た加ふべき所ならず。この外に變化すべき要素あり。之あるが爲に發達あり。イエスの幼時の傳記には世に謂ふ神童の如き話なし。後人の想像を用ひて畫き出だしたるものも、人をして實にこれありと思はしむる程のものもなし。或る鋭犀なる學者の説に、世人が英雄少時の奇談を語るを好む所以は大なる事は大なる天稟より出づるが故に始より非凡の材あるにあらざれば之と同じ事を爲し得べからずとの自信を援けんが爲あり。當否未だ知るべからざれども、イエスの幼時につきては、下文に記す一條の外には何の語もなし。彼の知識は生長せり。博く書を讀むで獲たる知識にはあらずして唯一の書籍より學びたる知識なり。彼は又知慧に於ても生成せり。知慧は知識の外あり。クウパーの詩に云へるが如し、
 知慧と知慧は一ならず聊も相繋がる節なきことも多し。知識は他人の思想もて埋められたる頭腦に宿れども、知慧は己の思ふ所に心を潜むる人のものなり。……知識は多く物識れるを誇りとし、知慧は知識の爰に止まるを悟りて自か

ら謙るなり。
 年月は立ちてイエスは彌増し神と人どに愛せられたり。
 イエスが十二歳の頃ありし話は記されて其幼少の節を留む。此の年其の両親はエルサレムの神殿に詣で小羊の犠牲をも獻せばやどて住む里を出で、都に上りぬ。この期節の間は外患にも備をなしたれば暫く家を遺すも慮なく、殘忍なるヘロデ王の事も忘るゝにはあらず。今はやさまで怖るしども思はず。親子三人旅路に上るこゝどなしぬ。婦人は必ずしも往くべきに定まり居らざれども、ハンナ、マリヤの如き信心深き婦人は之を償となさずして恩となし、強ひられざるが爲め益々勇むでこの務を果たしたり。
 今や初めてこの國祭に與からんとして行くイエスの心中幾分か想像され得べし。彼は田舎に生ひ立ちしこととて世間を觀るや明なりと雖も狭きを免れず。一たび上國に出で、人間生活の様を觀たく思ふ一種高尚なる好奇心ありしならん。正にこれ心の蕾を破る齡にして人間生活の驚奇を感ずる力未だ鈍れず。様々なる人情風

俗より其の歴史を聴きて未だ其の地を見ざる處々の風景殊に神の宮の廣大なる様を想像して行きしならん猶太の國風にては十二歳になれば一生の新時期に入る。聖書の試験を受け之れより後は成人として律法を遵守すべきものとなるなり。

請ふ想像の翼に翫してこの旅客の行く迹を追はしめよ。この邊は山賊猛獸の徘徊する處なれば旅人は防衛のために隊を組みて行くを常とす。道すがら歌をうたふ多分詩篇の第九十九以下の十六篇をば。アラビヤ人の間を過ぐる頃は禍なるかな我はメセクに宿りケダレの幕屋の傍に住めり」と歌ひつ漸く敵の地を離るれば我等の魂は鳥捕ふる者の罟を通る、鳥の如くに通れたり」と歌ふならん。行旅の親み般にして又偕に歌ふて曰く「見よ同胞相睦みて俱に居るはいかに善くいかに樂しきか」とイエスも聲を揚げて衆と俱に歌ひ歌の意をも辨へ得しならん。ヨルダン河をはじめ道中の山川は長く幼心に染められし物語の古跡を留むる處なれば之に對して懷舊の情想ふに堪へたり。既にしてエルサレムの都は遙に見ゆる旅客一



基督傳

聲に「我れ山に對ひて目を舉ぐ我が助は何處より來るや」と歌ふ岸高くして白石の
宏大なる神殿其上に列び立つを見しとき懐ひ如何なりけん世にエルサレムの
都はどなつかしみ慕はれたる處わらずさればその名は移されて天上の都にさへ
命せられたるなれイエスは嘗に形の壯麗に驚きしのみならず諸國よりこの祭の
爲に來りたる大衆が街上を群り行くに逢ひては胸豁くる思あきを得ず當時外國
の人にして猶太の宗教に歸依する者數多くして此等の人々も眞の神を拜せんが
爲に今此處に詣りしなり人類が神によりて統一を得る様の片破れの初めて茲に
映さるゝを人の子ば如何の感もて見たりけん散り亂れたる人々の心が彼自らに
よりて一團に結ばるゝとの事實は知らず彼の意識の裡如何なる趣にて感せられ
しぞ。

エルサレムに上る人の中には一人の家に宿するもわり斯くすれば小羊の皮と
料理に用ひたる器具一切を遺して主に酬ゆるを例とすされど盡く宿泊の家を得
る能はざる故其他は市外に天幕を張りて宿となす宿處定まりて後ヨセフは犠牲

基 督 傳

の小羊を殺さんか爲にイエスを携へて神殿に参せしなるべく、イエスは淋漓たる鮮血を黄金の杯に受けて燔祭の壇の下に灌ぐを見しならん。然して後小羊の骸を受け、己が天幕に歸り晚餐の支度をあす。晚餐の席には少くとも主客十人の數あるべし。始には小羊を炙り之を石榴の木に刺して爐火の上に置くなり。傍に酔いれぬ麵包の皿と苦菜の皿と濃き醬を容れたる器とを置く。この器は磚瓦の形に作り、埃及にて磚燒きし祖先の艱難を忘れぬ爲なりと云ふ。小羊を食ふ前にヨセフは赤葡萄酒の一杯を傾ひ、他の人も之に倣ふ。小羊を卓に上せたる後再び杯を充たす。この時小兒の一人或はイエスなりしか。家の主に向ひて此禮式に何の由緒あるかを問ふ。主たる人乃ち具に埃及を出でし昔の歴史を語り出づ。卓上の苦菜は當時の辛苦を紀念し、酔いれぬ麵包は埃及を出でしときの匆急を懐ふべし。詩篇の第百十三、百十四を歌ひ終りて小羊を切りて食ふ。復た三たび杯を舉げし後第百十五、百十八、百十九の詩篇を歌ひて事終る。

行事すべて果てぬればヨセフ等は歸路に就きしが、途中にてイエスの俱に歸らざ

基 督 傳

るに心づきたり。凡そ斯かる旅行には男は一組をなし、女は一組をなして、小兒は父母執れにても隨ひ行く風なりき。今兩親が早くイエスの居らざるに心づかざりしはこの譯ありしなるべく、且父母はこの兒に過誤あるべしと思はざれば初は左して憂ひざりしならん。此時イエスは再びエルサレムの神殿に昇り學者の多く集まれる處に入りて聴き又問ひつゝありしなり。知るべし、彼は僅か七日の滞在にては心満足せず、神の家を懐ふ熱心その心を飽へりと聖書に記されし、其の熱心は夙く既に燃え出でたり。ナザレにて過せし千日は此の聖き庭にて過す。一日に如かざりける。されば心は知識の愛に引かされて再び神殿に回り來つ。爰に大なる思想の動搖に觸るゝ喜び禁し難かりき。蕾の如く膨らみし思は花の如く開きぬ。此際必ずしも俄なる開發ありとするを要せず。彼が父母に語りし言は昨日今日の思にあらずして熟したる素心を漏らしたるを見る。彼は當に聞きし辭にて致へられしのみならず、其の音楽を聴き其の禮典を觀るにつけ、讚美の曲斷えず禮拜常に行はるゝ。天の故郷を懐ひしあらん。然して心の緒は彈せられて、美妙莊嚴なる音を出だせ

り此處ぞ即ち父の家にして大工の家は其れにあらざるを感せしならん。想ふにキリストの志整ひ計畫熟するまでには幾度か危機若し斯く名づけ得るあらばを歴たるべけれども我等の有する材料を以てしては之を揣り知るに足らず但だ此間にも眞醇ある人性を亂さるゝ事なかりしことは安じて云ひ得べし。イエスは神殿の裡にて初めて神の子たること、之に伴ふ委託を自覺せりとは思はれず其時の言の中に一種回顧の調を帯ふればなり且正則なる發展を経て又急なる啓示ありとは兩立し難き事なり然りとて又母の膝にありし日より既に世に出でゝ爲すべき事を覺悟したりとも思ふ能はず之も亦彼の性情と通常の發達に關する眞思想に戻ればなり我等は聖書に見ゆる如く知慧と身體ととも發育して神と人とに愛せられ芽は始めにありて次第に成熟したりしと知るのみにてこの外は語り得べからず。

却説父母はイエスのことに心づきしかば先づ近親知人の間に之を索めぬ監督ホルル氏この處を釋きて曰くキリストの父母は我子が偏寵ある陰氣なるストイツ

ク的人にあらす甘美にして人と親み易き性を有せるを知れり故に其の居らざるを見ても寂しき野原に迷ふ如きことを恐れず朋友隣人の群に雜りて時を移すならんとの想ひたりイエスが平素彼等と相語るの習なくば此時彼等の間に之を尋ねんや』と實にイエスは親戚のヨハナが野にて育ちしとは異なり彼は家にて生長し父と偕に働き母と偕に室に居り隣家に往來して隣人と親めり成長して後種々なる階級境遇の人と心置きなく相接して其喜び哀みの席に出入せし人は幼少より斯くありしなり詩人の云ひし如く小兒は大人の父なりける。

三日を経て後両親はイエスを見出せりイエスの歴史の發端に於て三日潜みし事あるは其終に於て同じく三日間潜みしと相應せり唯見る其顔純潔にして熱心現れたる一少年は堂々たる老學者の間にありて之に問ひつゝあり彼果して何等の事を問ひたりしか聖書の奧義に通せりと知られたる學者に接せしことなれば定めて聖書の意義を質したりしならん然して學者等は問はるゝ中に端なく新しき思想に邂逅し新しき光線を受くる思して却て一少年に教へられしならんイエス

の小羊を殺さんが爲にイエスを携へて神殿に参せしなるべく、イエスは淋漓たる鮮血を黄金の杯に受けて燔祭の壇の下に灌ぐを見しならん。然して後小羊の骸を受けて己が天幕に歸り晚餐の支度をあす。晚餐の席には少くとも主客十人の數あるべし。始には小羊を炙り之を石榴の木に刺して爐火の上に置くなり。傍に酔いれぬ麴包の皿と苦菜の皿と濃き醬を容れたる器とを置く。この器は磚瓦の形に作り、埃及にて磚燒きし祖先の艱難を忘れぬ爲なりと云ふ。小羊を食ふ前にヨセフは赤葡萄酒の一杯を傾むけ、他の人も之に倣ふ。小羊を卓に上せたる後再び杯を充たす。この時小兒の一人或はイエスなりしか。家の主に向ひて此禮式に何の由緒あるかを問ふ。主たる人乃ち具に埃及を出でし昔の歴史を語り出づ。卓上の苦菜は當時の辛苦を紀念し、酔いれぬ麴包は埃及を出でしときの匆急を懷ふべし。詩篇の第百十三、百十四を歌ひ終りて小羊を切りて食ふ。復た三たび杯を舉げし後第百十五、百十八、百十九の詩篇を歌ひて事終る。

行事すべて果てぬればヨセフ等は歸路に就きしが途中にてイエスの俱に歸らざ

るに心づきたり。凡そ斯かる旅行には男は一組をなし、女は一組をなして、小兒は父母孰れにても隨ひ行く風なりき。今兩親が早くイエスの居らざるに心づかざりしはこの譯ありしなるべく、且父母はこの兒に過誤あるべしと思はざれば初は左して愛ひざりしならん。此時イエスは再びエルサレムの神殿に昇り學者の多く集まる處に入りて聴き又問ひつゝありしなり。知るべし、彼は僅か七日の滞在にては心満足せず、神の家を懷ふ熱心その心を蝕へりと聖書に記されし、其の熱心は夙く既に燃え出でたり。ナザレにて過せし千日は此の聖き庭にて過す。一日に如かざりける。されば心は知識の愛に引かされて再び神殿に回り來つ。爰に大なる思想の動搖に觸るゝ、喜び禁し難かりき。蕾の如く膨らみし思は花の如く開きぬ。此際必ずしも俄なる開發ありとするを要せず。彼が父母に語りし言は昨日今日の思にあらずして、熟したる素心を漏らしたるを見る。彼は番に聞きし辭にて教へられしのみならず、其の音楽を聴き、其の禮典を観るにつけ、讚美の曲斷えず、禮拜常に行はるゝ天の故郷を懷ひし。然して心の緒は彈せられて、美妙莊嚴なる音を出だせ

第二章 基督の幼時

三十

り此處を即ち父の家にして大工の家は其れにあらざるを感せしならん。想ふにキリストの志、整ひ計畫熟するまでには幾度か危機若し斯く名づけ得るあらばを歴たるべけれども、我等の有する材料を以てしては之を揣り知るに足らず、但だ此間にも眞醇ある人性を亂さるゝ事なかりしことは安じて云ひ得べし。イエスは神殿の裡にて初めて神の子たること、之に伴ふ委託を自覺せりとは思はれず、其時の言の中に一種回顧の調を帯ふればなり、且正則なる發展を経て又急なる啓示ありとは兩立し難き事なり、然りとて又母の膝にありし日より既に世に出で、爲すべき事を覺悟したりとも思ふ能はず、之も亦彼の性情と通常の發達に關する眞思想に戻ればなり、我等は聖書に見ゆる如く知慧と身體ととも發育して神と人との愛せられ、芽は始めにありて次第に成熟したりしと知るのみにてこの外は語り得べからず。

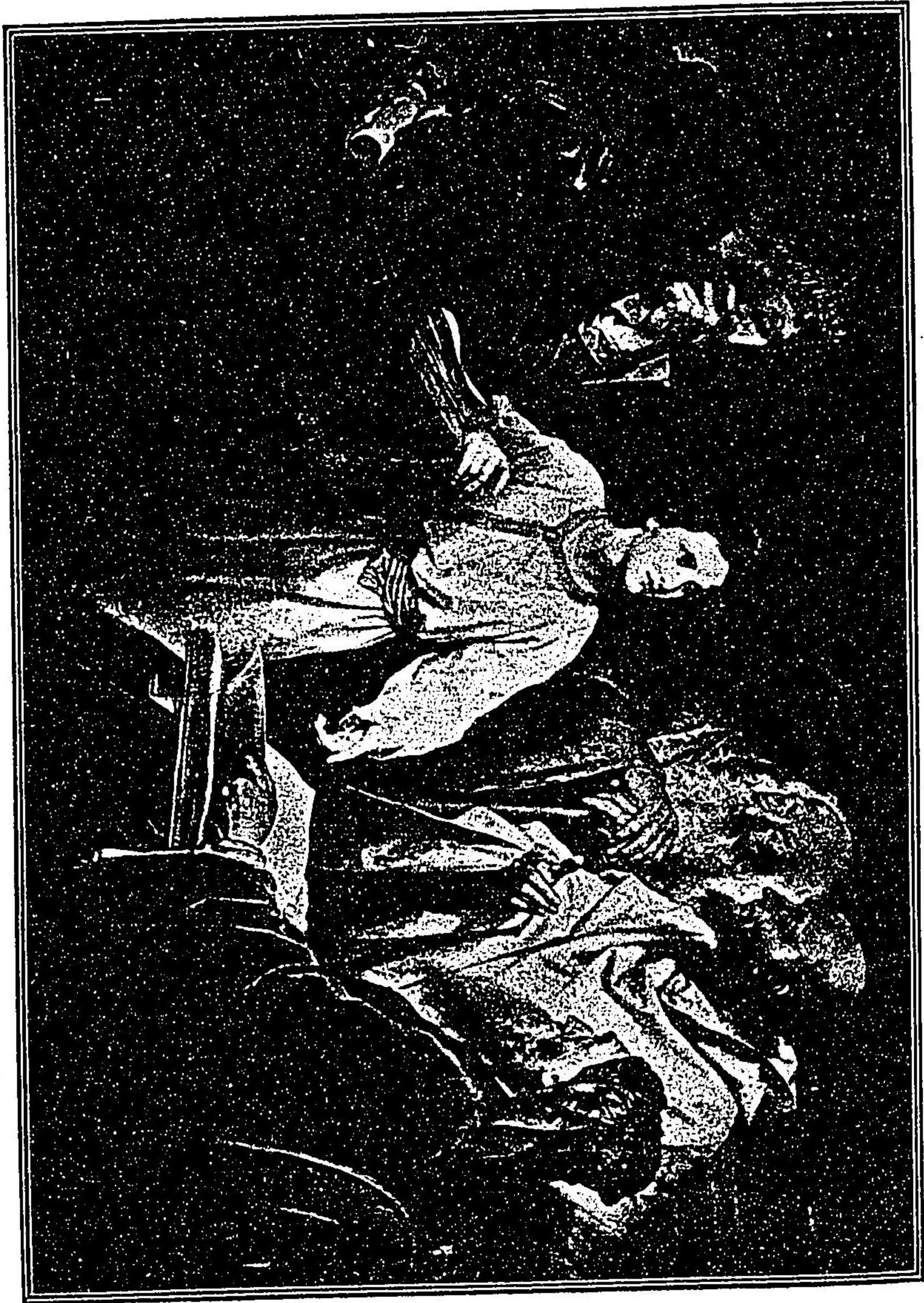
却説父母はイエスのことに心づきしかば先づ近親知人の間に之を索めぬ、監督ホルル氏この處を釋きて曰く「キリストの父母は我子が偏窟ある陰氣なるストイツ

ク的人にわらず、甘美にして人と親み易き性を有せるを知れり、故に其の居らざるを見ても寂しき野原に迷ふ如きことを恐れず、朋友隣人の群に雜りて時を移すならんとのみ想ひたり、イエスが平素彼等と相語るの習なくば、此時彼等の間に之を尋ねんや、實にイエスは親戚のヨハナが野にて育ちしとは異なり、彼は家にて生長し、父と偕に働き、母と偕に室に居り、隣家に往來して隣人と親めり、成長して後種々なる階級境遇の人と心置きなく相接して其喜び哀みの席に出入せし人は、幼少より斯くありしなり、詩人の云ひし如く小兒は大人の父なりける。

三日を経て後両親はイエスを見出せり、イエスの歴史の發端に於て三日潜みし事あるは、其終に於て同じく三日間潜みしと相應せり、唯見る、其顔純潔にして熱心現れたる一少年は堂々たる老學者の間にありて之に問ひつゝあり、彼果して何等の事を問ひたりしか、聖書の奧義に通せりと知られたる學者に接せしことなれば、定めて聖書の意義を質したりしならん、然して學者等は問はるゝ中に端なく新しき思想に邂逅し、新しき光線を受くる思ひして却て一少年に教へられしならん、イエス

は深く思へり、又聖書の言を踐み行へり、然れば今白晝の先生等が彼の了解力と其の應對に驚きて雷の耳に轟くが如く感せしむ不思議ならず、或人の曰ひしに「我が我が師たる教儒より多く學び、我が同學の教儒より一層多く學びぬ、然れども最も多く學び得しは我が門弟よりなり」と。

イエスは今しも両親の入り來るを見て其の側に進み寄りしならん、此時先づ言を發せしはヨセフにあらすして「マリアなりしことは注意すべし、イエスはヨセフに屬するよりはマリアに屬したり、マリア云へらく「子よ何ぞ我等にかくなしたるや、汝の父と我と愛ひて汝を尋ねたり」と、シメオンの預言せし如く、劍は今母親の心を刺し透しつゝあり、嘗て嬰兒を懷にして埃及に奔りし時、一度この劍の鋭さを覺たりしが、多年の無事の間に漸く之を忘れんとせり、今や復た其の鋒先に觸れて心悶へざるを得んや、イエスは答へて曰く「何故に我を尋ねるか、我は我が父の家に在るべきことを知らざるか」と、正しき譯に據る、この言の中聊も後悔の狀なく、又父母の心配を察する同情も無きが如くにて、父母が我が居る處を知るべくして知らざ



りしを穩に誠むるの意あり。又ヨセフは父にあらすして神其父なることを氣づく
るに似たり。彼が神殿にて學者に問ひ居りし事の何たるかは之によりて略推せら
るべし。此答を敷演すれば汝は我が形の麗しさに目を奪はれ或は遊樂を逐ふて衍
徨ふものにあらざるを知り給はずや。此處に來る爲ならずばいかで父母の許を離
るべきと云ふにあり。彼が畢生の主調はいかに夙く奏せられしぞ。其幼時は他の小
兒とはいかに異なる早く現實に手を觸れつ。笑ひ嬉ぶの暇少なく、十二歳にして彼
の父の業を始めしを思へば轉た哀れを感せしむ。我等の幼時は詩人の云る如く、
「心なく意り荒れ騒ぎ語り笑ひ躍り歌ひたり」然るに嚴なる影は早くも彼の額に翳
されたり。父母も己を知らざる時獨り一身の運命を辨へ得たり。然ども彼はナザレ
に歸りて後變りなく父母に孝順なりき。之が爲に勞し之が爲に使をなし、エルサレ
ムにてありし一波瀾はさかりしかの如くなりき。イエスと母との間には互に尊敬
を基とせる誠の愛ありき。「マリアは凡ての事を心に藏ゆぬ」とあり。我兒の生れし時
の嚴なる秘密を知れば假令幼少の纖弱を撫育せし長き年月の間には、我子の大な

るを思ふ念多少薄らぎたるにありしとすも、エルサレムにての事ありし後は復た之を忘るゝことを得ず心に徹すること深かりければなり。この後イエスは都遠き村里の平和なる月日を迎へ送りて、
 たゞ獨りたづき知られぬ思想の海原を渡れり。
 以上説きたる一條の事によりて知らるゝはイエスが早くより自己の目的を意識したりしことなり。この記事なかりせば彼の天分に關する意識は事業に着手する際初めて開けたりと誤り思ふともあらん。然れども之あるが爲に我等は知る其實は然らずしてイエスは沈黙せる時に於ても他年短くして強烈なる傳道の時代に現はせし其力を意識してありしとを彼は家庭と自然と聖書の感化により就中父なる神の靈妙なる恩化によりて生育せり。

第三章 靜默の年月

建てらるゝ間鏡の音其他鉄器の音聞こはざりき

之より後十八年餘の間キリストの生涯の記事は再び中断せり。たゞ他日其の郷人が「彼は木匠にあらすや」と相語りしことあるによりて僅に記されざる歴史の一端を探り得べきのみ。「未だ斯の人の如く語りし人あらず」とはイエスが世に出で、後人の評したる言なるが其の前半生を觀れば「未だ斯の人の如く默せる人あらず」と云ふも亦不可ならず。前章に記したる話に原づきて考ふれば彼が三十歳を待たずして何を成し得べきか、將た何を致へ得べきか、推知するに難からず。然るにこの長き歲月に爲せし所又我等に致ふる所は偏に「木匠」の一語に含めらる。この不思議

基 督 傳

なる沈黙に思ひ合はさるゝ他の沈黙の歴史あり傳へ云ふソロモン王の神殿を建つるときは最と静に工事を營み夥しき工人の手より一の響だに發らざりしとイエスは昔て己が身を神殿に比べたることあり昔の預言にも彼は祭司としてその寶坐に坐し神の爲に宮を建つべしとありされば茲にイエスの静默と神殿の静なる建築を雙べ語るも偶然にあらざる昔の建築者は流石に神を敬ふ心深かりき思へらく秘斧の音響々たるは通常の工事にはあるべけれど神の聖き宮は然るべからず神親から天地を造り給し時と同じく肅然として工事を營むべしと夫れイエスが黙して人と成りし歴史の裡大なる思想の籠もれるあり蓋この十八年間のみならず三十餘年の一生は渾てこれ深く斷間少き沈黙なりと云ふも亦可ならんナザレの天地静なる處に神の宮は聲なくして建てられつゝありき。

(一)これ制抑の時代なり。二)生長の時代なり。三)準備の時代あり。

基 督 傳

の適切なるに如かず其の然る條目は多しと雖も先づ見らるゝはイエスの貧ありヨセフは村の木匠にしてイエスも父を助けて生を營めり人に賤まるゝは彼の貧窮に沈まざりしかど必要以上に身を飾るの餘裕はあく後日の爲め貯へもなかりしならん他日更に甚しき貧窮の味を嘗むべきイエスは少時より既に貧なりきこの境遇は此人に相添へり何となればイエスキリストは世を救はんが爲に來れり然して世態如何に變ずるとも貧は人類多數の到底脱し難き境界なるべきか今然り後長くかくあらん左ればイスラエル國の祖先が國家を經營するに當り貧民をば商賈の中に加へたるなり夫れ人は獨立の面目を保ち難きはと究したる境涯に沈むものにあらず精神だにあらば大抵是の如く甚しきに至らずされば要するに富める人は常に少し世間常に富まざる多數の人ありて其人々はナザレの家を回顧してキリストと其一族が貧きに居り貧民の交習慣感情同情を有てる人あることを憶ふことを得るぞ幸なる貧しき人の生涯は見聞狭く波瀾乏しき月日を送り迎へて果ては死てふ大波の間に沈み行くかゝる生涯の如何なるものなるかイエ

基 督 傳

スは具に其の眞味を解したり。この實驗は彼が他年大なる事を爲すの準備となれり。後にナザレの會堂に立ちて讀みしイザア書中の『主の靈我に在す。故に我に膏を灌ぎて貧き者に福音を宣べ傳ふることを任じたり』との一語はイエス傳道の警語と云ふべし。イエスの教を聴きしは多くガリラヤの賤民にて、イエスは彼等の爲め教を立てたり。彼はナザレに住みたる間に貧民の需むる所に通じ得たり。彼等の戦は苦くして誘惑亦多きを知り、麵包の爲め日々力を銷すること多き人をして目に見ゆる事物を思はしむるの困難なること、禽獸に近き生活を營む中には自重の念の亡するは避け難きことを知れり。ナザレは小き村なれども風俗の惡しきことは著名なる土地なりければ、キリストは罪惡の不幸、敗壞、醜辱の狀をば仔細に觀察するの機會を得たり。是に於てイエスは學び得たり。貧民の需むる宗教は知力の上の大なる要求を課せずして、心情を満足せしむる宗教にてあらざるべからず。學問思想の材料を興ふる者たらんよりは、友となりて能く人生行旅の間に之を扶け、勞はり、其の果つる處に待てる大なる變化に臨んで助を興へ得るの教たるを要す。

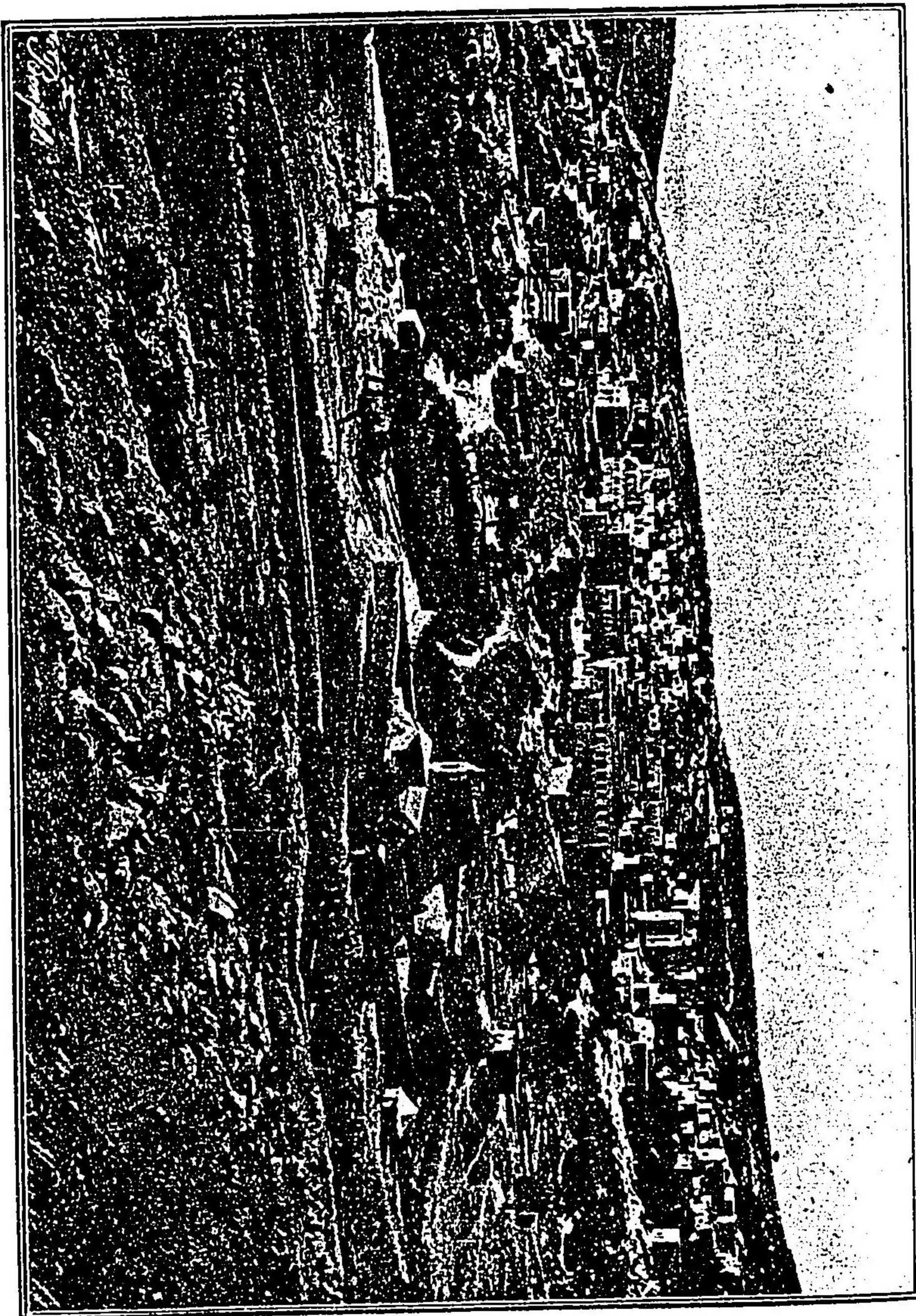
基 督 傳

『貧しき人に取りては人生は徹頭徹尾現實なり。其の希望不安、歡喜心痛、浮沈の變斯の世斯の我斯の行末の容易ならぬことを臆ながらにも感得る念は皆貧の爲に鋭くなれり。貧しき人にして宗教に入ることをあらば、其の信する神を崇高なる知識的の眞理となすよりも、服従愛慕すべき神なりとする方に繰らざるべからず』(リッポン)。キリストは此點に於て能く學べき所を學びたるは、貧しき人喜びて其の教を聴きしによりて知り得べし。貧しき者の心を得んが爲にイエスは譬喩を設け、單純なる辭を用ひ、深き同情を籠めて教へたり。若し夫現今の基督教會に於て落ち果てにし多數の貧者を思ふ心に欠くる所あらば、キリストの本旨と模範を離れたり。と云はざるべからず。

キリストは又自己の腕を勞して働きたる人なり。彼れ自ら木匠たりしことは疑を容れざるべし。父ヨセフは早く死せしと見ゆ。イエスは家の長子なれば扶養の任を一身に負はざるを得ず。彼は數年の間、木匠の作事場にて忍んで勞苦せり。又何故にこの職を擇びしやと問はれ、父の業を繼ぐこと自然なりと答ふる外に解釋は

なからん或は此職は規矩の直さに依るが故にイエスは之によりて是非の正しきを學びたりなど譬喩的に理由を付するものあれどもいづれも附會に過ぎたりた
い注意すべきことば、イエスが普通の勞働に光を加へ遊食の人或は腦力を用ふる
人が動もすれば腕を以て動く人を輕ずるの却て賤しむべきを知らしめたること
なり。

此時イエスは名聲世に聞こぬざりき。夫れ名譽は雄心ある者の競ひ取らんと欲す
る所なれば、この競走場外に排し落とさるゝ人之に準じて益々多からざるを得ず。
一代の上に掲がれる大名は少數者の擧にする所にして、其餘の人々は單純にして
名なく隠れたる生活に安するなり。イエスはこの多くの人々と境遇を同じくする
を以て満足せり。されば一生名譽の地位に上り得ざる人或は一たび地位を得て終
に其より以上に進み得ざる人或は一郷の内一事業の狭き範圍の外に名の聞こぬ
ざる人はキリストより慰めを受くべし。縦しや其身は埋もれて紛々たる俗流に知
られず稱へられずとも、其處に偉大にして氣高き生涯を送り得べきことばキリス



トによりて教へ示されぬ漫に大事を爲すことを求めて小事を輕する人の學ぶべき所こゝにあり、良く小事を爲し得る人ならば又能く大事をも爲し得べけれど、大事を爲し得る人にして小事の爲に蹉く人往々にしてあり、我師の爲ならば死をも辭せしと躁りしヘテロにしてゲツセマテの園中にて目を醒まし居る能はざりき、靜に經營せらるゝ事は長き後に於て必ず勝を占ひ埋没と貧に處して着々として事を爲すことはキリストの實例によりて貴くせられ聖化せられたり、世には身世の埋没に堪ふる能はず好き名を獲る能はずばせめて只名を弘く知られんことを欲する人さへあり、キリストは世狀の日に惡に向ふを見たり、世は罪惡の場とあり、怒海の浪は渦きて人の一生はあはれ其間に破船す、神の言と神の心は誤解せられて明に觀得る人あらず、之を見聞しながらもイエスは神の定めし時節の到るまで沈黙せり、彼は人に愛し懷はれ、又不思議にも人の肺腑に纏ひ付く力ありたれど、人に異りたる人と思はれず、木匠の家の奇兒と稱へられざりしが、如しされば他年世に現はれて事業を始めし時、平素相識りし人も識らざる人も齊しく驚き奇みて、

これは木匠の子にわらずやと云ひしなり。その兄弟等も始は彼を信する能はざりき。この間の事は後年の言行よりも却て直接に我等の鑑となる。我等はキリストの如く世界の事業を爲す能はず。彼の如き言を語り、彼の如き奇跡を行ひ、彼の如き苦難に逢ふこと能はざらん。静に勤勞し、謙りて名の顯れざる生活をなしつゝ、彼に隨ひ學ぶことを求めらる偏にキリストの公生涯のみを見て私生涯を忘れなば失ふ所多からん。後者は人に近きが故に亦近き教訓あり。

基 督 傳

第二、この時代は生長の時代なり。既に言ひし如く分明なる條目を立て、キリストの發達の順序を標すべき材料聖書の中になし。唯知る彼に變せざる素質あり、又變じ得る所のものあり。故に其の發達は單に發達と見ゆる所のものにあらずして眞實の發達なりき。注意すべきは彼が静默の間に生長せしことなり。建つる時には聲あり生長する時には聲なし。花開けば自ら朝日の射す方に向ひ、回る日影を逐ふて面を翻しつゝ、其の麗光を飲みて花輪日々に大さを加ふ。キリストは花の生長する

基 督 傳

が如く生長せり。百花の夜半に生長する音を聞き得る珍しき耳もてる人ありしとかや、そは昔の譚なり。神の大なる製作は常に聲なくして成さる。イエスは昔の神殿が石と石と滑に相合ふて肅然として建て上げられし如く生長せり。豊に恩光を受けて生長せんと欲せば、靜定の所あるべきあり。キリストとともに神の内に潜める聖き生命を受けて己が心靈を築かんと欲せば、靜なる潜まりたる處にてつくつゝ、キリストの精神と教訓に心を入れ浸すべし。イエスキリストは静境に於て力を得たり。

第三、この時代は又準備の時代なり。心と身との準備はこの間に整へられたり。自然の麗澤なる感化に浴して其の筋骨は固められ、清潔にして健康ある生活を営み得べき素質を作り、三年間の傳道の烈しき勞苦に堪ふるものとせられたり。清潔にして汚れなき体格にして初めてこの重任を負ふを得べし。或る病婦が竊にイエスの衣に觸れしとき、イエスは力の我が身より出づるを覺わたりと云へり。獨りこの

基 督 傳

時のみならず、三年の間力は断絶間なく彼の身より出でたり。この消費を支ふべき力は長き静養の間に蓄積せられぬ。身軀の準備ありしどもに心の準備ありき。彼は聖書を學んで深く造詣し、之を体して自己の一分となせり。彼は又常に事物に注意すること精細にして具に人間の様を學びたり。遂に長き準備の時代卒りて神の召命の下りしときにはイエスは心残りなく身支度してありき。彼が傳道の全歴史は彼が斯くして立ちしことを證明せり。若しイエスの傳記にして想像の筆にならしめば、必ず黙して十八年を過さしめざりしならん。幼くしてエルサレムの學者を驚かしたる人なれば、其後も都に留りて一躍して學者の第一位を占めしならん。奇偉なる行をなせしならん。其生涯の全幅は記憶すべき言行をもて餘地なく埋められしならん。人の想像せんと欲する所は是の如し。神の經綸は之と異にして賢き受勳の境に十八年を過さしめたり。

キリストは準備の時代に於て如何なる準備を爲せしかば略ぼ次第を尋ね得べく、又之を尋ね得ずともこの年月を空しくせりと思ふ能はず。觀來れば畢生の準備は

基 督 傳

唯一の言を留め一の行を爲すがためとなる人も少からず。又準備既に足りて事業を成すの時を得ずして終る人更に多し。多年兀々として辛苦を重ねたる末、功業の遺るものなく立言世を裨益するなくして逝く。準備は是に至りて空に歸したるか否彼方に永遠の天地はあるにわらずや。モーセにしてミデアンの野に羊を牧ふ時に死なしめば、彼の一生は徒爾なりしか。否爲す事ある天地は永遠にまでも延びたり。墳墓の彼方に於て我を待てる大なる功業あり。これ人生に於て、學ぶを要する意義深き教訓なり。己が力を展ばすべき原野の未だ見ぬざるに拘らず怠らずして自己の力を開拓して進む。信念の明かにして勝利を得せしむる所以は是にあり。早く己が伎倆を揮ふべき地を求めて心促かるゝは信すること薄きが故なり。従容として己が品質を磨き器既に成れば之を神に捧げて神の嘉みし給ふ時と處に之を用ひられんことを俟つは、信仰によりて得らるべき高尚なる志なり。イエス、キリストは黙して十八年をナザレの村にて過せり。其の結果は如何。『其の行動は僅に數年なり。然れども力を短き間に集め強列にして無限に及ぶ行動あり。其間の一言一行

として感應せざりしはなく、究りなく宇宙に感應せざりしものなし。黙すること十八年、然る後立ちて世界の革新を成就し、天父の事業を果たしぬ。

第四章 洗禮者ヨハ子

婦の生みたる者の中未だ洗禮のヨハ子よりも大なる者は興らざりき、然れども天國の最も小き者も彼よりは大なるなり。

人の一代と其間の事業は錯綜を極めたるものなれば、之に簡短なる評論を加ふるものありども、未だ容易に信を措く能はず。人の歴史に含まれたる秘密をば小品の文字に束ね了るは我等の取らざる所なり。然るにキリスト、精神の主宰にして又審判者たるキリストは洗禮者ヨハ子の人物につきて簡短なる断定を下して曰く、婦の生みたる者の中未だバプテスマのヨハ子よりも大なる者は起らざりき。然れども天國の最も小き者も彼よりは大なる也。この言を讀んで先づ我等が人の評論

は頼むに足らずと云ひしことの果して誤らざりしを知る。何となればキリストのヨハネを評するを見るに節々人の思はざる所を云ひ、人の之あらんと期する所は、この中に見るを得ざるにわらずや。我等の尋常の思より見れば、歴史上に於てヨハネよりも以上の位置に置かんと欲する幾多の人物あり。又基督教の信者の微々たる者を取りてヨハネよりも大なりとは思ひ難し。然れどもキリストの断定は我等を誤らざる指針たるを信するが故に、先づヨハネの一生を概観し、然る後何れの處か大にして又何れの處か小なるかを質さんどす。

ヨハネの生涯の始は野に於て過したり。世間の事多く虚偽にして眞實ならざるに倦みしならん。彼は乃ち己が心一個を友として語らばんが爲に野に往けり。その間彼の心は又舊約書中の預言者と親しく契りしならん。古の人の感化と荒野の光景の留めたる痕迹は、兩つながら彼が他日教へたる中に歴然たるを見る。ヨハネは人間の偽を離れたる處にて遂に眞理を見出だし得たり。未だ眞理の全豹を觀るに至らざりしも、確乎として信する所あり、以て當代に告げ得べき使命を授かりたり。

一たび之を授かりたる上はいかで空しく之を沙漠の風に散らすべき。同胞に負へるこの債を拂はざるべからず。言は中に燃えて抑ふる能はず。是に於て其の辞と其の方式とをば世間の常格に適合せしむるに違わらずして、この剛強なる男兒は己を現して驚き合へる猶太人の前に立ち、己は即ち救主の前驅にして、救主其人は來らんとし、して早や門口にあることを宣言したり。

徐々たる行程を遡りて人間歴史の向ふ方を指導し、聞け來る神の業と神の意を人に知らしむるは神の操り用ふる道なり。東天白み初めて曙の近きを告げ、曙の色は日出の近づけるを告ぐ。回顧すれば、代々の預言者相繼ぎて起り、キリストの出世を預言せしが、其曉の來ること遅くして、預言者の聲も亦熄みぬ。歲月は獨り流れて休まず。竟に茲にキリストの日を回り來らせぬ。其日の近づけるときヨハネは天の命によりて世を警め、彼等が待ちに待ちたる救主の來るの近きを報じぬ。

之に加へてヨハネが當時の人に告ぐべきことは、彼等が救主の來るを待つ用意なきことなり。彼等の生活は今や眞實を失ひて、罪に蔽はれたれば、出で、斯の君を迎

基 督 傳

へんと欲せば、先づ根柢より生涯を一變せざるべからず。猶太の老木に斧は加へられんとす、救主は手に斧を携へて其禾場を掃き清め、糠は火に投げ入れんとす。「悔い改めよ」とはこの嚴格なる預言者の主張したる使命なり、之を一人若くは一部の人の向うて云ふにあらす、總ての人に向うて云ふなり、深く外形の底に徹したる内心の改革を首唱するはヨハ子の使命なり、曰く天國は近づけり、悔い改めよ。人の性情と良心に向ひて直截に至誠を以て語り得る人は意外に速なる反響を受くること多く、意はざる方面より之を受くるなり、ヨハ子の赤誠は隠るべくもなく、其説く所の真理は嘗て無量の苦戦を経て得來りし真理なれば、世人が歎んで之を聴くの熱心は自ら驚くばかりなりき、彼は罪を責めて恕することなかりしも、人をして敵意を起さしめず、驕れる學者とパリサイ黨の人ども亦來りぬ、彼は聴く人の爲めに肯て斟酌を加へず、我こそは律法を奉じて完全に幾しと自負せる人々に向ひても來るべき神の怒を免るゝことを促したり、精神餓えて病めるに似たりし人心は能くヨハ子を認識し得たり、専心神の言をのみ語るに満足せる人は常に此類の

基 督 傳

人に識らるる全國の人皆出で、ヨハ子の許に到り罪の懺悔をなしたるを見れば、國民を壓したる病患の甚だ重かりしを知る可し、中には救主の聖音の近づけるに引かれて來りし人も多かりしならん、然れどもヨハ子の風を聴きて深く己の罪責を感じたる一念は主として彼等を動かしたるならん。
ヨハ子は病を指して之を感せしむれども、之を療す能はず、唯云ふ悔い改めよ。彼は水を以て洗禮を施せるのみにて未だ心底の汚染に手を着けて之を洗ひ去る能はず、若し夫れキリストの傳教の人を熱せしめ深く肺肝に入るの性質を火に喩ふるを得ば、ヨハ子の教の冷にして心に飽かず力足らざるは當に水に喩ふべし、イエスの來るを見し後はヨハ子は云へり「世の罪を負へる神の小羊を見よ」と、ヨハ子は舊約書中の理想なる「苦を受くる神の僕」を懐ひつゝ、此言を語りしは疑ふべくもあらず、ヨハ子は風にイエスの謙遜なる平生を傳へ聞き、今又イエスの風采に接して、イザヤ書第五十三章に描かれたる人爰に在るを思はざるを得ざりき、然れどもこの時は特に天來の啓發によりて此言を爲し得しものにして、ヨハ子がキリスト

Handwritten mark or signature at the bottom left of the page.

を觀るの思想の未だ充分に整はず、苦むキリストと審判するキリストとこの兩面を照らし合はず能はざりき。左れば「罪を負ふ小羊」の意義は一たび言ひ出でたるも之を説き果たすこと能はざりき。ヨハチは曉の傳令使なり。彼は新しき國を指點したれど、自ら之に入る能はず、又其の案内を詳にするに能はざりき。

ヨハチは其後ヘロデ王の宮廷に在り。此處にて彼が一生の試験を受けたり。天濶く風自由に吹く野に在りて道を証して屈せざるは彼が能くする所あり。然れども一たび不羈の精神を懷きて軟弱なる宮廷の空氣の裡に入る。これ實に危うし。知らず、彼は歴史上に多くある宮中説教家一流の人とあり。了るべきか。王の耳に逆らはざるやうに其の使命を加減せんとするか。王の悪行には目を嵩がんとするか。否々ヨハチは良心の化身たるかの如く儼然としてヘロデに臨みたり。ヘロデは素より暴横にして又弱く檢束なき人なりしも、時々善心を發することあり。ヨハチをば義人聖人として尊敬し、其教誡に遵ひしことも少なからず。然るに彼が終に斷つ能はざる一の罪縁あり。兄弟フィリッポの妻との不義の關係これなり。嚴格なる説教者

は斷えず諫めて曰く、その婦を娶るは宜しからずと。夫れ唯一の箇條に於てなりども徹頭徹尾良心の命に従はざるは良心の全体に背くと同一あり。汝この婦を娶るは宜しからずとヨハチの此言は凛然としてヘロデと寵妾の耳朶を打ち止ます。彼等をして憚々として安き心からしめたり。如何にか之を處せざるべからず。王は初より全く良心の聲を打ち消すことをせずして、姑く之を包み伏せんとせり。これ多くの人のなす事なり。彼はヨハチを獄に入れて、其聲の城中宴安の樓に聞ゆる處に遠けたり。如何せん隔てられし聲も猶時々罪人の耳に響き來るを、歌舞の音斷ゆる間に良心の聲は何處ともなく襲ひ來り、其時こそは嘗て之を聴きしときよりも一層鋭く耳を刺す。斯の如くしてヘロデは時々我にもあらで微暗き獄屋の階を降りて預言者の坐せる處に行かざるを得ず。行きて歸るときは平生に似ず心痛む如く身戦けり。此暗影は自から毒婦ヘロデアにも映りて彼女は之を堪ふる能はず。遂にはこの聲を無きものにせんと決心せり。かくて一夜酒宴の席にてヘロデアの娘舞をまひしに王之を悦び、欲するものは領土の半ばなりとも與へんと約束せり。

娘は母の教唆に従ひ、ヨハ子の首を賜はれど乞ふ王深く自ら悲めり誰か好んで良心を殺すべき自己の分身ある良心を殺すは即ち自殺するなりされど最早如何ともすべからざれば請を容し、ヨハ子は此の夜獄中にて斬首せられぬ凄まじき贈品は煌々たる燭光の下に運ばれぬ。ヘロデは其面色我を責むるに似たる首級を見て、今は己が良心を殺したるを覺えぬ。良心既に死すればこの後は心苦しまず、但疑心暗鬼の恐怖を殘したるのみ。ヘロデはこの後法廷にてイエスを見しことあり、この時恥づる色なくイエスに種々の事を問へり然れどもイエスは黙然として答へざりき。黙するはヘロデの運命を斷する所以なり。良心を殺したる者に向て神の子の唇は開かるべからず。

洗濯者ヨハ子の人物の大なる所は主として其の勇氣に表る。勇氣の如く何人も尙ふを知れる徳あらず。海に陸に國を衝る勇士は最も國民の親愛を受く。ツエリントン、チルソンの名が國民の血を搖盪せしむることは、政治家文學者の大名を以てす

るも企て及ぶ所にあらず。されば稱賛時に其宜しきを失ふことあり。或は野獸と同じく危険を感覺する能はざるを稱して勇氣と云ふ。この類のもの果して勇氣ならば高尚なる性情と兼ね有すること能はざるべし。斯くこの徳を誤りて頌することあれども、然かも一般人心の本能は大体に於て尙ふべき所を知れり。何となれば眞正の勇氣は人の性質の深き所より發すればなり。ヨハ子の勇氣は眞理の勇卒たるの精神に顯れたり。彼は苟も人の心を迎んん爲に眞理を曲ぐることをせず。自ら義人なりと恃める聴衆に向ひても彼等を蚊の裔と呼びて怖れざりき。國王に對してもパリサイ人に對しても齊しく「悔ひ改めよ」と叫び動かすべからざる神の律法の大權を主張したり。彼は世人にキリストを紹介するに於ても道を誤らざりき。我はキリストにあらずしてキリストの出世を告ぐる聲なるのみ。我自ら完備せる徳を以て自ら任せりと思ふなかれ。來るべき者の靴の紐を解くにだも足らざる使者を見ずして使命を聴けど、ヨハ子は當然居るべき所よりも高く自ら標せんとする誘惑を排して己がキリストにあらざることを、キリストに比すべくもあらざること

を明言したり。

この勇氣は職として信仰の上に根據を有す。主イエスはヨハネの生涯を概括して語るに當り、殊にこの點に重を措けり。ヨハネは風に揺かざる、蘆ならず、萬人怒つて敵し來る暴風も、又穩かにして然かも危険は更に大なる稱賛の軟風もこの人を揺かすに足らず。彼の信仰は雷同的の信仰にあらず、彼の精神は堅實なる真理の上に築かれたり。キリスト己が上に位し完全なる正使として神より遣はされたるを知れり。キリストの前に立つては万人皆罪人にして悔い改めを要することを知り、何物を以てしてもこの真理を奪ふこと能はざりき。

ヨハネの勇氣は又獨立心に原づけり。世間に依頼するは世間を懼るればなり。ヨハネは淡然として沙漠の供給する物を以て満足し、其の外人に待ち人に需むる所なかりき。イエスの云へる如く「ヨハネは華奢の人にあらす、柔かき衣を着る人にあらす、粗剛なる自然の兒なりき。彼が世間に對して負ふ所は真理の負債あるのみ。この負債をば彼は深く又勇ましく償却したり。」

ヨハネは私の爲に計らざる人なりき。彼は現世的に己が事業の成果を收むることを得べかりしも、之を爲さざりき。彼は又別に一派を樹て得べくして之をせざりしは弟子の失望せし所なりき。若しキリストの昇る勢力に對抗して名分を争はしめば、勝を一局部に制するも難きにあらす。然れども彼は云へり「彼は必ず盛になり我は必ず衰ふべし」と。彼は預言者にてありき、預言者よりも一段大なる洗禮者にありき。然れどもこの預言も洗禮もども不満足不充分なるを知りて、聖靈と火を以て洗禮を施す人を紹介したり。この深くして根柢ある勇氣と清白無私なる心あればこそキリストは熱心なる嘆美を與へ、之より先に世に出でたる大人の中にも未だこのヘロデ城中の囚人よりも大なるものなきことを公言したるなれ。

キリストの評論の前半を讀んで感ふ者後半に讀み到りて感更に大ならざるを得ず。「天國の最と少き者も彼よりは大なり」と。これ果して何の意ぞ、基督教徒の最も微弱なる者にして猶洗禮者ヨハネより大かりとは、然れども我等は然りと答へざ

るを得ず。是れは本質の問題にあらずして恩恵の問題あり。新王國の生命は之を享くる者を無限に大ならしむるに足れり。ヨハ子は明け方の空の殘星なり。我等は曙の小兒なり。曙は我等をしてヨハ子よりも大なるものたらしむ。ヨハ子は之を指すのみ之を取らしむること能はず。

ヨハネは新しき國の生命を享有する能はざりき。其の一生は日光薄き一生なり。人をして憐むべしとの感を催さしむること後の如きは罕なり。彼はモーセと同じく今や門口に入らんとする處にて死せしなり。獄中より使を遣はしイエスに問ふて曰く、「來るべき者は爾なるか我等他に俟つべきか」。是の如き問を發するに至りしもの豈獨り失意の故のみならんや。荒野の男兒は獄窓の物憂き月日を送り快々たる鬱懷彼をして是に出でしめたるも固よりこれあり。然れども雷之のみにあらざりしはイエスの儼然たる答によりて明なり。ヨハ子はキリストの王國の本質につきて根本的に解釋を誤る所あり。キリストの宣傳したる王國は喜ばしき音信なるに、ヨハ子の傳へたるは畏を起さしむる音信あり。ヨハ子は判別し罰せんが爲め

に來る審判者のことを語りしに、イエスは罪人を受けて之を赦す父の心を傳ふ。ヨハ子は我が人に語りたる如くキリストが斧と箕を携へて現れざるを恠めり。斯の人來らば報復審判の事業始まるべしと期したるに、其手には武器を捉ぐるを見ず、其聲は震怒の聲にあらず。ヨハ子がイエスの果して救主なるかを疑ひし所以はこれなり。キリストが答として己が仁慈の行を語り又天國の最と小き者も彼よりは大きなりと云ひしはこの故あり。既に説きし如く天國の生命は至て微なる其民をさへ尊貴ならしむ。名手の巧に刻まるれば大理石も呼吸するかど見ゆ。然れども生物界の最下等なる物にても彫刻者の絶巧なる作品よりは大なるにあらずや。荷も天國の生命を賦せられたるクリスチャンは至て小なる者尙ほヨハ子より大なること之に類す。然してヨハ子は又新王國の力を有せず。彼は奇跡を行ふこと能はざりき。外部の奇跡をも又内部の奇跡をも、人の心を變革する能はず。靈の洗禮を施す能はざりき。天國の子弟は自己以上の力を受くるが故に、外部的の奇跡よりも更に大なる奇跡を

行ふを得。此れヨハ子に無き所なり。ヨハ子は既に天國の最と小き者と比するに足らざれば、まして天國の主君に比せらるべけんや。抑もキリストとヨハ子は之より先き如何様の關係ありしが知るを得ず。蓋しヨハ子は嘗てイエスと相見しことありたるも、近頃數年の間會合の機を得ざりしならんか。ヨハ子この日ヨルダン河の岸にて洗禮を施し居たりしに、イエスは其場に近づき來れり。内より聞ゆる幽微なる聲は此の野人の如何なる人なるかを低語しければ、ヨハ子は斯の人と他の洗禮を受くる爲に來る人との間にいかに濁き淵あるか否洗禮者自身との間にも之を立處に了し得たり。是に於てイエスは己が洗禮を受けんと欲する本意を明にし、總ての義を果たさんが爲めなるを受けぬ。ヨハ子が彼に致したる敬禮をば敢て辞せざれども、万人の首長にして又代表者たる以上は卒先して彼等の履むべき道を履まざるべからず。彼等の爲に死して代りて罪の重荷を背負ひ、最も下れる人生の經驗に合體せんとす。故にキリストは水に入れり、水にて淨められん爲にあらす。前人の云ひし如く水を淨めんとて。この時神の聲天より聞て、**「此は我愛子我**

が悦ぶ所の者なり」と。イエスが水に下りしは幼少より猶太國の律法を遵守せしと同一精神なり。受洗は彼が謙虚の一部分なり。イエスは己が救はんとして世に來りし、この人類の爲なれば盡く義を果たさんと誓たり。之より後この事業を成す用意の爲として神の靈は與へられぬ。之より前にも靈の蒸化無きにあらざりしも、此時に當り初めて従事せんとする新職命に適したるものとせんが爲にこの賜は新しく豊に與へられたり。この力を受けてイエスは起ちぬ。却説ヨハ子の生と死は靈魂不滅の信仰を以てせずんば説明し得べからず。俗眼を以て觀れば彼の生涯は悲惨なる失敗に終りし生涯なり。然れども彼の死は二重の獄——ヘロデの獄と自己の疑惑の獄——を脱して濶大ある自由の天地に入らしめぬ。天の王國が完全純粹に實現せらるゝ其の處の人となりしなり。



第五章 基督の誘惑

勝を得る者には我先に勝を得て我が父と偕に其寶座に坐するが如く我が偕に我が寶座に坐することを許さん

キリストは洗禮を受けし後誘惑を受けたりされば我等は先づ此の二の事の相聯なる節に眼を著けざるべからず凡そ神は甲冑を授くれば必ず之を裝ふて戰場に臨ましむ昔アダムは戰敗れたるがために樂園を逐はれて荒野に迷ひ入りしが今や第二のアダムなるキリストは荒野に於て復も昔の戰を續けて勝を取りたりは此の戰場たる荒野に入るとき聖靈に導かれて行けり善き靈彼を導きて惡き靈の試練に當らしめぬ『靈彼を驅逐して野に行かしむ』とは一コがこの狀を叙せし文あり知るべし誘惑の苦痛輕からざればイエスも流石に之に臨んで逡巡の意あり

りしを縦し人は寂寞の郷に通るゝとも何處にか誘惑あらざらむ。キリストは其處にて惡き靈に出會ひたり。

キリストの誘惑に關しては種々の疑問あれども爰に之を解することをせざるべし。これ一は之を解釋し得べき材料あり得べしと思はざればなり。兎に角世に人格を具へたる惡魔なるものありて人を試み誘ふことは聖書の明白に教ふる所なりと認め得べく、人生の深秘なる消息は其偽らざるを確むること多し。人は縱令神學の中より惡魔を逐ひ得るとも之を實世界より逐ひ去る能はずと或人の言ひしは宜なるかな實にこの世には彼が手にて加へし破損の跡歴然たるにあらすや。又罪無き人にして誘惑あるは如何との疑問もあれど、我等は今之を論せんことを欲せず。姑く罪無き人にも誘惑あり得べく、この時の誘惑は内より發せずして外より來ることを認定して本題に入らんとす。

一、イエス食を斷つこと四十日、然して第一の誘惑は來りぬ。「汝若し神の子あらば

基督傳

此石に命じて麩包とならしめよ』と今に至るまでイエスが斷食の苦に堪へ得しは敢て神性より發する勢力によりて自ら支へしにわらずして全く中心の歡喜殿にして身を忘れ得しが故なり。今やこの情は退くともにも飢餓の苦を覺れ來りて裂かるるばかりに感じたり。之に乗じてサタンの誘惑は始まりぬ。

『汝若し神の子ならば』と云ひて既に明なる真理を代へて疑題となすは誘惑者の好んで用ゆる手段なり。飢を感ずるの餘り眼も衰へたれば地上に轉がりたる石さへも麩包の色して見ゆしならんか。若し彼の一言の下に變じて麩包と爲すを得たりしならば、何故之を爲さざりしや。彼が之を爲さざりし理由は此なり。若し然せば彼が今日まで合体したる人間と運命を同じくするの機を失ひて途を異にし、人どかりし本意を空くすればなり。且是の如きは神の攝理を信すること十分ならざるを表すなり。イエスは苟も自らの神性を標出するを好まず。故に曰く『人は麩包のみにて生きず。但神の口より出づる凡の言に由る』。イエスは人としても誘惑者の知らざる食物を蓄へしなり。

基督傳

予は以下の誘惑の各條をば二個の事を表す点より觀んと欲す。第一はキリストと同胞人類との一体なることなり。第二はキリストが終生の間受けたる誘惑の性質なり。第二は後に譲り、先づ第一の件につきキリストにありし誘惑は亦我等にある誘惑なるを觀せしめよ。人の執れる生業一に麩包を得んが爲になすもの多數なり。と云はざるを得ず。この生業の上に於て惡魔的の呼吸は間斷なく我等を襲ひ來る。思へらく若し我が信仰を棄てだにせば、功名手に唾して取るべきに、商業上の權をもち得べきに、我が敵手は之を用ひて我等之を用ふるを得ざるが爲に我事破れんとす。我は生活せざるべからざるにわらずや。余は答へて云はん。とす人は必ず正義あるを要す。必ずしも生活するを要せず。正義を守りて神に依らば人は必ず死せず。人は神の口より出づる凡ての物によりて活く。イエス、キリストの舊き答は、何人の身にも之ある誘惑の時に適應して餘あり。且思へ、人は自ら幸福なりと思ふ其物の爲めに身を誤ることあり。麩包の饒さが爲に麩包以上の者を需むる念無き者あり。幸にも頼みてし杖の折れしが爲に其人は亡びざるのみならず却て救は

れて新生活に進むなり。之なかりせば彼は神に原きて生活することを知らざりし
ならん。

基 督 傳

二、マタイの福音書の記す所によれば悪魔は次にイエスを聖京に携へ行きて神殿
の頂に立たせたりとあり。處は猶太人の最も愛する都城にして、其中の最も神聖な
る處なり。サタンがイエスを此處に携へたるは計妙を得たりと云ふべし。人生最も
安全なりと思ふ所こそ最も用心す可き所なれ。誰か思はん神殿の頂が誘惑の場所
として用ひられんとは然も敵は此處にさへ謀を構ふるに忙しかりき。此處には惡
魔に逢ふの患なかる可しと思ふ處にも須く歩みを確にして目を八方に配り心を
引き締めて出でざるべからず。
悪魔誘うて曰く「汝若し神の子ならば己が身を下に投げよ」。而して悪魔は早くも
イエスが聖書を引用したるを似ぬるものゝ如く、「そは汝の爲に神その使者等に
命じて汝を護らせん、汝が足の石に觸れざるやう彼等手にて支ふべし」と録された
りと云へり。聖書の原文には、「すべて汝が歩む道にて汝を護らすべし」とあるに、身

基 督 傳

を投ぐるは神の定めたる道の外なれば、この句を省きしは悪魔の計なり。聖書によ
りて最も良き議論を立て得べく又最も惡しき議論をも立て得べし。唯之を用ふる
の如何にあることを知り、キリストに則りて比較商量して眞意に到るべきなり。キ
リストは答へて曰く、「主なる汝の神を試むべからずと録されたり」。即ち汝は猥
りに神の友情を試験すべからず、未だ天より遣はされざるに無謀にも大功業を企
つべからずとの意あり。夫れ罪なる者は自己の意志より出でざるなし。このときも
悪魔はイエスを神殿の頂に携へ行くを得たれども、彼を下に投ぐることを能はず。之
は全くイエスの任意に存せり。イエスは此の誘惑に充ちて罪を犯さざりき。之と一
様の誘惑亦我等の経験する所なり。愚にも爲し難き事を試みて用なく神の約束を
験せんとするは同じ誘惑なり。人は世上の交情に於ては之を爲して罪と知る事を
ば神に對する關係に移さば罪ありと感ずること至て薄し。若し友の情誼の厚薄を
探らんが爲に故意に之を難局に置く如きあらば、これ友を信すること薄き者とし
て之を責めて可なり。信すること篤き間には相試むるの必要あり。神を試むるも其

基督の傳

原は同じ不信の根より出づ。靜に神に依り頼む者は神經的に神を試みんとせず。然として平和に安するなり。

三最後の誘惑は最も險惡なるものなり。今やキリストは惡魔と俱に高山の頂に立てり。見渡せば天下の國々々々其榮華の狀脚下に星布せり。想ふにサタンは光明の天使にも似たる裝をなし。風采堂々としてあたりを拂ひ憔悴せるキリストの傍に立ちて下界の榮華燦然たるを指し。若し一たび膝を屈して我を拜しなば此れ盡く汝の有とあらんと云へり。イエスの膝僅に山上の雪に觸れだにせば世の權力は一朝彼の手に歸せんとす。我等若しキリストが外部の華麗に心牽かれたりと想像せんか。未だこの誘惑の何たるを解したりと云ふべからず。イエスは今山上に立ちて不幸多き世界を觀れば世は魔王の權力に付與せられて人は呻き苦めり。神の愛を知らざる者あり。知りて之を誤り用ふる者なり。神の授けし寶は却て惡の器として用ひらる。サタンの云ふ所を聞けば此等の者は皆我が權力に委ねられたれば汝若し我を拜せば汝に之を治むることを許さん。其の時こそ汝は心のまゝに盡く人の

基督の傳

傷を癒やし其涙を拭ひ其苦惱を去り。總て我が荒らし零落させし所の者を回復するを得ん。然かも一瞬にしてこの權を執ることならん。キリストは素よりこの主宰の權を得んと欲せり。死して以てこの權を得べしと思ひたるに今や悲多き十字架の道を履むを要せずして徑にこの宿志を果たす可き新道路は示されたり。此ぞ誘惑中の最も強くして又最も險惡なりしものありき。キリストは輒ち猛然たる勢を以て之を退けて曰く「サタンよ、我が後に退け」と。是に至ては復た議論を用ひざりしは事急迫にしてこの迫なかりし故なり。襲撃あり、拒絶あり、誘惑は茲に畢りぬ。

キリストの深き壑を経て後王者の位に登りぬ。神の國に至るには近き道必ずしも良き道にあらず。人は幾多の艱難に堪へて神の國に入る。

この一條にも我等の爲の教訓あり。善き事を爲す勢力なりとも不當の價を以て之を買ふことあり。此世に於て神の爲に揮はんがために勢力を得んと欲する志。否終には神の子の右に坐し得るの時あるを望む志は卑からず。高尙なりと云ふべし。但

その大なる物に達するに神の設けたる梯子に縁りて登るべし。其外の道を取るはこれ下劣なる慾を以て高等なる功名心に代ふるものあり。天の幸福なる所以は爰には内なる聲あるが故なり。或人の言宜なる哉。何物をか得んが爲に苟くも良心を曲ぐればその得し物は全く價値を失ふ。縦ひ一瞬間の罪を償として永世の實益を買ひ得るとも其價高きに過ぐ。世には不義の道にて富を得ば之れを慈善の爲に費して前罪を拭はんとする者あり。或は不義の手段によりて名譽を博しこの名譽をキリストの爲に用ひて良心を安んせんとする人あり。此皆益なし。彼等は王國を得んが爲にサタンの前に跪き之を得たりとも全く品價なきものとなす。この種類

の誘惑は危微の間に乘するものなれば、キリストに倣ひて急速に又絶對的に之を拒絶せざるべからず。

「惡魔は暫く彼を離れたり」とあり。箭は盡く折れ又鈍れて敵は遁れ去れり。たゞ「暫く」とは何の意なるや。之はイエスの傳道の終、ゲッセマテの園中にて誘惑を受けて再

びこの大敵と戦ひし時までを指すと解する人あり。されど思ふに之はイエスの一生斷ゆることなかりし戦を云へるものとして之を讀むはキリスト一生の事實に適合す。彼は自己の内部の經驗をば大抵深き沈黙の底に包みたる故に、荒野に於ける如く又ゲッセマテに於ける如き分明なる光景に逢ふを得ざれども、彼が弟子に向ひて、「我が誘惑の間に（日正疏には我が患難にありて二十八）我と偕に居りし者は汝等なり」と云ひしは中懐の消息を傳ふるものにあらずとせんや。「我が誘惑」これ實に彼の生涯の實況なり。始終の兩端にのみ誘惑ありて中間は白地なりしにあらす。一生都て是れ戦なり。戦の記録なきが故にその戦激しからずと云ふなかれ。死生の戦は往々凄烈なる辭賦を以て戦はる。「我世に勝てり」と云ひしを見ても勝つに至るまでの戦の大なりしを察すべし。「昔戦のありし地を過ぎるに萬軍の猛り狂ひ喘ぎ苦みたる復た痕跡尋ねべからず。鮮血流れ人僵れ臥したる地今は黄麥の浪を捲きて雲雀詠へり。唯勝ちし者の建て置きし墓碑紀念標の殘るありて忘れられたる昔を物語るのみ。その如く「我勝てり」との紀念碑的一語は永へに聳ゆる

此靜なる終生の苦戰の形見を万世に遺すなり」

我等は今悪鬼が一度去りて復來り同様の誘惑を以て彼を惱ませし狀如何なりしかを不十分ながら追跡せんと欲す。

一、キリストは生涯の間身体の苦痛と窮乏によりて試みられたり若し夫れこの事實の稜角を磨り落としてイエス、キリストの貧なりしことを忘れしめんとするはこれ空想的の尊崇と謂ふべし。彼は己の所有といふべき物を貯へず身後に遺したる物は縫目なき上衣一領ありしのみ。「地に財を貯ふ勿れ」と人に命せし誠は自ら亦守りたる誠なりき。經濟家ユダの鋭き眼に漏れたる餘財とては全く之の亦かりき。或る時は無花果樹の葉にて飢を醫せんとし疲れては漁舟の中にて眠りぬ。彼は税を納めんとするも一錢の時へ無かりしことあり。パリサイの人に答ふるるとき之に示す可き銀錢一片もなかりしと見ゆデナリを我に示せと云へり生きては枕する處なく死しては人より借られたる墓に數日の安眠を託したり斯かる間には蓋し幾度か唯一言の下に収め得らるべき富を得て自ら足らさんかとの誘惑ありしな

らん。然れども彼は之を爲さざりき。キリストは貧窮の間にも依然神たる所以を失はざりしが故に、舟中より暴風怒濤を鎮め、又最後には死の鎖を斷ち切りて墓の中より戰勝者として出で來れり。是の如き力ありきがら自身の爲めに供ふることをせず又之を欲せざりき。糧食乏しき城中に於て主將が士卒と艱難を共にする如く、我等の先導者主將は自己の需要に耳を傾けず、貧く生き貧く死せり。大なる思想家ジョン・フオスターは貧と飢との苦きよりして罪に陥りし者を憐むの念殊に深切なりしと云ふ。若し罪にして酌量すべきものありとせば酌量して可なるは此種の罪あり。殊に前に富みて今貧しくなりし人に於て然りとす。キリストは無量の富を辭して人を富まさん爲に貧き者となるを甘じたり。

二、人間以上の能力を用ひんとする誘惑も亦後斷へずキリストにありしならん。然れどもキリストは危に臨みて人間以上の力を用ひて之を脱し或は故なくして危地を避くることをせざるべきを決心したり。故に嘗て敵人の己を殺さんどせし時は靜に身を脱したり。一度時の到るに及びては從容として命を授け人意の無情に

も之を奪ふに任せたれども、この時までは何人も彼を害する能はざりき。然もこれ神の力を用ひて安全を得たるにはあらず。ペテロは初めてイエスの死す可きことを聞きしとき諫めて、『この事爾にあらざれ』と云ふや、イエス叱して曰く『サタンよ我が後に退け』と。弟子の言の裡にさへ一度敗れて復來る惡魔の氣息を聞きしことありき。

三、キリスト猶太人の俗論に同じくメサヤの本領を失ふことをせず、神靈の力に依りて發達すべき内部の王國を取れり。國も榮も終には孰かキリストの手に歸せざるべき。然れども彼はこの笏を握るに急ならず。人之を擁して王となさんとせしむき避けて野に隠れたり。是の如き徒の傀儡とならんよりは孤獨にてあるは彼の志なり。都に出で、俗界の王位を取り、弟子等と富貴を共にせば、弟子の喜び大ならん。然れども彼は背て爲さざりき。キリスト死に依りて王とあれり。十字架は彼の王座あり。十字架は誘惑の最頂點にして且又誘惑者に對する決答あり。彼死せし時『眞餘に似たる其足』は人類の鼻敵の頭を踏み碎きたり。

キリストの徳は隱者の徳にあらず。又鍛煉なき徳にあらず。烈火の如き激戦の間を潜りながら一點の汚損を受けずして出で來りぬ。過ぎにし生涯を回顧して『我が誘惑にありて』と云へるは感慨如何に深かりけん。

第六章 基督出世の目的及び名分

イエスキリスト即人を救はん爲に世に來れり信すべく疑はすして受くべき言なり、

基督傳

キリスト出世の目的につきて自ら語りし所一にして足らずと雖も最も意を盡くせりと思はるゝは、人の子は失はれし者を尋ねて救はん爲に來れり』との一語なり。意は之れと同じくして言は更に簡なる一語汎く使徒時代の教會に用ひられたり。『キリスト罪人を救はんために世に來れり』との言之れなるが、これは何人の言ひ初めしものなるや知るに由なし世の美はしき思想と美しき物往々名の傳はらざる人に依りて作らる。されこれの一語は人の喜んで誦する所とあり口より口に傳はりて人の記憶に留まり終に使徒ヨハネ之を探りて其書翰の中に收め眞にして憑

基督傳

るべき言なることを證したり彼等も亦この言が永遠の神斯の世に降りたる所以の目的を教ふるの指針として誤りなきを信するが故に之に原きて説き出でんとす。

キリストは人の現狀を叙するとき失はれたりと言へり先づ此事に注意すべし。失はれたりとは神より見たる上に就きて之を云ふあり神は人を失ひたり失ひたるが故に悲みありこの悲如何に深かるかは人の想像し得る所にあらざれども救主自ら感動深き三の譬喩を聯ねて之を説きたるによりて幾分を窺ひべし。キリストの言によれば神が人を愛惜するは宛も牧羊者が百匹の羊を持てるも其中失はれたる一匹の羊をば偏に惜むことの切なるが如く又僅に十金を貯へたる婦が其一金を失ひて之を惜むが如く又子二人のみなる父が弟の家を出でたるを悲むが如し。かく人の沈淪するは神に取りては損失なるが之を他の一面より見れば又人の罪なり。キリストは人神を離れて迷ふとの罪なるを寫すに最も暗澹たる着色を以てしたり。罪の罪責を軽く見ず其結果の怖るべきことを淡くせざる所はキリスト

の救が神の天啓たるの一特徴なり。かくて罪人を救はんが爲に來りし其人は罪の最も恐るべきことを語りたり。人神より離れ迷ふことは神の損失となるのみならず人の損失なり。何となれば神の許に在らざるは即ち死することなり。正義眞理純潔其他凡て天より流れ出づる高き感化力の外に活くる生命は生命にわらず。之ども俗界の利害目的に關する範圍内に於ては或は機敏にして有力なるを得べけん。然れどもこの活動は却て他の大なる目的と關係に對して死したることを反視して其暗さを深むるに足れり。

キリストの罪に對する判決は是の如く嚴正にして之を怒るの情是の如く熱烈なり。然れども未だ嘗て絶望を以て之を見ず。罪の爲に人の陥りたる悲惨淪落は甚だ深しと雖も猶この中より救ひ出ださるゝを得べく更に進んでは純潔完全の高き地に登るを得べしと教へたり。聖書を讀むに其中に罪の病なること恥辱あるを説き來り、一步を進めてかく傷つき且零落したる者を如何にして挽回すべきかの問題を迎へて平心之を解く趣眞に驚くに堪へたり之に加へてキリストの人を救ふ

爲なれば費す所の大なるは更に顧るに足らざるを教へたり。何となれば人は迷ふこと遠しと雖も猶神の像を留めたり。譬へば茲に貴重なる古文書ありて後人の其上に塗抹したるに係はらず。勞瘁として古人の筆蹟を見るべきが如くに、イエスは賤しきシリヤの奴隸に逢ひても其靈魂には汚損しながらも神の像の鑄込まれおるに目を留めぬ。人は罪深く且微賤なるものなればいかで神の勞苦經營を値するに足らんや。とは我等の思ひ易き所なれども、イエスは斯の如き思想に陥らず。彼は彼によりて世界の救はるゝに至らん爲に來れり。是に至りては人種の差別等は念頭に懸けず、自ら生れたる處と時に聯りたる國風時俗以上に超然たるが故に、孰の國に入るも外國人の如く思はれず、言語を殊にし種族を別てる個々の國に於て到る處一個の公民なり、人の子なり。人の心には之を限り之を界する城壁あらざるなきにキリストに於ては之あるを見ず。爵位も富も彼の目より見れば物の數ならず。然も又世上の事物一として平凡なる不潔なるものなし。當時濶大なる思想世に乏しく、人の相愛し相信する領分は區々として小地圖の面に分割せられたる時に生

第六章 基督出世の目的及び名分
八十一
れて此の如き大思想を懐抱し宣言す、この思想のみにては既に神聖なり、父は一家の救を求め、市民は一都府の救を求め、愛國者は一國民の救を求むる中に、人の子は世界の人を尋ねて救はんが爲に來りぬ、然してこの廣大なる同情は一個人に對する至愛と十分に合致して相害することなかりき、彼は世界の一個人に注意することなくして世界を愛したるにあらす、人の全体を愛するが故に一個の人を愛したり、故に彼は特別に親密なる友の關係を結びたり、罪人と云はれて世に厭はるゝ人の間に是の如き親しき友を得たり、キリストの愛は個人的愛着の集合して成れる愛あり、一個人に對して其愛を傾くるに當りてや全世界にこの愛を頒つべき者なきが如く專一なりき。

キリストは失はれたる者を救ふ事業に着手するに當り、須く先づ決すべき大問題あるを未決に付して之を始めしにあらす、彼は舊社會の狀態を改良するを以て能事畢れりと爲さざりき、固より社會を上進せしむるの功に於てキリストの事業に比す可きものはあらす、然れども社會の改善のみが彼の目的の全部にあらす、故に

彼は人に入り易くするため、聖善の標準を低くせず、前人の未だ想ひ及ばざりし高尚なる程度にまで之を引き上げたり、さりとて又徒に高くして及び難しとの感人を人に起さしめず、一度之を見得たる人への善に戀々として已む能はざりしむべく之を説けり、要するにキリストは社會の改善の一端を目的として説かざるなり、彼は又精神の修養を旨として説かず、文雅の好尚高うして靈心全く破滅せる人あればなり、又は行を修め情を美しくせしむるを以て足れりとせず、縦令以上の事を成し得たりとも、罪惡の力を弱らし終には之を撲滅するこの理想に達せざる所の者は彼の満足を得るに足らず、人心の病人、社會に蟠れる現實なる害毒深き病患、即ち神に對する反逆、キリストは之に手を着けぬ、之を馳逐しこの意志を征服するまでは満足すること能はず、鐵鎖に羈がれたる人の意志を解き放して自由を得せしめ、當然王として事ふ可き彼に從はしむる、この服従を稱して信仰と謂ふ、人一度彼に依り頼むに至りて、茲に初めて迷ふことを止めて、牧羊者の許に立ち歸るあり。

基 督 傳

神人契合の事業未だ成らず、人類全体に加はるべき慈愛の目的未だ果たされざるにキリスト自ら死なざるべからず。キリストが他の人間の教師と遠く隔絶せるはこの點なり。死は總ての人に來る、人生の薄弱と失敗と罪業の結果を表して茲に死あり。但是の如き性質を帯びたる死が神の子キリストにも來るは何の故なるか。他人に於ては死は事業の終なり。キリストに於ては其死即ち事業なり。茲に差別あり。我等若しキリストの死を以て避け得らるべく又自ら避んと願ひし事なりと思はば、これ首より彼の生死の意義を誤り觀たるものなり。彼は罪人を救はん爲に世に來れり。人を救はん爲に自ら死するの必要なり。夫れ人はキリストを信じて救はるべきが、其信すべきキリストは罪人として懸けられたるキリストにてあらざるべからず。此故に彼は死せり。世の罪惡の事輪に觸れて無謀にも身を碎きたるにあらざるなり。彼は初より事の終局を觀得たるが故に、自ら死を避けんと欲せば或は之を避け得たるあらん。然れども彼若し之を避けなば、罪深く道に迷へるこの人類をば不幸なる運命に放任するあり。この一事はキリスト獨り觀得たる所にして世

基 督 傳

の人には謎にてありき。猶太人は他日彼が十字架に磔けられ死の掌に擲されたるを見て思へらく彼の一生に關する是非の論既に定まれり。弟子さへも其師が墳墓の中に横へらるゝを見て望を絶ち、「我等イスラエルを救はん者はこの人なり」と信せしに」と云へり。イエス自らも純潔にして血氣盛なる人性を具へし事なれば死に臨んで退縮の情ありしは自然なり。然れどもこの情に隨ひて死せざる事あらば、其の一生は果を結ばず人類の運命に相關せずして獨り立てるものとなる。若し死するならば小麦の種の地に落ちて多くの實を結び得べきが如きことを鮮に觀じ得たり。抑も彼の死が如何にして斯の如き成果を結び得べきかは今爰に説明せんとする問題にあらず。唯彼が自由の意志によりて人の爲に死したる事實を明め置かんと欲す。且キリストは自ら生命の唯一の源泉たることを宣言せり。彼は是に於て他の教師、他の恩惠の世に傳はる道と肩を比べて立つを肯んせず。自己の教ふる所をば多くのものゝ一として數へらるゝを許さず。自ら一種真理の専有權を握れること、救拯の秘義を有せること、他に救拯の道無きことを公言せり。斯の世に於

基督傳

ける人の運命は人の方案によりて左右せらるべきものありと雖も、現世以後にまでも善き勢力を及ぼし得べき者は彼を信する信仰の外に之をあらす彼をして死の蔭に在る人間に光明を與へん爲に世に下らしめし大慈悲心によりて彼は宣言して曰く彼の光は即ち眞の光なり、其他の光明は消ゆるの時あるべし、人を救ふはこの世に於て之を神に歸らしめ、爰に聖化の緒に就き、遂に他界の生活に至りて之を完成するの謂なりと。人はキリストの言ひ又行ひし總ての事に縁りてこの境域に入るを得べしと雖も、之に到るべき主なる器は十字架にあり、故に人の子は罪人を救はんが爲に來れりと云ふも、人の子は罪人に代りて死あんに來れりと云ふも、意に於て異なるなし、人の救てふことが如何ばかりキリストの心を離れざりしかば彼の舉動の全体によりて察せられ得べし、此の目的の幾何にても成るあるを見るべき比なき喜悅心に起りたり、然して彼の生涯の盛りは多くの人の不信の映し出づる影あり、夫れ不幸にも神の愛と賜を受くるの道を誤りて救に入るを得ざるこの大なる傷ましき失敗を悲しみて彼は泣き又痛嘆を發せしこと幾度なり

基督傳

しぞ、曰く「招かるゝ者は多しと雖も撰ばるゝ者は少し」『生命に到る路は窄く其門は少し其路を得る者稀なり』

次にキリストの自ら稱したる名分につき語らんとす、多端に渉るが故に其二三を擧ぐるに止めんとす、第一にキリストは神と同格の者たることを稱したり、彼が死刑の宣告を受ける時は自ら神の子なりと明言したるを以て罪案とせられたり、彼が神の子なりと自稱するは、人は皆神の子なりと云ふが如き尋常一般の意にあらざりて他に比類なき意味に於て之を言へるなり、死を以てこの言責を果たさざるべからざることを知るも、猶從容として之を反復せり、之を眞理ならずとせば神を潰すの言なり、然して如何に盲目なる驕心を以てしても是の如き潰言を吐く人あるべきか、彼は又神に屬する性格の一たる罪を赦すの權を自ら有することを稱したり、パリサイ人シモンに語るべき人は負債者にして自ら債主なりと云へり、パリサイ人も罪ある婦もキリストに對して齊しく負債者なり、彼獨りこの負債を免

第六章 基督出世の目的及び名分 八十六

すの權あり。キリストは又「我が父は今に至るまで働き給ふ我も亦働くあり」と云ひて天父の世界を支持せる力に參與せることを稱したり。彼は天父と同一の本質の者たるを任して曰く我と父とは一なり。又我はアブラハムの在らざりし前より在り。と云ひて在りたりとの過去を用ひず。ニコデモに語るるとき自ら天より下り。又今も天に現在せる神の子にして他日再び元在りし處に昇るべきことを明言せり。彼は又總ての人彼の聲を聞きて生くる時來るべきことを語りたり。彼はコラジンベツサイダの諸邑が彼の教を受けざりし故を以て罪を受くべしと宣言せり。彼は又未來の世界死者の王國にも君主たることを公言せり。彼がパリサイ人を痛責したる言は神の純潔と權力を有せる者にして初めて言ひ得らるべき言なり。彼は審判の機救贖の機神と俱に在るの權を有することとを公言せり。希伯來人の神を呼びたる古き嚴なる名は「我在り」との義なり。神モーセに告げて曰く「我は在りて在る者なり」。キリストはこの名を自ら取りて之に其の實を充たせり。力と完全と慈恵の諸質を表したる記號をこの名に併せたる者を自己のものとする。

して要求せり。即ち彼は眞なるのみならず、彼自身即ち眞理なり。彼は光とあるにあらずして自ら光なり。彼は門なり、匏包なり、水なり、善き牧者なり。凡そ人の心靈の得るを要する物をば彼は供給し得べしと稱す。其言を眞なりとせば凡ての物彼の裡に充實せり。他人此等の名を用ふることにありともとは只轉じて之を用ふるに過ぎず。キリスト獨り満足なる意にて用ひ得たり。

イエスは總ての人を我に來れと招き、之に安息を與へんとす。曰く「總て勞れたる者又重を負へる者は我に來れ我汝等を息まさん」と。この言は今は傳らざる少數の猶太人に向ひ語りし言なれども又苦勞多き代々の人間を含めて云はれしならん。この後重荷を負うて來る幾世の人を應きて盡くこれに安息を與ふるを得べく又與ふるを欲することを公言せり。これ果して人の自ら任じ得る所なるか。

彼は人に接するときは際限なき要求をなす。彼に向うて表したる愛情と崇敬の至れるをも過分なりとて辭せしことなし。「神を拜せよ、我は只汝等と同等なる神の臣僕なり」とは云はずして「汝等我を師と呼び又主と呼ぶ汝の言ふ所は宜し」と云ふ。彼

基督傳

は人の敬事を求め天父に効す如き完全なる敬事を求む。婦人香膏の名品を彼に
灌がんとて携へ來りしとき、汝の貧しき身分には過ぎたる贈物なりと云ひて之を
否まず、當然受くべき物を受くるの態を以て其厚意を嘉せり。彼は通常人の間に行
はるゝ辭讓の禮を用ひたること稀なり。人に請ひ求むる地位に居らずして人に命
令す。彼の命ならば神聖なる恩愛の絆も斷つべきことあり。彼よりも多く父母を愛
するものは彼に隨ふに足らずとせられたり。人間の情誼に赴くの暇をも許されず
して言下に弟子となることを命せられし人もあり。縦し彼の終極の企圖何處にあ
るかを見ずとも疑はず。又問はずして彼の計畫に従ふべく疑ひ又問ふは罪なりと
せられたり。

キリストは其事業今成るも破るゝも其は彼自ら探る上に毫末の差を生ぜざりき。
人離るゝが爲に名分を低くせず。聲望隆なるが爲に之を高くせず。人は來り人は去
るも彼は坦然として一なることを失はず。其運命の最も暗黒ある時に於ても心靜
に王と仰がるゝ其日を期したり。平民の衣を着けて事業を創め、未だ歸依する人な

基督傳

き時より自ら立つる宗教が天下に流行する時來ることを豫期したり。其時人は彼
を主よ主よと呼ぶべく、今は人に知られず知らるゝとも賤まれてのみ知らるゝ。彼
の名が力の泉とあり、ボウロの云へる如く、凡ての名に勝る名となり、嚴格なるヤコ
ブが粗豪の性に似氣なき濃情を以て云へる如く、美しき名とあるの日あることを
期したり。是の如き名分を求めたる人他に見るを得ず。この名分にして誠ならずば、
彼の品性も亦瑕なき品性と云ふべけんや。昔よりある雙關は今も之を破ること能
はず。彼若し神にあらずば善人にもあらず。

キリストの神人兩性はともに其事業と名分に顯はれたり。彼は自ら卑くすること
を憚らず。現世の境に立ちて、向後幾千萬年の間受くべき光榮を望みながら、俯して
弟子の足を洗ひたり。彼は人間相互に與へ求むる助力をば油斷することなく、人に
與へたり。世の光榮に目眩ます身の卑賤によりて心屈せず。之を説明す可きものは
昔よりある「彼は神より出で神より來れり」との一語の外にあらんや。

第七章 基督の奇跡

汝等之よりも大なる事を爲すべし

基督傳

奇跡の哲理を論ずるは本書の結構に適合せず。奇跡有り得べきや否やは既に人格を具へたる神を信じたる人には疑問にあらず。又奇跡の實に有りたるとはキリストの神たるを信する人には疑問にあらず。若し夫れ哲學上より奇跡の根據として十分なる者を擧ぐれば神の自由なること、神の力は宇宙の創造維持の爲に用ひ盡されたるにあらずとの事實より立論し得べし。然れども我等は一步を進めて宇宙の順序は人の罪惡によりて紊亂せられたるが故に神の匡正を要することを言はん。とす。人は自由の意志を用ゆる道を誤りて世界を腐敗せしめたる故に、之を本に反すには神の力其の上に加はるを要す。この道德的秩序を回復せん爲にキリスト



基 督 傳

世に來りぬ。此事既に奇跡なり、この奇跡を成就する爲に他に多くの奇跡なかるべからず。夫れ宇宙の歸趣は人の救拯成るによりて神の榮光の彰るゝことなり。萬般の事盡く此の歸趣に至らん爲に安排せらる。この終局に眼を着くるにより人は廣大なる物質界に壓倒せらるゝを免れ得べし。茫漠たる宇宙に一点を打るに過ぎざる吾人は果して何者なるか。バスケルをして震慄せしめたる寂寞たる空間の閉せる中に立ち迷ひ四邊は唯熱火を燒ける幾多未知の世界に圍まれたる我等果して何者なりや。答へて曰く、我等は是れ神の教會あり、神の血をもて贖はれたる者なり。天地の運行も我等の爲なるに、若し我等の爲ならんには奇跡も亦否まるべきや。但基督教の奇跡に於て具はるを求むべき數個の條件あり、第一、其奇跡は徒に人目を驚かすべき巧技を弄するにあらずして、道德的の意義と目的を有するものたるべし。人を喚び醒ましして神の說教を聴かしむる宇宙の大鐘の響たるに止まらず併せて亦說教の一部分たるべし。次に要求すべき條件は奇跡が容易に行はるべく、力を勞して爲すの痕なく又之を街ふ風なきことなり。人にして之を爲さんか、爲す前

には力を極めて爲し、爲し卒ふれば之を誇る。神之を爲すならば優に之を爲し前に準備なく後に誇ることなからん。又次に具ふべき條件は奇跡の應驗半成るにあらすして全く成ることなり。以上三個の條件、(一)道德的、(二)心靈的の目的あること、(三)優に成るべきこと、(三)完く成るべきこと、以上三者はキリストの奇跡に於て具備することを期するも不當にあらざるを信ず。我等は先づ最初の奇跡を吟味し、次に奇跡の種類を分別したる上、以上の條件の有無を檢せん。とす。

一、最初の奇跡

キリストは十字の高き木の上より過ぎ來し生涯を願望して「事畢りぬ」と云へり。天父の聖意を残りなく果たして缺けたる所亂れたる筋露程もあらざりしを識るの心此言に表はれたり。洵に彼は正しき時に生れ、正しき時に黙し、正しき時に語り、至上者の圓滿なる意志を行ひ成すの道一として適正を得ざるはなかりき。彼の生涯に學び入るの深さに隨ひて、彌其靜なること、其秩序あること、事を操るの態雍容なるを見得るなるべし。カナの婚筵にて行ひし奇跡は最初の奇跡なりと明記せられ

たり。彼の説教を傾聴すべく人を喚び醒す、宇宙の大鐘はこの日を初として撞き出されぬ。爰に眼を着けて此の一段の記事を讀まざる可らず。さらばキリストの生涯に於て過ぎ去りし事又來るべき事の映し出らるゝ節少なからざるを見む。望むらくは過去の行路を返照する多少の光線の尋らるべきを、又この日は神の命する途に身を投ずる初なれば、靜平無事なりし年月に別を告ぐる様如何なるかをも見らるべきを。又今までとは事異にして風雨多く悲劇多き未來に入る時なれば如何なる思ひして前程を嚮望したりしかも知らまほしく、又彼の一生には渾然たる諧和あるを思へば、この一段は宛も主調の如く全曲の調子を定むるものあらん。今序を透うて、此等の諸點を解説せんと欲す。

一、キリストが自己に就き神に就きて顯彰するや順序を透うて進みたり。其生長するや神の前にて嫩き植物の如く育ちたり。一朝忽然として圓滿盛麗の美を吐きしにあらす。其生命は日又一日培養せられ、其言と行ひの光と榮は神の光明を映發し

つゝ次第に照り添ひたり。キリストの行爲に於ても亦一樣の次第ありて、この最初の奇跡は罪の汚染未だ世になき先に人に顯れたる神の心を顯せり。この時神は恵豊なる施恩者として人間の幸福の爲に施し給ひぬ。人獨り在るは善からざれば、神は婚姻を承準せり。婚姻の筈は歡喜の節なれば、キリストはこの歡喜を助くる物を與へ其分量の多きとは小心なる道徳家を驚倒せしむるに足れり。其品質と云ひ又豊富なること、云ひ神よりの贈物たるに愧ぢず。向には自身の飢を醫する爲に一塊の麴包を作ることさへ否みたる人は今や少き者の歡を助け恥を包まんが爲に葡萄酒を與へたりしを思へば益々其の寛裕を知るべし。之より後の奇跡は之と異なりて概ね醫療回復の奇跡となる中には死者を甦らしむることも三回ありき。人の心清淨ければ身も亦清淨かるべきに、罪は靈魂を破壊すると共に身体をも破壊して人界の病と死の母となりぬ。かくて罪より生じたる不幸、破壊に對して神が痛激なる同情を抱けることはキリストの奇跡によりて表はれぬ。この破壊を回復する奇跡は最初の奇跡の偏に恵與ありて未だ罪の認められざるに比して、更に良く神

の心を表して榮光あり、又慰籍あり。遂にキリスト一生の事業終に近づきしとき、榮光は最も盛に顯はれぬ。彼の日今や大海に没せんとする時、光彩最も麗なりき。彼の弟子の一人劍を抜きキリストを捕へんとして來りし祭司長の卒の耳を斫り落とせり。イエスは緊く縛られたる手を寛められんことを乞ひ許を得て斫られたる耳に手を觸れて之を療したり。狂暴の極たる敵に對して表はしたる大愛は神の心を顯彰して最も高く上れる時なり。

二、最初の奇跡は彼が今や全く別離したるナザレの舊生活の光景を反映する所あり。我等は數々問はんと欲す、イエスの一家はナザレに於て如何に暮せしか、彼は一家に於て如何に振舞ひしかと。古來大膽ある想像を用ひてこの空隙を埋めんとせしも徒爾なりき。我等は唯聖書の傳ふる短き斷片を拾うて満足したりしが、今この處に於て聊か之を補ふべきものあるを見逸すかかれ。良くイエスを知れること母に若くものあらんや。母はイエスが神より出でしを知れり。その神性の幽に現はる

所^{ところ}に意^いを留^{とど}めて之^{これ}を胸^{むね}に藏^{かく}めたり我^{われ}子^こが幼^わ年^{ねん}少^{せう}年^{ねん}成^{せい}人^{にん}と生^いひ立^たつ間^{かん}に其^{その}勞^{らう}苦^くを厭^{いと}はざることを敬^{けい}虔^{けん}常^{じょう}に篤^{あつ}きこと天^{てん}父^ふの意^いに違^{ちが}ふの誠^{まこと}なることに注^{ちゅう}意^いせり三十
 年^{ねん}の間^{かん}晝^{ひる}も夜^{よる}も彼^{かれ}を見^みたることなれば彼^{かれ}が如何^{いか}なる風^{ふう}の人^{ひと}なるかを語^{かた}り得^えるこ
 とマリヤに優^{まさ}るものあらず今^{いま}マリヤがイエスの人物^{じんぶつ}を證^{しやう}明^{めい}せる言^{ことば}を見^みよマリヤ
 は其^{その}僕^{しもべ}に告^つげて云^いへり何^{なに}にて汝^{なんぢ}等に命^{いのち}する事^{こと}を爲^なせと一言^{いっご}の裡^{うち}に一篇^{いっぺん}の傳^{でん}記^き
 を含^ふめり敷衍^{ふたふ}して之^{これ}を云^いへば「我^{われ}はこの年^{ねん}頃^{ころ}彼^{かれ}の爲^なす所^{ところ}を注^{ちゅう}意^いして視^みるに過^{あや}誤^ごあ
 るを見^みず彼^{かれ}は我^{われ}等^らに從^{したが}へり然^{しか}かも我^{われ}等^らも彼^{かれ}に順^{したが}ふを喜^{よろこ}ぶとせり彼^{かれ}の眸^{まぶた}は我^{われ}等^らを命^{いのち}
 令^{めい}せり汝^{なんぢ}等^らにも亦^{また}然^{しか}かあれよ彼^{かれ}は人^{ひと}の指^し導^{どう}者^{ぶつ}命^{いのち}令^{めい}者^{ぶつ}として生^なれたりさうば彼^{かれ}
 が命^{いのち}するまゝに之^{これ}を爲^なすべし」とイエスが尙^{なほ}は家^{いえ}に在^ありし年^{ねん}月^{げつ}の生^{せい}活^{かつ}の隠^{かく}れ
 たる節^{ふし}は不^ふ思^し議^ぎにも茲^{こゝ}に照^てらし出^いでらるゝにあらずや又^{また}爰^{こゝ}に奇^き跡^{せき}の始^{はじ}めなり
 とあるも亦^{また}た過^{あや}去^しの面^{めん}影^{えい}を現^{あら}はすにあらずや人^{ひと}の想^{さう}像^{ざう}はナザレの生^{せい}活^{かつ}をば奇^き跡^{せき}
 にて満^みちたるものとして描^かかんとす然^{しか}れども實^{じつ}は然^{しか}らず時^{とき}の報^{はら}せらるゝまで一
 も奇^き跡^{せき}はあらずや神^{かみ}の時^{とき}辰^{しん}はこの時^{とき}初^{はつ}めて懇^{こん}き初^{はつ}めたりカナの奇^き跡^{せき}は實^{じつ}に最^{さい}

基督の傳

初^{はつ}の奇^き跡^{せき}にてありき。

基督の傳

三^{さん}過^{あや}去^しの生^{せい}活^{かつ}は既^{すで}に往^いきぬ今^{いま}キリス^{キリスト}トが過^{あや}去^しに別^{わか}かるゝ態^{たい}の如^{ごと}くを見^みよ彼^{かれ}は其^{その}
 母^{はは}に謂^いて曰^いく「我^{われ}は汝^{なんぢ}と何^{なん}の關^{かん}與^あらんや」と此^{こゝ}の言^{ことば}の峻^{しん}嚴^{げん}なりと見^みゆ主^{しゅ}角^{かく}を削^けり
 落^おとさんとして種^{しゆ}々^々に解^{かい}釋^{しやく}を加^かへたる人^{ひと}あれども歸^{かへ}する所^{ところ}イエスが神^{かみ}の子^こなる
 ことを記^き憶^{おぼ}したる上^{うへ}にあらざれば到底^{たいてい}説^{せつ}明^{めい}し難^{がた}きものを餘^{あま}せり此^{こゝ}時^{とき}のみならず
 して之^{これ}より後^{のち}イエスと母^{はは}との關^{かん}係^{けい}に於^おて度^{たふ}々^々之^{これ}あるを見^みひイエスは今^{いま}までは母^{はは}
 の意^いに順^{したが}ひたり然^{しか}るに今^{いま}や肉^{にく}身^みの縁^{えん}は斷^たえられたれば今^{いま}後は舊^{ふる}の如^{ごと}くに從^{したが}ふ能^{あた}はず
 一^{いっ}層^{そう}高^{たか}き處^{ところ}よりの聲^{こゑ}は彼^{かれ}を呼^よべり今^{いま}行^ゆかざるべからず神^{かみ}の事^{こと}業^{ぎやう}の爲^{ため}に地^ちの縁^{えん}故^こ
 を斷^たつことは實^{じつ}にキリス^{キリスト}トの十^{じゅう}字^じ架^かの部^ぶ分^{ぶん}なりき又^{また}古^{ふる}來^{らい}彼^{かれ}に隨^{したが}ふ人^{ひと}々の十^{じゅう}字^じ
 架^かにてありき思^{おも}ふにイエスの爲^{ため}別^{わか}けて親^{おん}近^{じん}なりしは母^{はは}なりき愛^{あい}深^{ふか}きイエスの性^{せい}
 情^{じやう}を以^{もつ}てして幼^わ少^{せう}より偕^いに在^ありし者^{もの}に離^{はな}れ難^{がた}き思^{おも}ひなからひや母^{はは}が彼^{かれ}の公^{こう}事^じに際^{さい}
 を容^{ゆる}れんとするを拒^き絶^{ぜつ}するは苦^く痛^{つう}かりしならん我^{われ}等^らも亦^{また}マリヤが只^{ただ}管^{くだ}にイエス

を便とし母子の關係の長く舊の如くあり得ざるを合點する能はざりし衷情を憐まざるを得ず。最後までもイエスに戀々として十字架の下に立ちしことを記せる聖書の數語最も人心を感せしむ。イエスの臨終の苦悶は母の側にあるを見て一に輕められ一には増されしならん。イエスは告げざるべからず實にこの席にて告げぬ、他の人も彼女と同じく彼に親みあることを得べく、神の意を成す者は悉く彼の兄弟なり姉妹なり又母なるを。

四、過去を回顧するのみならずして又前途を望み囁る。曰く「我汝と何の關與あらんや我が時は未だ到らず」。後の一句多くの解釋者を惑はしめたる所にして或人の如きは之は羅馬教の人も新教の人も到底説明する能はずと云へり。然れども今や平靜なる生涯を辭し決然として苦戰暗澹の生涯、死にまで暗くあり行く生涯に歩を移さんとする人の感情を爰に見るべきにあらざるや。眠より覺めて迎ふる其日は慘憺たる悲劇に終るべき其曉に發する聲にあらざるや。イエスは言へり、此夜は明け

基督傳

基督傳

なんとすれども尙少頃の時を餘せりと。イエスは今しも畏を合ひて灰色に明くる曉天に目を開ては又一度躊躇せり。時々刻々總て辛酸なるべく終に夜半の暗愴に果つべき一日なれば彼はナザレの故郷を愛したり。聖き美はしき一生の曉は幸なりき彼の敵が辱めん爲に十字架上に標したる「ナザレのイエス」てふ名はイエス自ら敢て恥とせざりし名にて、天よりサウロを呼びし時までも用ひたる名あり。彼は路坦かなる綠野の旅を愛したりしに今や路は盡きて之よりは石角足を嚙むで血滴たるの嶮に入らんとす。爰に至りて心暫したためらひつ、我が時は未だ到らずと云へり。然れども又忽ち自己を喚び醒まして事業に身を投じたり。

君が柔けく音無く埋むるそは何物あるや
 此處は我が驕れる意志の墳墓にぞある
 之をこの小き室にて靜に眠らしむ
 我が望をも亦この墓に葬り了りぬ

イエスは他人の如く摧くべく埋むべき驕情叛心を有せざりしと雖も、この際亦

第七草 基督の奇跡
場の戦なきにあらざりき。大受難前の受難に臨んで多少の躊躇あり。この後時々この痕迹あり。然かも堅確なる目的を以て之を制御し、エルサレムに於て命を授くる日まで進行せしめぬ。是の如くして彼は事業に手を着けたり。鐘聲響き初めぬ。彼決して退却せず。

五、最後に云ふべきことは、この一の奇跡は主調の全曲を整ふる如くこの後行はるべき奇跡の調子を定むることなり。キリストは奇跡によりて神の榮を彰せしは固よりなれども兼ねて又自己の榮を彰したり。モーセは神の榮を彰せり、其本分の是に止まるを忘れし時には罪に陥りたり。然るにキリストの奇跡は自己の榮を彰せり。我等の爲に勞し又憐むべき彼の情と彼の力と彼の意志はこの奇跡に現れたり。始に現れたることは一貫して終に到たる。總じてヨハネの福音書は一を擧げて他を表章するの体を用ひたればキリストの事業の性質は大體この一奇跡の内に表章せられたりと觀るも不可なからん。自然にして平凡なる事物を取りて之を富ま

し之が面目を更新す。地の水を更へて天の葡萄酒となすはキリストの事業なり。奇跡の始まる此處に神の啓示も亦始まるを見るべし。唯一個の奇跡によりて過去を反映すべく、未來を展望すべく、今後行はれんとする奇跡を整ふる主調も亦茲に聽くを得たり。

第二、奇跡の種類

キリストの奇跡は其キリストの能力と性質とを十分に人知の達し得べき事物の限界内に於ては表彰せる者なり。彼が自然界に及す力、外物に及す力、人跡に及す力、人心に及ぼす力、死と死の權を掌れる悪魔に及す力は實例を以て表示せられたり。

一、キリスト自然界を支配する力は海の波を鎮したる奇跡に表る。彼は或日弟子と舟を同ふして風波多きガリヤ湖を渡れり。彼は艫に枕して眠りぬ。人の子は枕を安すべき處なかりしも、疲れたる頭は處を擇ばずして枕に安じ易し。イエスは此日頗る疲れたり。勞する人の眠は甘美なり。イエスの重く夢無き眠は風濤の怒哮にも

驚かされず弟子等も輕るしく師を喚び起こさず堪へ得べき限りは堪へたりしが、遂に浪打ちこみて殆ど舟に滿てり。此は馬可傳の記事にて舟中の人の見たる様なり。馬太傳には「舟を掩はんばかりの波立てり」とあり。此は岸に立てる人より觀たる光景なり。是に於て弟子はイエスを喚び醒まして曰く「師よ我等が溺るゝをも願ひ給はざるか」。信依の心と凡性と相戦ひしが、信依の念勝ちたれば來りて「師よ」と云ひ得しなり。人は或る處までは各人同様なり。然れども一朝生涯の大危機に臨む時は頼む所有る人と之なき人との差別を生ず。信依と恐怖相半せる弟子の聲を聞てイエスは起ちて答へて曰く、「汝等何ぞ懼るゝや信仰薄き者よ。靜なる其精神は他の心をして靜ならしめぬ。又風と濤を叱して靜まれと云へり。さしもの大波も鎮まりて穩なる蛇波となり既にして万頂の碧平となりぬ。事何ぞ容易なるや。今まで疲勞して休みたる人忽ち起ちて自然界の勢力を制伏したり。眠りたるキリストと覺めたるキリスト、即ち人性の弱點吾人に近くして且神の大能あるキリスト、この二面を併すときに我等が依り頼むべき人の姿は現れ來る。

基督傳

基督傳

二、キリストが外界の物を制する力を有したることは、水を變じて酒となしたる奇跡に現れたるが、五千人に麩包を施し與へたる奇跡にも現れたり。この奇跡は一大動搖を惹き起したる奇跡にして、又之に原づきて生命の麩包に關する説教ありたり。四福音書の記者は孰れもこの奇跡を傳へざるなし。群衆雜踏してイエスに押し迫りぬ。彼は靜居を求めて此處に退きたれども群衆後に尾して來るが故に休息の隙をわらず。此處にて復彼等に説教せし後イエスは人々が飢ゑたるべきを察して、彼等に食せしむべき麩包ありやと弟子に問ひしに、一人の少年ありて大麥の麩包四片と二尾の魚を携へたるのみあり。大麥の麩包と云ふはガリラヤ村民の常食となせる黒麩包あり。數千の人にかばかりの量をば何にすべきとて弟子等は途方にくれたり。イエスは弟子に命じ群衆をば伍を爲して草の上に列ばしむ。時は早春にてありしと見ゆ。この國にては四月の末には野の草を焼けばその後には斯る綠草を留めざるべければあり。來り居りし人々も信仰ありしと見ゆ。命せらるゝまゝに居列びたり。排列漸く整へばイエスは少量の食物を携へて立ちし時、何事かをかなすら

傳 督 基

んど人々イエスの顔を打成りたる様如何なりけん馬可傳に「衆人を組々にして」とある原文は花園の畝の整列せる如き意あり東方の風俗として彩ある衣を聯ねて青草の上に並びし様花畝にも似たりしならん。キリストは未だ手中に無き物をあてにして準備しつゝあり宛も晴天の日に雨漚の溝を掘る人の如き又未だ生へ出でざる穀物を納るゝ納屋を作る人の如し然かもキリストは聊も自ら危むの色なく大なる慈悲心を湛へ又この慈悲心を成す力充分なるを自覺して立てり準備總て整ひし後麩包を擧げて之を大衆に領ち與へたり人各分配に與り残りたる麩包の屑は復の用に充てんために拾ひ集められたり此奇跡は深く人心を感動せしめ熱心は昇騰して遂にイエスを推戴して王とするに決しぬ此奇跡は或點より云へば福音書中の奇跡の最も顯著なるものにして近世の論者の忌む所の奇跡なるかイエスの奇跡を行ふ方を用ゆるの容易周到なるのみならず又之を用ひて濫ならざるを見るべし彼は麩包の殘片を拾はしめたりこの外イエスは人の肉体的需用を充たさんための奇跡を行ひしこと多からず多く之を行はゞ或は正直なる勤勞

無くして生活し得べしと誤り信する者あるを恐れしならん無差別なる慈善は貧人を腐敗せしむキリストの行ひし慈善は實際の必要に應じ真正の利益を與ふるに適當せり。

傳 督 基

三、イエスの行ひし奇跡の中には人の身体に關したる奇跡即ち醫療的の奇跡最も多數なり其頃パレスチナにて行はれし病の中には人の忌む病も亦少からずイエスの到る處病める人湧り來りしが皆病を癒されて去れり斯く病人と病人の爲に請ふ人の繁雜に堪へずしてイエスは癒されたる人に評判を立てざるように注意せしこと屢次なり又癩癩病人を癒し盲目の目を開きたり東方にては今日に於ても盲目の人甚だ多しイエスは又熱病の患者を癒やせしに頓に癒へて疲勞の様なく強健なる身となりたりイエスの病を癒やすや病の種類を論せず又時日を要せず助力を仮らず又其人に接せずして癒ゆべきを定めたり病の癒ゆるや漸を以てせずして即時に全快せり。

四 イエスは又人心に加はる力を具へ人の胸中を識り得たり初より己を敵に賣る者の誰なるかを知れり。ナタナエルが無花果樹の下に立てるを見て之を見識りたり。シモンが心中に公明ならざる念ひを起しつゝありしときイエスは之を洞察したり。イエスの前には人皆裸の如く露れて隠るゝ所なし。

五 イエスが死に勝つ力を現せしこと三回終には自己の復活によりて之を証したり。死人を甦らしめたるはヤイロの娘と寡婦の男兒とラザロと三人なり。イエスが死に觸接したることは我等の知る限にては以上三回に止まる。ヤイロの娘は今しも死したる所ありき。寡婦の男兒は死後數時間を経過して野邊送をあす時なりき。ラザロは死して四日を経たり。この差異はイエスに取りては相關せず孰れをも容易に喚び起して元の生命に回したり。孰れの場合にも一に親しき者の死を傷める人を憐む同情より發したり。ヤイロは會堂の主幹者なるが其娘病革り今や命絶えんとするを見走り出で、イエスの在りと聞く處に行く。イエスは今や税吏罪人

基督傳

基督傳

と偕に食卓に就けり。饗宴の主人と云へば亦人の齒せざる税吏にしてヤイロが會堂より驅ひ拂ひたることもありし人あらん。ヤイロは之にも拘らず入りてイエスに嘆願せしが、イエスは之を諾して一從者の如く後に隨ひ行けり。途中にて病める婦のイエスの衣の裾に觸れて病癒ゆることあり。後章に詳なり。かくてヤイロの家に到着せし時娘ははや絶息せり。イエス曰く「娘は死せるにあらず唯眠れるのみ」。イエスは自己の行爲を大く見らるゝを好まざる故唯眠れるのみと云ひしなり。然して優しき言をかけて少女を短き眠より喚び醒ましぬ。

又一度は寡婦其の獨息子の子の柩を送り哭しつゝ行くに逢ひて慨然に堪へず、柩に手を着けて云ひけるは「少き者よ我汝に命す起さよ」。イエスは友として愛せるラザロの墓に到り、亡せし者の姉妹にてイエスの平素愛せる二人の悲いと深く又偕に在る猶太人の泣くを見て、イエスは一には罪の力の勝てる結果として世に死あるを怒り苦み、一には哀む者の誠の涙に同情を動かされて彼自らも泣けり。然して叫んで曰く「ラザロよ出でよ」。彼の兩頬は同情の涙に

濡ひたるも聲は墳墓の暗黒を貫き「死」の冷にして鈍き耳朶に徹しぬ。死せるものは布にて裹まれしまゝにて出で來りぬ。アウガスチンの言こそ目覺ましけれ、曰く「イエスは特にラザロの名を指して呼びぬ。盡くの死人の出で來らぬために。」

寡婦の兒甦りて言語し初むるや之を母に渡したり。少女の甦りしとき細なる注意を以て之に食物を與ふべきことを命じたり。又ラザロか顔と手足に猶布を纏へるまゝなるを見驚の餘り茫然石の如くありし人々に注意して布を解かしめたり。

イエスの爲す所は一として美しく且注意周密ならざるはなし。

六、イエスは死の權力を掌れる者即ち惡鬼に勝つる力を顯したり。當時一種の病ありて、イエスは之を不潔なる靈の力に歸したり。一方に善の力強く顯れ來るに當りては之が爲に勝たるべき惡の力も亦常よりも明に顯るを許されたるならん。イエスは之に出會ふ毎に之を征伏したり。爰には最も著明なる者を擧げんとす。長さ間

この惡靈に憑かれたる人あり、衣を着ず家に居らず出て、墓の洞に住めり。イエスを見て叫んで曰く「最と高き神の子よ我爾と何の關係あらんや。」イエスの眼力に觸れては隠れたる惡鬼も身を置く處無きを感じたりけん。然して惡鬼は逐ひ除かれぬ。今まで惡鬼に憑かれし人衣を着け定かなる心にてイエスの足下に坐せり。これ聖書に記せる光景なるか、向の狂乱不幸の狀と對比すれば油然たる平和の態如何に美しかる。彼は坐し居るなり、向には荒れ猛りて一刻も靜に居る能はざりしに、張りつめし勢は緩みぬ。彼は衣を着けてあり、鐵鎖を口にも繋ぐこと能はざりしに、今ははや人並の禮儀を辨ふるものとなりぬ。彼がイエスの足下に在るの一事總ての變化を説明す、イエスは彼に靜平と本心と禮儀を回復したり。此郷の人が愚にもイエスに去らんことを求めしに反して此人はイエスに隨はんことを請へり、舊き惡鬼の力が復もや其心に攻め來らんかと氣遣ひしならん。

以上擧げたる記事と又其外の記事を見れば我等が首にイエスの奇跡に對して當

然要求して可なる條件として數へしものは悉く満足せらるゝにあらざるや。イエスの奇跡は豊富なる力を注ぎて何の苦もなく之を成し遂けたり。數度か之を行ひて衰へ疲るゝ状なかりき。見る人は驚けども自ら驚かず。然して裁限なく之を行はす。容易にして余力裕きけども毫末も尺度の外に洩れず。又彼の奇跡は首尾完成して加ふべく、又訂正すべき餘地あらず。盡く神の性質と目的の表現を孕めり。中には心的眞理の特別ある箇條を符章的に表白せりと見るべきものもあり、全体に於て神の心と情を明啓したるものにあらざるなし。我等がイエスの奇跡を他の奇跡と全く別種のものとするも故ある也。

イエスは自己の奇跡にさして高き品價を附せず。弟子に向ふて『汝等之よりも大なる事を爲すべし』と云へり。之よりも大なる言を語るべしと云はず。又之よりも大なる思想を得べしとは云はざるなり。キリストも、奇跡によりて救治し得る所は只暫時の間にて、病は復た起ることあるべく、死の苦は人必ず嘗めざるべからざるを知らざるにあらず。然るをイエスが奇跡を行ひしは自然に出づればなり。思ひ見よ神

人となりて現れ世の不幸と禍の多き間を経ながら盲者の如く又救ふ力なき者の如く之を觀過さすべきや。これ有り得べからざる事なり。故にキリストは奇跡を行ひたり。之を行ふ上は漫然たる一時の好奇心を満足せしむる如き奇跡を行はず。之に因りて信仰心を起さしむるを目的とせり。

奇跡を行ひしが故にキリストを信すべしと云はんか、これ未だ十分ならず。キリストを信するが故に奇跡をも信すべしと云はんか、これも亦十分なるを免れず。キリストは一の全体として現るキリストの人格と行爲と二者を分ち得べからず。我等は二者の全体として合せる所を信す。

第八章 基督の教訓

未だ斯人の如く語りし人あらず

キリストの教を聴きし人の必ず注意し得たる一點は彼の教が他人の教と全く類を殊にせることなりき。「未だ斯人の如く語りし人あらず。彼は人の如く語れども人は未だ曾て彼の如く語る能はず。其の説教を聴き來りし人の評する所によれば彼の説教は學者の如くならず。教旨の良否は未だ識別し能はざれども少くとも今まで聴き慣れたる教とは相異なることは觀誤らざりき。

キリストの教訓には神性と人性の兩條の線亦常に相糾へるを見る。

キリストは權威を帯びて語りぬ。この一事先づ當時の學者と體を異にする所として人を驚せし所なり。當時の學者は他人の權威に據りて教を立つるを常とせり。彼



等は好んで口傳的の釋義を引用し、前人の見解に訴へて聽く人の同意を得ることを求めたり。獨りイエスは自己の權威に原づきて、我汝等に告ぐと云へり。學者は自家の意見が反對を以て迎へらるゝことを預期し、又縦し當面より反對を試みずとも新奇ある真理に對して人は陰然反抗の念を蓄ふることを假定し、この反抗に當るべき手段を講じたり。先づ典據を引用して論陣を張り、之を以て勝つ能はざれば感情に訴へて敵城を陥るゝの策を用ひたり。イエスは之と異なり、彼は偏見に訴へず感情に歩を譲らず、自ら懷抱する所は直に之れ真理にして、真理は元來醇良なる人の歡迎する所なること期せる如く語りたり。故に彼は概して議論せず、凡そ東洋の教語は一般に連續弛き語集の躰を用ひ、珠玉を累積せるが如く顆々の美を綴り成したるものにして、一個の生体の如くならず。イエスの教はこの風に遡ふ所あるべし。雖も單に之のみにあらず、彼が「我を信せよ」「我に従へ」「我は真理なり」「誠に實に我汝等に告ぐ」と云ふときは、彼自ら神より出でたる師表あるが故に人心を主宰し、其の同意を得るは當然の權利に屬すとの崇高なる自信を以て語るなり。彼

は舊約書を引照することは之あり然れども之を引照しながらも自ら其以上に立ち其の證認を求めつゝ却て之に證印を與ふるの風あり古の預言者は自ら神の立證者たるを以て本分とせしが故に自身を隠して神に訴へ神斯く言ひ給ふと云へりイエスは絶大なる真理を語るるときも自己以外の保證を假らず彼は權威ある教師なるが故に又人に命令す彼は決して助言せず汝若し同意ならばと言はず其の言は命令なり法律あり儼然たる大權の批准を帶ふ之に背くは永遠の破滅を恐れざるなりキリストと世間の教師との差異は法律と助言との差異なり當時人の要求したりしもの今も要求するものは此なりこの時人は既に紛々たる論争に倦み自ら理窟の迷路を探り得るの力を頼む能はず感情に訴へ來らば動搖せざるの覺悟も確ならず如何にもして確乎不拔ある根柢に到達し生命と同じく貴き希望を其上に建て得んことを渴望したり今に於ても豈異ならんや健康の時得意の時に於ては談理研究を好むと雖も一旦大打撃の頭上に落ち來り我が生顛覆するかと思はるゝ時人は我を支ふる或物暗き墳墓の彼方に光を注ぐべき或物を求むるな

り真理の探求は樂しかりき然れども早や餘日幾何もなく永遠の現實目前に迫り來りたる時に得んと欲するは真理の探求にあらすして真理其物なり責任を知り分限を知り歸趣を知れる真理其物なりキリスト既に自ら救世主なることを明言しこの名分は人の心に入り之に満足を與ふべきこと明なる以上は誰か好んで疑惑の地に懸々たるものぞキリストを信ずると云ふ中には固より莫大なる認容を含む然れども人はこの認容を爲すを恐れずして却てキリストが當然占むべき地步を占め高處より人に命令することを感謝するならむ

キリストは人間の狀態を詳に又近く領知し然かも全く其上に超脱せる人として語るキリストの語りたる譬喩を觀るに彼が人間の所行と境涯をば剴切に又懇に觀得したる實證にて充ちたり麩酵を麥粉の中に入るゝ家婦市に嬉戲する小兒種を播く農夫等の家常の光景一として彼の眼を濡れず彼が又人情の最善最惡の極處まで通曉したることは蕩子の喩話にて明なり人或は問はん其の心に曲處なく

第八章 基督の教訓 百十六

其辱は曾て罪の杯の一滴にも染みしことなき人にして、如何ぞ罪の苦味と煩悶を解し得たるか、少くして慈母の許を離れしことなき人如何にして、家を出で、遠國に奔り放逸にして産を蕩した者の身の上を語り得べきか、彼の語をして之に答へしめよ、悲哀なる一條の歴史叙し來りて如何に眞に逼るかを見よ、茲に二人の兄弟あり、弟は愛育の恩最も新しきに先づ之を忘れたり、黄金の鎖も得易ければ倦み易く、遂に財産の分配を請求し受くべき物を凌へ取つて遠地に旅行せり、父母の許を離るゝこと遠きは心安しと思ひ、再び故郷を見じと決心して去りしならん。かくて暫くの間は憂苦勞も知らず、過をせしが、囊中漸く冷き時大なる飢饉其地に起りたりと云ふ、この飢饉と云ふは、蕩兒の貯盡くる時に必ず起る飢饉にあらざるを得んや、金ある間は門戸も財寶も彼の爲めに開かれたるに一朝窮すれば昨日遊樂の侶今日は相識らざる人となり、急を救ふ者一人もあらず、人情の描寫是に至りて深酷を極む、如何せん深酷の畫家即ち絶好の畫家なるを、彼には眞の友なくして只恵に寄るの友のみなりき、進退爰に谷まりて彼は最も下賤なる職業、聽く人をして

覺せず慄せしめたるべき職業に生を託したり、彼は豕を飼はん爲に野に行くことを命せられたるなり、是の如き境涯に沈むに及びて彼は初めて家郷の天を望みたり、始には親を懐ひしよりは寧ろ我家の蓄積豊にして奴僕までも食物餘あるを懐ひしならんか、一念爰に到れば荒漠たる原野木の葉落ち盡したる林の一入物寂しく感せられて一日も堪ふる能はず、彼れは起てり、然れども自ら毛頭親の慈悲を受くる價なきことを覺悟したれば、路すがら父の前に詫ふべき言を案じつゝ、行く我、是く言はん、『父よ我天と汝の前に罪を犯したれば、汝の子と稱ふるに足らざる者あり、我を汝の傭人の一人の如く爲し給へ』と、この中如何なる涙如何に燃ゆる恥を合めるぞや、されどこの言は終に述べ了られざりき、寛恕の慈愛は大江の如く流れ出で、滔らんとする言を堰き止めたり、父は其子の歸るを見て走り出で、其陳謝を聴くに迫わらずして子の顔へ唇に接吻し、延いて食卓に座せしめ、死者復た生き失はれたる者再び見出されたるの歡喜家に鳴り渡れり、偕又茲にイエスが上びたる不徳ども謂ふべきものを描き出づる手腕の確なるを見よ、彼は放蕩にして身

第八卷 基督の教訓 百十八

を誤る粗大なる種類の罪を知ると共に、之に比して凡眼の罪を認めざる所にして、然かも人を殺す力ある罪を知れり。此種類の罪は今婉約なる着筆を以て寫し、其れて語々力あり。長子は紅燈の窓を漏りて照るを望み、又何時になき歡の音を聞き、其次第を知るに及びて、父に向ひて不平を並べ初む。彼は先づ「父よ」とは云はずして、營々たる年月の長きを訴へて曰く「我多年汝に事へて未だ汝の命に背かず。これ情愛なき服従なるのみ。然れども我友と樂む爲に小羊をも與へしことなし。薄愛の性質は父の温情を惹く力なかりしなり。然れども遊女の爲に汝の産業を耗したる此の子(忍)刻なる速断に過ぎず。蹄れば之が爲に肥れたる犢を屠れり」と。弘量なる父の慈心は二人ながら之を包容して各之を恕したり。世には神の眞理を宣傳して有力なる人にして往々相互に嫉視し、狭隘なる感情と戦つて勝ち得ざることあるは恥づべき事實にあらざるや。イエスは盡く罪を知りて盡く罪を脱するが故に、其言に二倍の力あり。彼は罪を説明するに自己の生涯を例とせず、彼が底の底まで知り盡したる人情の歴史に原きて、人の良心を刺し貫くべき武器を探り出だせり。

イエスは自然界に目を留めて、美妙なる言を吐きたり。其の沈着なる眼は人爲の粉飾の徒に華侈なるに蔽はれず。野の百合花の静雅なるを愛で、ソロモン王の榮華を極めし時だにも、其裝此の花の一つに若かずと云へり。然れども彼は世の詩人の多く爲す如く、自然界に愛着するにあらず。博士ワツツの如く「イエスは此世の朽つべき事物に逢うては、一片の愛思を寄することなくして、過ぎ行きたり」と云ふは固より當を得ず。雖も、要するに彼が自然を觀るや、意を注ぎて觀れども、之に狎れず。又感情に耽らず。超然として自然界の上に立ち、一層麗はしき天地を觀慣れたる人の如く語るなり。彼は人間に對しては、貧富の境涯より生ずる偏見を超越せり。福音は貧者に傳へられぬ。ガリラヤの村落細徑を行き巡りて到る處、久しく愁を告ぐる道を得ざりし民の望に酬いたりしかど、其の驩心を結ばん爲に、荷も道を曲ぐる事を爲さず。世俗的の報酬を以て人心を誘はず。其の人に幸福を與ふる方法は人の想像するところど全く趣を異にせり。彼は萬人の救主なるが故に、人民黨の主魁の如く一階級の民を率ゆることを求めず。又富者と結託することをせず。貧富の差別以上

基督の傳

の地に立ちたり。其の言は人の會て攀ち能はざる上流より號令するの風あり。併し
 ながら人の状態と需要を察すること明なる故。割切なる同情其言に顯れたり。
 キリストの教は創新にして、且前代に啓示せられたる真理に聯絡す。近代の學者の
 研究に依りて明にせられたる事の中に於て最も較著なるはキリストの教の性質の
 創新なることなり。同時代の思想に於て稍や之に類似せる者を發見し得たり。雖
 も是れ益々以て彼の教の創新なるを映發するに足れり。彼の教は破壊的なるが故
 に創新なるにあらす。舊き系統を崩して其跡に築きたるにあらす。破壊するは易く、
 建設するは難し。發達せしむるは最も難し。イエスは最も難きものを選びたり。彼は
 猶太在來の宗教の法律訓誡を採り、別に新しく行爲の理想を開き、然して兩者を結
 合したり。律法の一畫も遂げ盡さずして廢せらるゝことなく、彼は之を滅さん
 爲にあらす。成就せんが爲に來りしことを語りぬ。就中山上の垂訓に於て自家の教
 が舊約書の教と聯接して然かも之を超脱することを明にせり。彼は舊來の教誡を
 採りて之を確認し歩を進めて此が行爲に關するのみにあらすして内心の欲求に

基督の傳

關することを説明したり。然して之を推し進めたる境界は舊教法の想ひ及ばざり
 し所にして、神人を愛する如く人相互に愛すべしと云ふに至ては人間最高の智慧
 も未だ愛に臻りしを聞かず。傳説的の格言往々神の大法よりも勢力を世に揮ふ。イ
 エスは傳説の力を倒し人の尙ふ所の者にして神の賤む者多きことを公言したり。
 要するにイエスの事業は事業中の至難なる者にして、衆人と同一水平に下り斯の
 教は新奇なれども實に舊來の天啓を發達して正醇に至りし者たることを解せしめ
 人を引き上げんと力めたり。

單純と深遠を兼ね有す。此れも亦キリストの教の一特色あり。其教の跡極めて單純
 あるが故に普通の民皆喜んで之を聴き、又之を解し得るを樂びて益々進んで之を
 聽かんことを欲せり。而して稍や進んで深く入るに隨がひ始め想像せしよりも遙
 くに大なる意味を含蓄せるを悟りたり。一意の奥に他の深意あり、自己の生命深み行
 くに連れて言の意深きを加ふ。宛も深き井の水透明なれども底を見るべからざる

如く又海濱の貝殻の内に千尋の海の餘響あるに似たり。片言隻句無限界の反響を帯びざるなし。神性の無限の中に宿る。されば此の言ありてより爾來幾千百の星霜は其の蘊蓄を發揮する爲に用ひられたり。深き研究を積みたる學者も僅に其畔岸に立てることを告白す。又キリストの教は萌生力に富むが故に其開發の何處に達するや未だ知るべからず。他の思想界の雄者此の深遠と此の感化力を有する者なし。他の教師は批評せられ論難せられ取つて代らんとする者相踵きて起る。然るに基督教國の民は千歳依然としてキリストの足下に跪くことを甘んず。

基督傳

キリストの言には知識的の品質著しく顯はれて然も徒に巧慧ならず。彼は人に應對するに當りて構思を用ひず。最も巧妙なる言辭は論争の鋒熱したる間より閃き出づ。彼は機に臨みて鋭快なる應答反問をなすを得たれども、好んで之を弄すること稀なり。彼は又調子卑き機智を用いて逸脱せず。其言の體亦た圓滿なり。其文采は外より縫ひ合せたる襪にあらす。願々悉く思想を以て生動す。之を斷つは即ち傷く

基督傳

るあり。然れども躰裁はキリストの専ら意を用ひし所にあらす。聴く者の心に入らん爲にして言ふ者の才を示さん爲にあらす。智識上の優劣は全く度外に措きし所あり。キリストは弟子を擇ぶにも之を智者才子の間に索めず。且然かせざりしことを感謝したり。彼固より學問を輕せず。雖も由て以て事を判する標準は學校の標準にあらす。苟も心靈の純潔と單一に與るものにあらすんば彼の眼中に輕重を爲すに足らず。故に自らも亦智を以て誇らず。若し之を爲さんと欲せば教法院の議員をして謹聽せしめ學者の讚嘆を博すること難きにあらざるも、キリストは一度も之を試みざりき。

キリストは証者として天の事及び未來の事を語る。之を語るに當り天啓の光線をば人の目に適すべく之を包みたり。彼は天父につきて人の知らざる所を知り、神位の内部的の關係を知れり。彼は魔王の電の如く天より墜つるを見、又一人悔い改むる時天使の群中に起る大歡喜をも知れり。彼は天父の家にある多の邸第を熟知し

弟子の爲に居る處を準備せんとして天に行くことを告げたり。ニコデモと語るとき身は狭き街邊の家にあり夜嵐の戸外に吹くを忘れて「天に在る人の子」とは云へり。是の如くイエスは時々高遠の消息を漏らすことあれども概して語る所鮮なし。想ふに緊急なる問題にしてイエスが之に解答を與へずして已みし者如何に多かりしぞ。之に答ふること能はざるにあらず。自己の知識は明瞭、靜平安固なれども、如何せん他人に向ひて明に示すには高きに過ぎ又深きに過ぎたり。

基督の傳

キリストの教訓の特質につき以上數件を列擧したり。固より此は形質上の事にし、て内容に就きて云ふにあらず。キリストは自ら立つる教が天地よりも長く存することを信じたり。彼は世人の用ふると一樣の方法を用ひて之を後世に垂るゝを求めず。之を書籍に録することもあかりき。然れども彼の用ひたる方法は最も有力なる方法なり。この法則を人の心肝に銘刻すること即ち是なり。爾後幾多の人の名は揚がり又衰へ、幾多の言は語られて又忘れられたるに、キリストの言が語られしよ

基督の傳

り以降注意せられ研究せらるゝこと現今を以て最も盛なりとす。或はイエスの言も亦終には忘れられ其感化の衰退すること他の先哲と同じからんと想像する者あれども、予輩は其人に向うて問はんとす。然らば何を以て之に代へんとするかと。茲に必ず充たすを要する一の空隙あり。他人の言之を充たすこと能はずしてイエスの言獨り能く之を充たすなり。其言今に至りて活力ある所以にあり。世に之に代り得べき者の出でざる間は予輩はイエスが「天地は廢せん然れども我が言は廢せし」と云ひし言の確實なるを信せんと欲す。

第九章 基督の使徒

我が誘惑に於て我を憫に在りし者は汝等なり

基 督 傳

キリストの使徒の中には嘗て洗禮者ヨハネの弟子にてありし者あり。或は悉く然りしならん。知るべし。彼等は皆内に道德的熱情を蓄へ世間一般の宗教に満足せず。更に他に需むる所ありし人なるを。彼等はヨハネの豫備的傳道を以て足れり。とせざりしが故に、一度救主の世に現はるゝを見るに及びて心を傾けて之に歸服したり。始は信仰未だ熱せず。舊約書の預言はキリストに於て成就せることを識り得たれども、此の預言をば品等卑き肉体的の意義を以て解したり。然れども彼等は熱誠の人なり。根底を有せる人なり。イエスは相識るの初より人を觀識すること精嚴に



基 督 傳

して、彼等が將來大事を託するに足る人なるを知り得たり。
彼等は始は只時々キリストに隨行せり。カナの婚筵には彼等も偕に在りたり。後幾
くもなく彼等は不斷イエスに隨從することとなり、傳道の旅行に伴ひたり。然して
彼等が見証者となり傳教者となりて遺憾なく任を盡し得ん爲には、通常の弟子の
中より撰拔せる一隊を遣るの必要あり。是に於てイエスは十二人を拔て使徒の職
に任じたり。是には多數の人の相隨ふ煩を避くる爲なるべけれど、主要なる理由
は常に偕に在るべき弟子を遣り、又他日人を漁る者とならしむるの二にあり。十二
の數はイスラエルの十二族に象りしものなるべく、其他の便利もありしならん。使
徒の撰任はキリストの死する前短くとも一年を隔てたり。十二人の中に事跡の
傳はる者少し。彼等は孰れも貧しく門地なき人なりき。是れ當時の智者才子と謂は
るゝ人は、キリストの教を信せざりしにより、又地位なき者は偏見の脱すべき者少
きによるべし。使徒の中に二三者は傑出せる天品を具へ、ヨハネとペテロは其俊
秀なる者なり。ヨハネはイエスが特に愛したる者にて、弟子の中に最も能くイエ

基督の使徒

その精神目的を了解したり福音書を観れば此の人の面目寫し出でられて具備せるに近し。ヨハナは火の如く熱烈にして氣概ある人なり。且つ此の外面の底には大なる柔なる愛情を包みたり。此の愛即ち深遠なる明知にして天啓の奧義に會するを得せしめたる者なり。「愛の使徒」にして又「雷の子」なる兩面の性質を和合するに多少の困難を感じたる人あり。或はヨハナが年漸く長け師の感化深く入に隨ひて少年時代の猛烈なる情熱次第に冷靜に歸したるならんと云ふ。是の如く觀る人の云ひけるは「ヨハナの如き性質を御馴致し得たるはキリストの力の大きな一証あり。旅客古の噴火山に登りて昔は猛火を吐きたる噴火口が今は清冷なる小池となりて天を仰ぐ美しき目に似たるを見るが如し」と。左れども此の兩面の性質を調和すること此人々の思ふほど困難にあらず。ヨハナの性質の深き處は淵の如く靜にして搖かず。一時の風に波立つは其の表面のみ。ペテロの氣質はヨハナよりも解し易し。急激敢爲にして前進の力鋭く情感温にして丈夫なる常識を具ふ。此れ彼の重なる特質なり。キリストは初より此の人の眞價を認め名を與へて「岩の人」と云へ

基督の使徒

り。ペテロの一生を觀るに同一の氣質万事に活躍し、一度は師を知らずと云ひし弱處も亦掩ふ可からず。一夜月色暗淡として風吹くガリラヤ湖上にてキリストの姿を望み其許に近かんと思ふ餘り舟を下り波を踏みて行かんとす。忽ち飛沫面を打ちて浪立ち騒ぐに逢ひては信仰と勇氣ととも挫けぬ。其の後人は皆キリストを棄つるども我は死ぬるまではと誓ひたり。然れども彼の想像は徑に結果に馳せて中間の行程を算することをせず。己の力を描ること多きに過ぎたり。寒冽の空、睡眠の不足、下婢の椰櫚等、瑣細なる事に壓倒せられて我キリストを知らずと公言し、一度挫折すれば怯心は風の如く彼を吹き飛ばして二度三度までも同じ虚言を吐かしめぬ。ペテロがヨハナと偕に在るの光景又福音書に寫さる。イエス復活したりとの報を得て二人相伴ふて墓に往けり。ヨハナが外に立てる間にペテロは墓穴の内に入り半ば泳ぎ半ば歩いて、三度之を知らずと云ひしキリストの足下に馳せ行きた

基督傳

り二人の氣質の差異此にて明なり使徒の一人なるトマスはキリストの復活せし
 と聞きても自ら實見するまでは頑として信せざりき之によりトマスを使徒中の
 ベレと稱したる人あれども此の稱は妙ならずトマスは懷疑者ベレと通有の
 性質少く又十九世紀の懷疑論者とも相類せずトマスの生涯に於て録せられたる
 僅少の事實に憑りて考ふるに彼は冷然として疑ふかど見れば熱烈なる愛情の代
 りて現るゝ所決して普通の懷疑者にあらず彼の心情は温なり彼の氣質は沈鬱な
 り其恐れと疑は縦ひ愛を播すには至らずとも信仰を播さんとするこなきに
 らず其他の弟子につきては多少判然たる印象を留むる者あり或は全く事跡の傳
 らざる者あり或人の云ひし如く、「彼等を以て稀有なる天才の人或は聖徳の人と
 想ふべからず何處の漁村に入るとも其巷の一隅に正直武骨なる輩が圍坐せるを
 見るならん彼等の舟中にて一夜を明かすならば何處に妖恠の出でたりとの話何
 某の家に何事のありしとの噂無學なる質問果つる時なく終夜願を持して笑はし
 めらるべしイエスの弟子はこの類の人なりき」イエスは是の如き十二人を訓練

基督傳

したり彼等はイエスと寢食出入を偕にするの無比なる特權を許されて、日夕見又
 聞く所によりて訓練せられ直接間接の薰陶を受けたりイエスは生涯の大部分を
 割きて弟子の教育の爲に用ひ其教訓は多く之を弟子に語り弟子をして之を宣べ
 傳へしめんとす幽き處にて聽きし所は明るき處に語らるべく耳をつけて聽きし
 事は屋上に播めらるべし師は忍耐して弟子の無知狹見迷信と戰はざるべからず
 但弟子に師に服すの赤心ありしが爲に、此心竟に凡百の障礙を越へて進むを得せ
 しめたりイエスは弟子の程度に適應して懇に眞理を啓發し眞理を解するに足る
 ものとして彼等を待ちたり最も困難を覺わしは弟子が救主的王國の意義を肉身
 的に解したる謬見を解くの一事なりき斯くて漸く進むで彼等が多少此の眞義を
 解し得るものとなりしとき初めて彼自ら死すべきことを告げたり今や行路一轉
 して行く先の見らるべき處まで來りぬ爰に到りて目を舉げて何物をか見るキリ
 スト王となり弟子公侯となりて左右に待べるエルサレムの殿陛にあらすして人
 の子の懸けらるべき大十字架は彼處に立てり。

此の轉折点となるべく向背茲に定まるべき問答は鄭重に載せられたり。イエス先づ問を發して曰く「衆人は我を呼びて何人となすか」。答へて曰く「或人はエリヤと云ひ、或人は古の豫言者の一人なりと云ふ」と。其他に惡名を以て彼を議するを聞きしことありとも、其は憚つて之を包みしならんか。是に於てイエスは局外者の判断より進みて知己の判断に訴へて曰く「然らば汝等は我を誰と云ふか」と。この一問の答によりて、訓練、摸範の成績悉く露れ來るべしと思へば、イエスが氣遣はし氣に答を待ちたるを想はざるを得むや。答はペテロの唇より、音樂と赤心に充ちて出ぬ。爾は活ける神の子キリストなり」と。イエスは喜心中より發して曰く「汝は幸なり、血肉之を汝に示せるにわらずして天に在ます我が父之を示し給ふ」。イエスの身上に關せる信仰既に確立したる上は、一步を進めて將來の事を語るべき時なり。茲に人に向ふて言ひ難き事を言はんとするに當りては、先づ之を告ぐる者は朋友なりとの意を明にして後話の端を發く如く、弟子をして將來の大事に關する啓示を受けしむる爲には先づイエス自身の何人なるかを十分に解得せしむるの必要ありし

なり。乃ち曰く「人の子はエルサレムに上り、長老、祭司長、學者より多くの苦難を受け、て後殺され、三日にして甦るべし」と。彼は「我が仇敵の激昂日に加はりつゝ、あれば終には狂風我を覆す時あるべし」とは云はずして、必ずあるべき確報なりとして語りたり。曰く「我はエルサレムに上り、是れ既に兇報なり、多く苦難を受け、(光景益々暗黒なり)殺され、是れ最早夜半なり、第三日に甦るべし、(一道の光闇を射て)天地再び光明に入る、然れども弟子等はイエスの死すべしとの事を耳に入れしのみ。ペテロは之を聽くや、イエスを非難し始めたり。「主よ不可なり、此の事爾に來るべからず」と。イエスの胸中に若し一點の躊躇ありたらんには、今ぞ之を洩らすべき時なりしなり。人胸中に發めし大目的をば初めて口に發したる時、覺へず心落ち目眩せんとすることあり。秋毫の微にても此の弛みに乗することあらば容易に當初の決心を奪ふに足らん。イエスは然らず、前日荒野に於て我を誘惑して神の國の捷徑を取らしめんとせし其聲を重ねて爰に聞くを覺へたれば、斷乎として之を斥けて曰く「魔王よ我が後に退け、汝は神の事を思はずして人の事を思ふ」と。更に言を續け教へて曰

基督傳

く、彼自ら建てんとする王國は十字架を負ふを以て其法とすれば弟子たる者亦各其十字架を負ふを要す。其生命を失はざらんとする者は之を失ふべく、キリストの下にまで到ること眞正の知慧なると万人に明なるの時節今や開けんすとす。水門一度開かれなば堰かれし言は洩々として湧き出づ。我等が多年胸中に鬱積したる思ありて、終に發し難き第一語を發し得れば其餘は敢て之を難しとせざるに似たり。是に至りては最早イエスの言を遮る者なかりき。何となれば弟子の承諾し難かりしは、イエス親ら十字架を負ふの思想にありて、彼等が十字架を負ふことは素より辭せざる所なればなり。然れども他日此の嚴肅なる結局に到着してイエスの胸底の底より破裂せんかと思はれし時、弟子等の舉動を觀れば、イエスが弟子に期せし所果して幾何か成就せしやを疑はんすとす。彼等はゲツセマテの園中にて師と偕に目を醒まし居る能はざりき。ペテロは三度まで師を知らずと公言し、イエス死して後は思ひ思ひに離散したり。然るにイエス復活して後再び彼等を招集して天

下至る處に福音を傳ふるの大任を授け且つ曰く「見よ我は世の終まで常に汝等と偕に在るなり」。

基督傳

弟子が衆人の中より特に撰ばれし第一目的はキリストと偕に居らん爲なり。イエスは弟子其傍に待すを以て實に喜ばし又力となせり。彼が汝等散りて各々其屬する處に往き唯我を一人殘さん」と云ひし言には哀傷の調を帶ぶ。憂悶正に極まる時に於て友の近く在るを知らんことを願ふ念切にして全然孤獨となるは深く悲しむ所なりき。弟子等が彼の心情に和する能はざるとき温言を以て責めて曰く「斯く一時も我ととも目目を醒まし居ること能はざるか」。彼は弟子等が我が心を解すること能はざるを知ると雖も猶之と偕に在ることを感謝せり。曰く「我が誘惑の間に我と偕に在りし者は汝等なり」。彼は弟子等が復た一度背反不信の境に陥るべきを知らざるにあらす。今日の同情知識どもに僅に半片のものたるを知らざるにあらす。然れども冷熱ある愛情疑惑を混じたる信仰、我意を餘せる服従すらも、イ

エスは感謝して受けたり。世には剛強なる人にして便となりざる弱者を便ること往々之あり。然れどもイエス弟子に倚るは此の類にあらざる。彼は弟子の意見を叩きしことなく、又人相共に祈るが如く弟子と共に祈りしことなし。彼は人と近く立ちながら無限の距離を隔て、自ら居れり。

基督の使徒

左れども使徒撰任の主要ある目的は、キリストの王國の事業を遂行する器たらしむるにあり。聖書を讀む毎に其の中に神の事業を成す人につきて考ふる所今日の思想と頗る相異なるを感せずんばあらず。聖書に於ては神の工人は全く神の器なり。器なるが故に其人の知識天才の如何を特筆するを見ず。ヨハネの深遂、ペテロの英氣ともに福音書に叙記せられず。彼等をして此の事業を成さしめしは彼等の才能によるにあらざる。彼等を使用して事を成す神なればなり。彼等が又奇跡を行ふことを得しは己の力量若しくは聖徳に依るにあらざる。彼等の裡に在りて活動するキリストによれり。彼等自ら貢獻する所の物を有しキリスト之を補助せしにあらざる。

基督の使徒

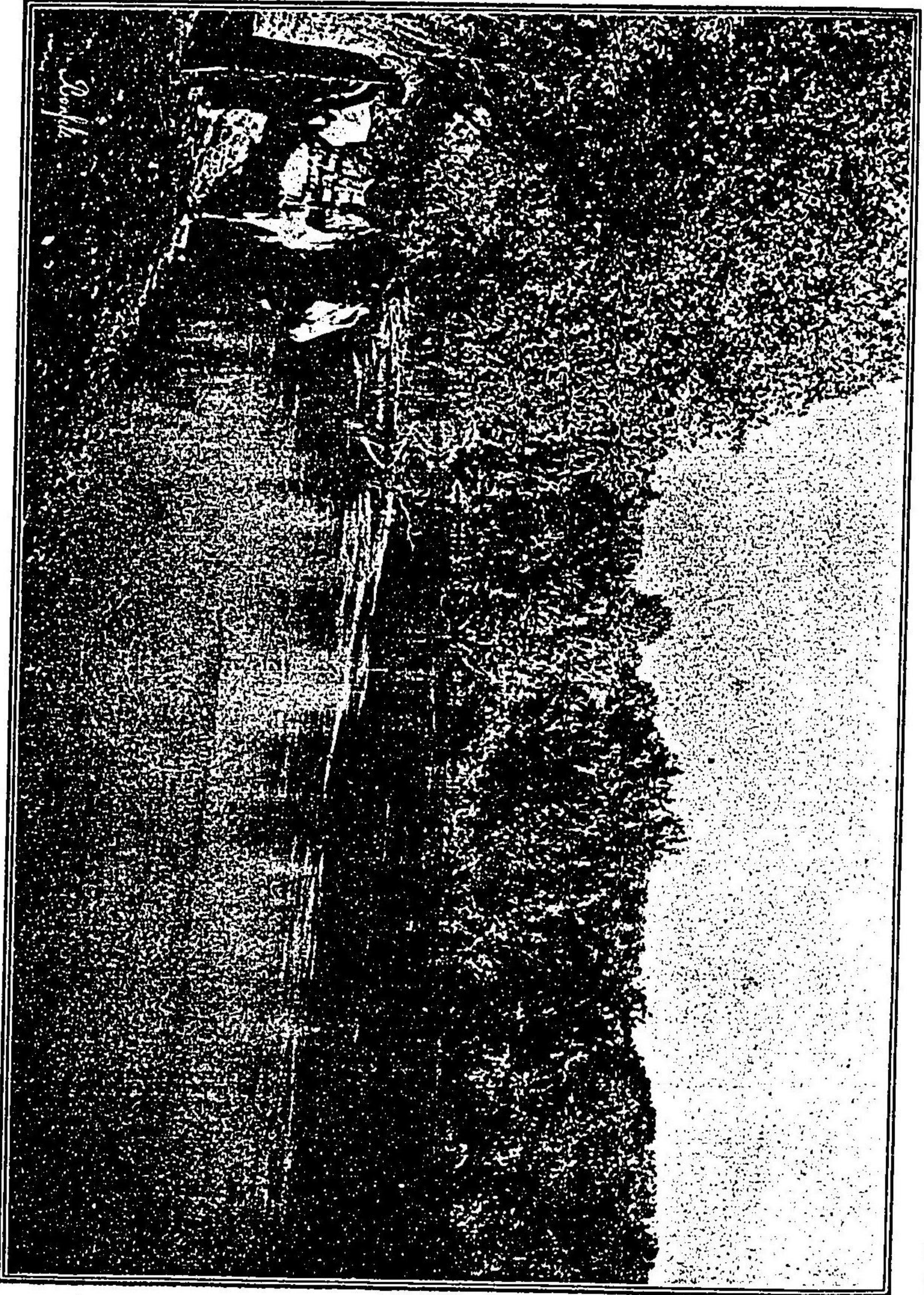
彼の爲に効す所のものは素と悉く彼より贈與せられたるものなり。此の思想は今日宗教界に行はるゝ思想と相距ること遠し。人往々説きて曰く古の教會に出でたる大教師大首領今日の世に出づるあらば今日よりも遙に大なる事業果がるべく、使徒殉教者の如き人物起らば世は日ならずしてキリストに服従すべしと。我等の思想の風習は斯の如し。然れども聖書の見所は之と異にして事を爲す者は直に是れ神なり。十二使徒の中には唯名をのみ留めし人あり。これ何を不可ならん事を成すは彼等にあらざる。彼等に宿れる神の靈なれば、キリスト不朽の王國の建設を企て、之を經營するに當りて俗界の政權の保護に頼らず。撰んで補助者となせし人は粗野なる漁夫の輩にして才智無く、勢力無く富無く、人間の見地より觀れば徒に係累を増すに過ぎずと思はる。然るにイエスは彼等を用ひて不朽の業を營むの材となせり。彼は弟子等を顧みて殘なく其短長を詳にしながら、從容として曰く「小さき群よ怖るゝ、あかれ汝の父は喜んで國を汝等に委ね給はん」。

第十章 基督と神との交通

祈りの爲に山に入れり

基 督 傳

此章に於てはキリストの公生涯及び人間に對する方面より眼を轉じて、其の内部の生活及び神との交通に就きて語らんとす。キリストの敬虔の篤さを叙するに當り第一に擧ぐべきことは、彼が祈禱の多かりし事なるが、之に及ぶに先たち、彼が當時猶太國の會堂に參するを勉めたること、次に聖書を精究したりしことを語らんとす。聖書の記する所によればキリストは規則正しく會堂に出席するを恒とせり。一週六日の間は勤勞して職業を營み、然して第七日は主なる神の定めたる安息日なり。此の日彼は其家を祭れる、小山に入りて静けき安息日を過し、一般に單調にして生命に乏しき會堂の禮拜に列するを避くることを得たりしからん。然れども



基 督 傳

從來の禮拜の風習を尊重するは即ち自ら教を立つる準備としても甚だ有益なる
ことを知れり。獨り之のみならず衆人と俱に神を拜すればキリスト自も心を培養せ
らるゝ所あり。縦令説明に誤謬あるとも説かるゝ所は天父の言なり。捧らるる祈禱
は鈍くして向上心を欠くと雖も、彼等が俯して拜する所は主なる造物者なり。故に
キリストは其處に行けり。彼の如く敬虔なる謙遜なる忍耐ある參會者は他に見ざ
る所なりき。

説教者の中には知識狹隘にして感情薄弱なる者あり。聽衆の中に却て優等なる人
物を見ることなきにあらず。この顛倒したる懸隔は如何に大なりとも、ナザレの村
夫子とイエスの懸隔に比すれば如何なるかを思へ。我等若し家に靜居して良好
なる説教集を繙かば會堂に出席して聽くよりも遙に深遂雄辯なる説教を聽くこ
とあらん。之に係らず神の宮は我等が當然出づべき處なるなり。キリストさへも國
人の集會する處に參するを習としたればなり。彼の名の爲に二三人の集る處には
彼も其席に在るべしと云はれたり。

基督の傳

且既に記したる如くイエスは幼時より聖書の深き研究者にてありき。長き準備の年に於て専ら友として親みしは天父の言なりき。モーセの跡を學び詩篇の神秘なる意味を咀嚼し、代々の預言者がキリストを預言せし其立証の金線を追尋せり。斯くして善へたる聖書の知識は艱難の時に於て如何ばかり彼を益せしむ。嚮には聖靈の劔と稱せられし聖語を引用して魔王を陥伏せしめ、以て人生の險しき危機に適用して聖書の有力なるを教へ、又同じ劔を揮ひて惡魔の門徒を屏息せしめたり。彼は屢々「汝等未だ讀まざるか」と反問せり。終生字句の研究にのみ醒醒として毫も其精神を讀む能はざる半旨の學者に向ひ雷の如き勢を以て「汝等未だ讀まざるか」の一言、其の膽を寒からしめ勝を制したり。時には聖書の語を用ひて精細なる議論の基礎とせしともあり。然れども常に知識的に聖書に通じ之を用ひて攻守の利器となし得しのみならず、又心靈的に之に熟通したり。之を愛し之に依頼し憂悶の時、之に便りたり。荒野四十日の斷食の間彼の食物は聖書なりき。麵包によりて活さずして單に神の言に依りて活きたり。其後生を通じて苦慮苦闘の間に於て慰

基督の傳

籍爽新の源泉となりしは聖書にてありき。竟に死の苦身を壓して來り苦中の苦を嘗むる最後となり、彼は聖書の言を假り來りて衷情を訴へ慰籍を求めたり。天地の暗黒正に極まりし時叫んで曰く「我が神、我が神、何ぞ我を棄て給ふや」。然して「父よ我が魂を爾の手に託く」との一言を以て、世を去らんとする彼の魂は父の許に近づきたり。孰れも舊約の詩篇の中の語にして、彼は詩の莊嚴なる音楽に圍まれて死せしなり。生の時死の時とも因て以て靈魂を養ひ又之を寄せたるは此なりき。

今は彼の祈禱につきて陳べん。キリストが祈禱をなせし事は彼が人性を具へし最眞の証據なり。路加福音書は人の子の福音書となすべく、彼が祈しこと又祈を人に教へしことは専ら此福音書に載せらる。イエスが洗禮を受けて後祈りしこと、癩病人を潔めたる後野に退きて祈りしこと、十二使徒を撰任する前夜は終宵祈りしこと、彼獨りにて祈りたりしに弟子其許に來り此時ペテロが大なる告白を爲したること、彼が祈を爲す中に變貌の不思議の起りしこと等悉く路加の福音書に見ゆ。路

加は又弟子がキリストに祈ることを教へ給へど願ひしこと祈の義務を教ゆべき
 二個の譬喩—寡婦の譬喩と麵包の譬喩—を語りたること、イエスがペテロの信仰
 の動かざらん爲に祈りしこと己を殺す者の爲に祈りしこと、皆此の福音書に記し
 置かれたる事跡なり。アダムよりキリストに至るまでの系圖を尋ね、キリストの誕
 生と幼少の物語を書き留め、總て彼の眞醇ある人性と柔なる同情を見せしむべき
 靈の美しき彩色を加へたる第三福音書の著者の筆によりて此の事の記し置かれ
 たるは偶然にあらず。

基督の傳

祈禱は人と他の生物とを區別する所のものなり。人より以下の生物は祈るを得
 ず。以上の者は祈るを必要とせず。固より天使は天に在りて斷じず神を頌讚す。頌讚
 も亦祈禱なり。何となれば祈禱とは神と交通することにて之によりて神の思想と
 愛が我に宿り我が裡に活動し、我等神に撰ばれて自ら立ち且動きて終生渝ること
 なしとの確信我に定まるの謂なればなり。然るに上に人以上の者は祈るを必要と
 せずと云ひしは、或る必要ある賜を與へられんことを祈願するを要せずとの意な

基督の傳

り。キリストも人として賜を求め助を求めたりしことを思へば其の性我等に相
 近きものありしを感せしむ。知るべし彼の有形上の性質は給養を待たりしを故
 に疲勞し渴しては井の邊に就き、愛する者の墳墓にて涕涙禁する能はざりき。置に
 肉体のみならず其精神も亦倚る所從ふ所需むる所あり。彼が神に交通したりしは
 人の摸表なり。彼は信仰によりて生き、其一生は渾て是れ長き祈禱なりと云ふべき
 ものなれども、猶人の如く時間を別ちて祈禱するの必要を有したり。キリストにし
 て天使と同じく頌讚と崇敬を以て祈禱となしたりども亦敢て怪まざるべしと雖
 も福音書によれば彼は常人と同じく眞實に請ひ求むるの意を以て祈禱したり。
 此の外に猶注意すべき方面あり。イエス、キリストは人にして又神なるが故に、其言
 行に於て必ずこの兩面を併せざるなく、眞神にして又眞人あり、兩者離れて在るに
 あらずして常に合體することなるが、祈禱の事に於ても亦然り。今イエス、キリスト
 の祈禱を考究するに當り順序を整ふる爲に、先づ彼の人性を見る可き者を擧げ、次
 に神性を見るべき者を擧げんと欲す。

百四十四
 第十章 基督と神との交通
 キリストの人性の眞醇なるを表せる祈禱の中に、先づ使徒撰任の前に臨んで彼が爲したる祈禱を取らしめよ。此時に當り敵は既に彼の生命を奪はんことを謀れり。イエスは十二人の使徒を撰任して自己の勢力を張り之を破り難きものとなさんどす。此の撰任の前夜は徹夜して祈りたり。實に此撰任は事業の將來に關係する所重大にして、單に人事の常態より推算すれば彼の王國の命運は全く此一事に懸かるども云ふ可き程なれば、この嚴肅なる事を行ふ前にキリストが終夜祈りしは故あるなり。又彼が次第に近づき來る苦難を初めて弟子に知らしむる時にも先づ祈禱せり。我等も亦大なる撰擇を爲すとき或は結局の一言を發するときは先づ祈るを宜しとす。祈りて天來の知恵を授けられ之によりて幾多の失計と退却と煩悶を免るゝを得べけん。一生の向背去就を定むべき歩趨を進めんとするに臨みてこの驚くべき相談柱の言を聴くを得ば、縦し未だ履まざる難局なりども勇を鼓し力を持して入ることを得ん。然らずして一度此の機會を逸し此問題を決するの道を誤らば終生之を挽回するの時あからん。此の過に陥らざらん爲に我等はキリス

トに倣ひて神を仰ぎ、『主よ我に何を爲さしめんとし給ふや』との間に答を受けて後事を始むるを宜しとす。
 キリストは大事の前に祈りたるのみならず大事の後にも祈りたり。例へば大衆に麵包を興へたる奇跡は、既に説ける如く最も深く人心を感動し争ひ難く神たる力を表したる奇跡なるが、之を行ひし後イエスは去りて一二時間の静居を収拾し、翌日は又早朝より起き出で、祈りに時を移せり。キリストの行によりて教へらるゝ此精神は我等の動もすれば失ひ易き所に於て失へば則ち禍なり。大なる氣力を籠めて大事を果たしたるとき、我は我が分を盡したり此より以上の事は力の及ぶ所にあらずと思ひて自ら慢じ易し。戦勝ち功成りて國民の稱讃藉々たれば、稱讃の間に己が公生涯を終らば望足れりとなし退きて閑日月を貪り懷舊に戀々として餘年を徒に過す人あり。寧ろ如かんや此時神に祈り神意の在る所ならば更に新しき氣力を授けられて、繼令前日の如き大事を爲す能はずども時に應じて功を立つることを期し、若し再度の功を成すの機會に逢はずんば、過去の事業に彌々祝福の加

基 督 傳

はらんことを祈らんに、キリストは功を矜らず又之を中道に廢せず祈りて新しき力を享け以て新しき事業に當りたり。慢心一度崩すあらば當初の單純謙抑の心を喪ひ過去の生活を以て賤陋見るに足らずとなす。斯の如く自ら慢する時はこれ人の最も神に遠き時あり。驕る天使は墮落せり。人間の墮落多く此心より生ず。之に陥るを防ぐの力を得るの道は祈禱するに如くはなし。天父と精神相通ふ時驕慢の心は忽に冷却し破壊せらる。

大事を成し終りし後精神沈銷するの恐あり。滿身の精力を鼓して事に當りたる後に於ては氣力全く消耗せる如き感覺を生じ易し。大衆に向ふて説教する人の經驗を聽くに説教する時精力を傾倒するが爲に其後恐るべき疲倦を覺へ生命出で去りて復回らざる如く感ず。是れ自然の事なるが、この際に處するの道は亦キリストにより學ぶを得べし。斯る時先づ祈らしめよ。我等の源泉は神に在るが故に一度我等を殺して此事を成就せしめたる神は我等をして一度有りて再び有り難しと思ふ事業を重ねて成さしめ、否更に新しく且高貴なる事業に堪へしめん。人の爲

基 督 傳

し得る最大なる事業は祈禱なりとの一言、不思議なるに似て深き眞理を含めり。人生の最高頂は赫々たる功名を成す時にあらずして密室の幽靜の裡神の前に跪く時にあり。神我に授けたる使命に惡寵の加はらんことを求め力を角するが如く、苦む時にあり。説教者は説教を爲す時よりも此時に於て一層大なり。人は神と交通する時に此の大なる特權を與へらるゝを實驗す。労働するは是れ即ち祈るなりとの諺は人の濫用し易き所にして、此言は一面眞にして一面誤れり。圓滿なる生活には祈禱と労働の二面を兼ねるを要す。然らずして労働のみに偏する生活に於ては眞の宗教心は枯稿衰弱す。又實際の活動なくして祈禱にのみ耽る人の宗教は利己的なる奢侈の宗教とあり易し。キリストは終日營々として勞苦せり。然れども多忙あるが爲に祈禱の時を失はんよりは寧ろ眠の時間を割きて祈るを優れりとせり。彼は眞正なる生活に於ては祈禱と事業の必ず共に有るべきことを知れり。

人の子は又大なる苦悶の前と又實際に於て祈るべきことを教へたり。ゲツセマネ園中の大苦悶の時と十字架の死に就く前には一段の熱誠を注ぎて祈禱せり。其時

基 督 傳

汗は血の一滴の如く落ちて慟哭の涙と混じたり之を讀んで我等は恐る苦悶は劇しきに過ぎずや弱き肉体は能く之に堪へ得べきや精神萎靡するの憂なからずやと。

然れどもキリストは祈るなり哀訴の聲天に昇るとき胸中の嵐は次第に鎮まり天より出づる力を受けて茲に全き勝利を得たり之より後總ての艱難の間を經過して坦然として動かす捕卒と法官に對して驚くべき威嚴と忍耐を維持し多くの人の贖として生命を授けたりぬ。

我等も人世の路を旅する中には遠からざる前途にて逢遇せざるべからざる大頓挫大損失大屈辱を望み見るの地に立つことあり人生終に免れ難き悲哀を抱持するのみにては之を堪ゆるに益する所なく唯祈るならば助けを受けん或は人生十字架あるを感せざる人あり又之を期待せざる人あり然れどもキリストの弟子たるも無事に過ぎし家も終には風と不幸との餌とならぬはあらじ。然れど祈禱する

基 督 傳

人はキリスト其人の爲に十字架の重き一端を負ふことを感じ何事の落ち來るなりども縦し死して心と肺と分裂することありども祈禱によりて身構へすることを得べし。

次には祈禱の中に神性の發現せる一面を視んとす上にはキリストを眞個の人として觀たるが眞の神たる徴証も又歴然として見誤らるべきにあらずキリストの祈禱を讀むで第一に心付くは我等の祈禱に於ては重要なる部分なるにキリストの祈禱に於ては全く之無き所の者あること此れなりキリストの祈禱には自己の罪惡を感じて煩悶し之が爲に赦を祈ること絶えて無し進退茲に谷まりて己を助くる人亦く身を託すべき所なく天父さへ我を棄てたるが如き思をなす時彼は天を仰ぎて何が故に爰に至りしやを問ふ唯己の罪が其理由にあらざることば明に知れり此點に於てキリストは弟子若くは信者と全然相異なり彼等は多く自己の罪を感ずるが故に其祈禱は主として懺悔なり彼等は聖境に進むに隨ひて彌々己

の清からざるを感じたり照り渡る神の聖徳の光に照らし見れば身に充ちたる汚
 點の數々は益々明瞭を加ふ古人の祈禱の中に「我等は罪を犯せしが爲に爾の至て
 瑣小なる恩恵すら受くるに足らざるものとなり我等の懺悔總て苦き味を含むも
 のとせられぬ」との語ありて情の切なるや人をして感動せしむ然るにキリストの
 祈禱は熱心にして苦悶し流涕すれども一言として罪を懺悔したるものなし彼は
 心と身に他人の罪を負ひたれども一點も罪に染みし痕なく純白なる神の子にて
 ありきキリストの祈禱の最も長文なる者に就きて見るも其冒頭に罪を懺悔する
 の言なくして却て己が正義を主張するの態あり曰く「我れ爾の榮を世に顯し爾の
 我に委ねし業は我之を成せり」然して最後の祈は「父よ我れ我れを爾の手に委ねし
 の祈にてありきこの時に爾我を贖いたれば」との言を加へざるなり彼は贖ふ者に
 して贖はるゝ者にあらざれば
 又驚くべきことはキリスト數次人の爲に祈り又人の前にて祈りたれども人と俱
 に祈りしことなし人は相俱に祈ることを好むキリストも共同の祈禱を獎勵して

「三三人の集まれる處には我も其處に在るべし」と云へり然るに弟子と共に「我等の
 神よ」と呼びて祈を捧げたることなし己と弟子を總べて神を「我等の父」と云ひしこ
 どなし必ず其間に區別を立て「汝の父我が父汝の神我が神」と云へりキリスト如
 何に近く弟子に接するとも神と人との間には無限の距離あるが故なり彼は幾度
 どかく弟子の爲に祈りたれども弟子に向ひて我が爲に祈れと云ひしことは未だ
 曾て有らざりき
 キリストは又祈る時神の恩寵の特別なる表現に接したり此事は別に記したれば
 爰に絮説するを要せざるべしキリスト洗禮を受けて祈りし時天より聲ありて其
 神の子たるを公証し山上の變貌の時亦神彼に語る聲聞こゑたり夫れ是等の神異
 は特別超自然的にしてキリストにのみありて常の人間には有り得ざる所なるが
 然も我等が興かり得べき部分無きにあらず想ふにキリスト變貌の事ありて後疲
 勞皺苦心の痕跡一朝にして面上より拭ひ去られ初めて曇りなき面目を回復した
 るならん多少之に幾き光は我等にも注がれ得るなり面上の皺を延ばされ晴々し

光に浴して變貌し罪惡の汚染を洗ひ盡されんと欲せば祈禱するに如くはなし。死の涯に臨むときも心高潔にして信仰あらば昔ステパノが將に死せんとして目を舉げて天にキリストを見榮耀として眠りたる其の面影を浮ぶるを得ん。以太利の晨にも譬ふべき光を帶ぶる顔の美は祈によりて明くるあり神は我等の如き者にすら「汝は我が子なり」との聲をかけ給ふべく我等をして神の子たる能はざらしむる罪あり悲哀あり死あるに關せず猶眞に神の子たり得るものあるを信せしむ。我等が幾分かキリストの實驗に參し得る所は此なり。然れどもキリストにありし事は特別にして神たる性に屬することは依然たり。

約翰傳第十七章に載れるキリストの中保的祈禱を心を用ひて讀む者は如何に皮相的なる讀者と雖も祈禱の調子我等の祈禱と全く異なるを感すべし。此の祈禱に於てキリストは神と同等の位に立ちて益しイエスはエルサレムの神殿の庭に立ちてこの祈をなせしならん。踰越節の間は夜半にても神殿の扉閉ざされば縱令身は神殿の庭にあらざりしども其の靈は神の玉座の階を攀ちて祈りしなり。祈りて

曰く「永生とは獨一の眞の神なる爾と爾が遣し給ひしイエス、キリストを知る是れなり」『すべて我が屬は爾の屬、爾の屬は我が屬なり、且我彼等によりて榮を受く』。これ果して人の聲なりや。又見よ彼は微小なる身を以て祈れども其成否は我が知るべき所にあらずと云ふ如き態を以て祈らず。其祈りは神を動すの力あるを期して祈るなり。『父よ爾が我に賜ひし者の我が居る處に我と偕に在りて我が榮即ち爾が我に賜ひし物を見んことを願ふ』。彼は己の身に就きて祈るには其言巽順を極むと雖も人の爲に祈るに當りて我等の敢て用ひざる如き地步を占めたる言を用ひて死の霧最も濃き時彼は神に向ひて、創世より先に爾と偕に之を有し世界の滅びて後も之を有すべき我榮を賜へど祈りたり。見るべし、彼は眞の人にして我等と同じく苦悶と涙を以て祈りたれども、暗黒の極まる時にも依然として神なりき。彼の神體は哀傷の間より發越して實に人となりし神の永遠の子たることを知る。

キリストは今も猶祈るなり、在世の時と異なることは今は純に中保者として祈る

ことなり。之を思へば人をして轉た感深からしむ。ゲッセマ子の園に入らんとする時彼は弟子に云へり「汝等此處に居れ我彼處に往きて祈らん」天に在すキリストは今我等に云ふなり「勞し戦ひ苦み祈れよ我彼處に行きて祈る間」と彼は我等の爲に祈りつ終には我等を天に迎ふる時は祈るならん「父よ爾が我に賜ひし者の爲と偕に在りて我が榮即ち爾が我に賜ひし者を見んことを願ふ」と。



第十一章 基督と質問者

我れイスラエルの皆牧者無き羊
の如く山に散り居るを見たり

福音書の大部分を占むるものはキリストと個人との對談あり。キリストの教は人の意表に出づる所あり且解し難き所あれども亦一種の吸引力を具へ希望の要素に富めるが故に更に進んで其の深意を搜らんと欲するの志ある者期せずして周圍に集まり來れり來る者の熱心なる如くに迎ふる者亦熱心に之を待たり彼が一人一人に對して神の國の本意を説明するに意を用ひ勞を厭はざりしは多數の人に説教する時と毫も異なる所なかりき。

管に來る者を待つのみならず我より進んで追ひ尋ねたり。キリストは人の靈魂を

傳 督 基

尋ねて之を救はんために世に來れり。牧夫は迷へる羊の跡を追ふて行く。其行く路の常あらざるは、羊が常ならざる路に迷ひ出でし故なり。イエスは國の彼方此方を目途もなく彷徨ふもの、如し群集の中にあるかと思れば忽ち寂しき村里に入り、或は來賓堂に滿つる家に客となり、或は溪邊に立ちて人を救ゆ能く路上の人の顔に目を留めて、時には桑の樹に登れる人を呼び寄せ、時には井の傍にて水汲む婦と語る。キリストは何が故に斯く彷徨ひしか、何が故に之よりも規矩正しき生涯の行路を取らざりしかと問ふ者あらば、最も適當なる答は是なり、彼は探しつゝありたればなり。迷ふ羊の行きしまに、彼の路も定められたればなり。此類の話數多かる中より爰にはサマリヤの婦との對談、一人の青年との對談を撰びて學ぶ所あらんとす。前者は救を受くるに終り、後者はキリストを離れて去りぬ。二人の去就成敗相反映して、新王國建設の歴史に關する重要なる教訓を與ふるに足るべきか。

イエス、キリストは或時羊を尋ね歩きてサマリヤの地を過ぎしことあり。折しも日

傳 督 基

中の暑さ強かりければ、渴を覺てヤコブの井と云ひ傳ふる井の傍に息へり。其處には釣瓶無くして井深かりければ、徒俯して涼しげなる井の底を見遣るのみ。彼は身いたく疲れて又疲れを隠さんともせず、燒くる如き午日の下に力なげに偃り居るなり。此時隣の村より一人の婦出で來れり。後段の記事にて知らるゝ如く、此婦は村人には面を合すを憚る者あり。人は皆休む時刻に獨り此處に來りしはこの故なりしならんか。キリストは此婦を見るや忽ち別種の渴を催しぬ。肉體の渴は唯偶に之あり。獨り精神の渴は不斷彼を驅りて寧居する能はざらしむ。今しも起り來りし精神の渴は何時しか身體の渴を忘れしめ、迷へる同胞を拯ひ擧ぐるの事に着手せしめぬ。

イエスは先づ此婦に一杯の水を乞ひしに、婦答へて曰く「ユダヤ人とサマリヤ人は交際を爲さず、汝はユダヤ人なるにサマリヤ人たる我に飲むことを求むるは何故ぞや」と焉ぞ知らんこの一人のユダヤ人はサマリヤ人に關係あり、萬國万民に關係せざるなきことを請ふ見よ、イエスが此よりこの婦に應對するの道如何。

基督 福音 傳

先づ必要あるは婦の心中に需め望むの一念を喚び起すことなり。イエスは別に永遠に渴かざらしむる水あり、靈魂の底より湧き出で、甘美なる麗水涸るゝ時なき泉のあることを語り出でぬ。『我が與ふる水は其中にて泉となり湧き出で、限無き生命に至るべし』。婦は未だ言の意を解し得ざりしも、麗ながらに言の美麗なるを感じたり、東方の照る日曇り幾年月の旅路思へばいと長かり他に何物か我が心を満足せしむべきものなからんやとの思動き出でたり。乃ち求めて曰く『君よ我が渴くことなく又此處に水を汲みに來らぬために其水を與へ給へ』。此れ固より幼稚なる志願なれども、事の端緒なり。前の蕩子の喻話に於て彼をして故郷を慕はしめしは親の恩愛にあらざして先づ麵包ありしなり。聖にして餘ある麵包のみぞ究困の極に於て慕ひ得る天なるされ小なりと雖も大事の端緒なり。蕩子は云へり我は飢ゑて死なんとす。此婦は云へり我は渴きてと。彼等饑ゑ又渴きて其精神も亦衰へつ終に面を家郷の天に向けしなり。談話は次第に深き處に入りぬ。婦に救を受くる必要を知らしむるのみにては足らず又己の罪あることを認めしむるを要す。

基督 福音 傳

キリスト乃ち曰く『行きて汝の夫を呼び來れ』。此命令は突如として來るが如く人をして奇異の感を起さしむ。然れども男女の心の中を知り盡せる此の人は十分に爲すべき方を知れり。靈魂の名醫は今や伎倆を顯せり。彼は病を癒すのみにあらずして良く之を診察す。病を知るは之を癒すの第一歩にして又最も難き所あり。キリストは堂々として歩を着けぬ。精微透徹一毫の曇を帯びざる眼を以て婦の頭より足まで観通す所なく、具に一生の罪惡を知り一言以て其秘密に觸れぬ。我等は覺束なく患部を探り藥を要せざる所に藥を塗る。キリストは的然として其の肺臍を打ち其の良心を刺し貫き過ぎにし生涯の顛末は茲に忽ち發かれぬ。最早包むも益なし。婦は云へらく『我に夫無し』。之には羞ぢ怖れ一には此人の知力の程を檢し見て虚實を探らんとせしあり。イエスは哀憐を帯びたる反語を用ひて應へぬ。『汝の言ひしは實なり今有る者は汝の夫にあらず』。此一言の中に如何に様々の醜辱罪惡、非情の物語を含めるか。我等は仔細に知る能はざれども、婦の歴史は此一語に束ねらるべき種類のものなりしを知るを以て足れりとす。婦は云へらく

「君よ我汝が預言者なるを知れり」と今は何をか包むべき己が心事も又生涯も斯人の目には裸躰とありて露るものを彼は預言者なり我は罪人なり唯恥らひて彼の前に立つあるのみ。

罪深き一生も若し細に分析しなば中には眞實無垢なる戀愛もありしなるべく又道ならぬ痴情もありしならん之に係らずキリストは唯一廉の罪を擧げて、婦をして万罪悉く發かれたる思せしめたり生涯の全般は唯これ一個の罪の歴史と謂ふも亦可なること往々にして之あり以前の事詮すれば皆この一罪に歸着し、以後の事も遂に同じ罪の影と苦痛を曳かざるなし此一の罪を引き出だせば之と共に前後のもの盡く引き出ださるキリストはこの婦を救ひ上げん爲に先づこの一個の罪を引き出だして、一生の首尾盡く全知の光に曝されたるを覺せしめたりさて之より以下の問答は人の誤解し易き所あり普通の解釋に依れば婦は既にキリストの預言者なるを告白し果して預言者ならば幸ひ其判斷を乞ふべき問題は世界宗教の中心は何處なりとの問題より重大なるはなしと思ひたれば直に之を以てキ

リストに質したりと釋く予は思ふにこの解釋は未だ當れるものにあらず婦にして既に斯く感動したりとせば之より緊急なる活問題の質すべきものあからんや今や婦は初めて我に反りぬ我に反りて其父を冤め初めたり罪を感じ欠乏を感ずるの心より進んで神を冤めたり知らず我が神は何處に見出さるべきか我等の祖先は目近く聳ゆるゲリジム山上にて神を拜したるに獨り我は神を尋ねて遙々エルサレムまで行かざるべからざるか祖先が神を見出したる此山にて神に謁する能はざるかど教主はゲリジム山を語らず又エルサレムを説かず唯曰く神は靈なれば拜する者も亦靈と眞を以て拜すべきあり」

キリストの説き出づる所意味深長にして取り擾したる婦の心には解し得べきにあらず動もすれば談話の筋に取り離れんとするより婦は説明する者を待ち望めり曰く「キリストと稱ふる教主の來らんことを知る彼來らんとし總ての事を我等に語るべし」彼の「一語に力を込め他人の明むる能はざる所の疑惑も一切この教師により明めらるべしとの意を表せり思ひきや尋ぬる光は咫尺の近きにあるを。

之に會はんとて知らぬ都に行くまでもなく、永遠の道は現に其場にあり。『汝と語る所の我は其れなり』。キリストは斯く語りつゝ、斷定と約束の意を併せ傳ふる眸を注ぎたり。目と相合ふ時、心と相會ひて、永に離るゝことなし。婦は始は唯自己の罪と欠乏を悟りたりしが、今や己の救主を知り、救主を知るに由りて父なる神を知り得たり。之より以下の話亦味深し。此時弟子は還り來りて師の一婦人と語るを見て怪みしも、何の用ありてかを問ひ出づる者もあかりき。唯見るイエスの顔に愉快禁じ難き色あり。牧夫迷へる羊を見出したる時に、父が逃亡せる兒に回り合ふ時に顯るべき顔色は幾分かキリスト此時の顔色を寫すらん。其喜は失はれたる靈魂を見出し得たる救主の喜なり。弟子等は良習く言無かりしが、キリストの疲れたるに心付き又食して後時間長きを思ひ出だして殷勤に食し給へ』と願へり。然れども彼は既に井より汲める水を要せざれば、亦市より買ひ來れる麵包を要せず。人の知らざる食物を有したり。『我を遣しゝ者の旨に遵ひ其業を成し卒るは是れ我が糧あり』と云ひて、晴れやかなる眼を舉げて、手には麥の一穂を持ち、見渡せば一面に黄

基督傳

基督傳

熟して鏢を入るゝ日もはや近づける野面を打眺めたり。彼が今着手せる大業は他日弟子之を成就すべく、播く者も刈る者も共に歡を成すの日來るべきことを思へば如何ぞ喜なかるべき。人若し能く同情を注ぎて此處を讀まば、救主の心裡の消息を傳へ深遠にして感動の力あること此一段の如きは四福音中他に見ざる所なり。彼が眞實に樂みし所を明にし又一生の目的を重じたるを明にすること此一章に比ぶべき所あらず。此日の喜は茲に盡さず、婦は好音を郷人に傳へキリストは二日間此地に留りて播き又刈りぬ。

次に記さんとする當める青年の話は前條の婦人の話とは全く趣を異にし、初には遙に望有りと見えたり。サマリアの淫婦の類にあらずして、年少秀麗人は其精神の清白なるを稱すべき人なりき。一見して其風采に親愛すべき所ありしと見え、未だ道に歸せざる者ながらイエスは見て之を慈めりとあり。彼は齡猶は少かりき。實に

基督傳

世にも云ふ如く年少く牀健なるは一の寶あり。『用ひて竭きざる富其身に存す。守
 錢奴は千兩國を擁して力あく嘆息するならん。我に垢れざる僻まざる心もがな。惡
 を厭ひ美を愛する爲ならでは色を易むざる晴々しき眼もがな。人の前に跪くを屑
 とせざる硬き脊骨折り難き膝もがな』と。此青年は又從來の操行頗る潔き人にてあ
 りき。幼時より盡く誠律を守り、自ら識りて惡事を爲せしことあらず。彼が自ら識ら
 ざる心裡には罪と弱點とを孕みて、早晚暴露せざるを得ざるは憐むに堪へたりと
 雖も、凡人より見れば彼が今に至るまで身を持して過おかりしは羨むべしと思は
 れたるならん。若し夫れ不潔なる行に由りて顔色枯衰せる徒は彼の血色好く眞率
 なる顔を見て言ふならん。

善き事と知りたらば之を愛せしものを
 今に於て我が得ま欲しく願ふ譽はたい
 君の如き純潔なる青春の意氣なり

彼は又富める者なりき。由來富は精神の力を壓搾して其情熱を冷却せんとするも

基督傳

のなるに、彼が富を擁しながら猶幾分か一個の本領を維持し得て逸樂の杯を飲ま
 す正義を行はんとするの志を存せしは多しとするに足る。是等の好事ありしは我
 等の許すを遲疑せざる所あり。是れありたればこそイエスは一見親愛の情を以て
 彼を迎へたるなれ。

此の少年がイエスの許に來りたる狀亦愛すべきものあり。サマリヤの婦に對して
 は先づ其心を封せる罪と俗念の硬皮を刺し透して渴望心を喚起する必要ありし
 とは異なり。此の少年は馳せ來れりどあり思ひ立ちし時一刻も早く行かずば未だ
 賜を受けざるに熱心の冷却せんことを恐るゝに似たり。彼は近づき恭しく跪きて
 『善き師よ』と呼び直に問題の中心に入りて『永生を繼がん爲には何をなすべきか』
 と問へり。之をサマリヤの婦の狀態と對照すれば雲泥の差あり。彼は全身盡く病め
 る者此は身に病徴なきに似たり。然れどもキリストは決して欺かれざる慧眼を以
 て皮相の下を洞見し、直に青年の言を捉へて其眞意を反問す。汝は我を善き師と稱
 したるが是れ抑も何の意なるや。形容詞としては美しき言なるが、汝は今單に一片